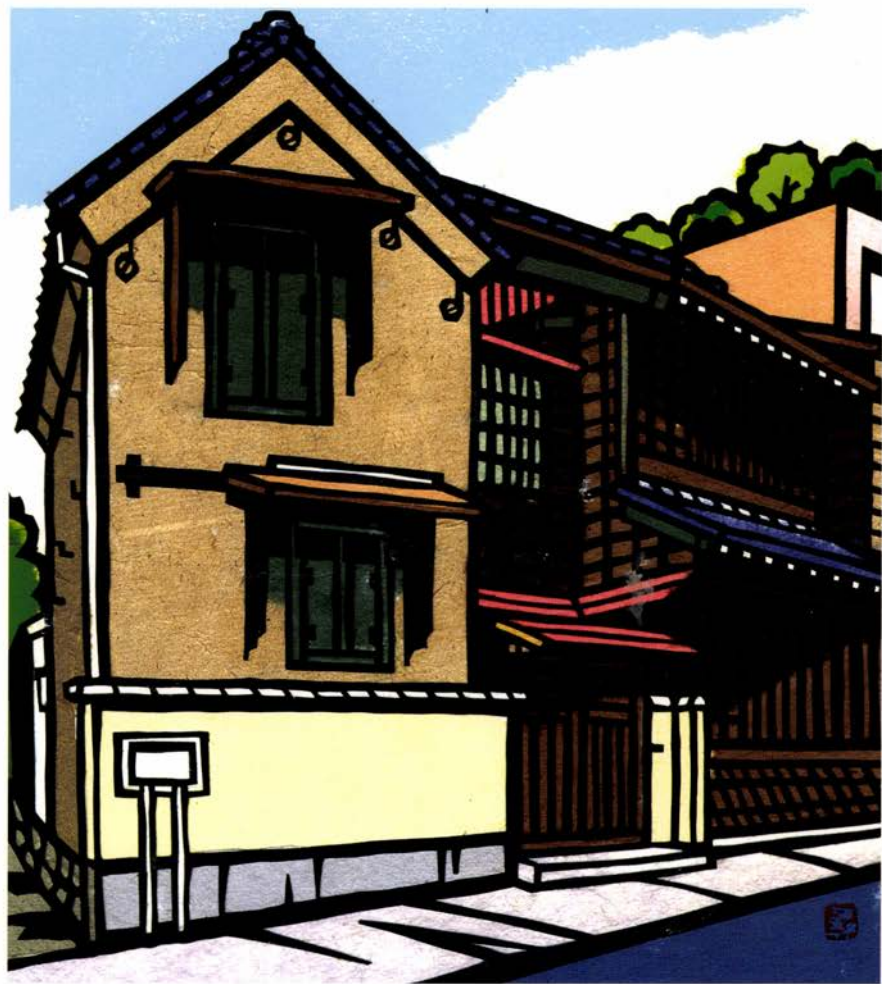


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十六年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇四六号



日川協加盟

No.1046

七月号

路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷り込み用紙で――

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成25年9月号から平成26年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に
誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようにお願いします。

「檸檬抄」課題

牧野 芳光・古久保和子 共選

発表	月	課題	締め切り日
26年	9月	やさしい	7月15日
	10月	パン	8月15日
	11月	黙る	9月15日
	12月	年忘れ	10月15日
27年	1月	太い	11月15日
	2月	平凡	12月15日
	3月	羽ばたく	1月15日
	4月	学校	2月15日
	5月	旗	3月15日
	6月	リクエスト	4月15日
	7月	決心	5月15日
	8月	きっかけ	6月15日

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 西出 楓 楽

檸檬抄 牧野 芳光 共選
古久保 和子

川柳塔社

句碑燦燦

小島 蘭 幸

日本一の川柳の町、岡山県久米南町には、川柳の小径・公園があります。ここには全国各地から川柳愛好家の句碑が約三〇〇基建立されています。ひだまり広場には、故人となられた歴代の川柳塔社主幹の句碑が建立されていて、弓削駅前には、川柳雑誌を創刊した麻生路郎の句碑が建立されています。私は第20回川柳塔まつり、川柳雑誌・川柳塔90周年記念大会までに四基の句碑に会いたくて、車でひとり久米町南町弓削を訪れたのです。

俺に似よおれに似るなと子をおもひ 路 郎

駅前広場の句碑を見つめると、ふうっと尾道文学室に飾られている路郎の一枚の写真が浮かんで来ました。スックと建った句碑と路郎の立ち姿が実によく似ているのです。

うき草は浮きくさなりに花が咲き 生々庵
旅まくら雨にしあれば雨の詩 栗

うろこ雲一枚こぼれ亡母の窓

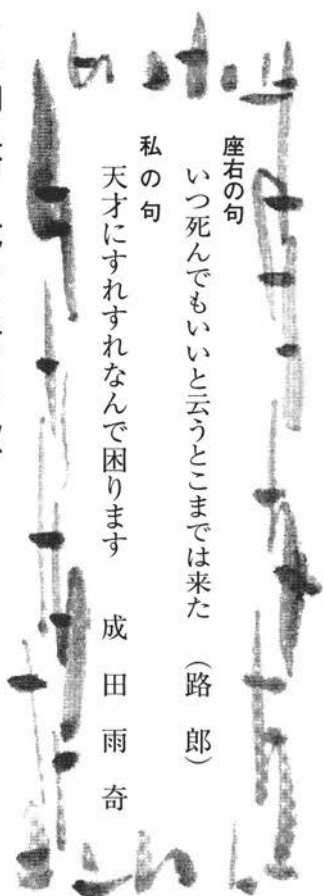
薫 風

美しい緑に囲まれて、ポツと桜色の生々庵の句碑は歳月の重さが滲み出ています。栗・薫風の句碑は、小径公園25周年記念として建立されたものです。歴代主幹の三基の句碑を見つめていますと、川柳塔の歴史が走馬灯のようにくるくると鮮やかに浮かんで来ます。

路郎・生々庵・栗・薫風の四基の句碑に、7月に発刊する、川柳雑誌・川柳塔創刊90周年記念・合同句集『川柳塔』の報告と、10月4日に開催する記念大会の盛会をしっかりとお願いしておきました。

虹を抱く人のモラルは美しい 正 宏

竹原川柳会会員で故・沖浜正宏の句碑は木もれび広場に建立されています。川柳塔社同人でもあった正宏は、句碑除幕の日の挨拶で、「句碑は私の分身です」と力強く誇らしく言われたのです。「句碑は分身」この言葉が私の中に魔法のようにありましたので、今回の句碑参拝になったのです。私もいつか、ひだまり広場に句碑を!! そう思いながら川柳の小径・公園を後にしました。川柳塔の90周年大会があるからと一週間ずらして下さいました第66回西日本川柳大会は10月12日に開催されます。



座右の句

いつ死んでもいいと云うとこまでは来た (路郎)

私の句

天才にすれすれなんで困ります 成田 雨奇

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「一葉ゆかりの伊勢屋質店(本郷)」

■巻頭言 句碑燦燦

川柳不毛地帯

小島 蘭幸 …… (1)
都倉 求芽 …… (2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭幸選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 ⑮

木津川 計 …… (44)

西尾 栞句抄

…… (45)

自選集

…… (46)

温故知新

…… (49)

水煙抄

川上大輪選 …… (50)

新川柳鑑賞 ②⑨

麻生路郎 …… (73)

■特別寄稿 刻下の路郎

高鶴 礼子 …… (74)

誹風柳多留一二篇研究 13

英語 de Senryu ③⑪

吉村侑久代 …… (82)

江戸を楽しむ ⑮

小栗 清吾 …… (83)

川柳不毛地帯

都倉 求芽

どこかの句会の帰り、阪急烏丸の駅を地上へ出たところで同じ学区内のご婦人と一緒になった。華道の先生で出稽古の帰りとかで同じ電車の方だった。歩きながらのお話で最近とお弟子さんが減ってきて、特に若い人が来なくなった、もうお華もおしまい、とかぼしはじめた。そんな事なんです、こんな句がありますよ、と小出智子さんの「見る人は見ている駅の未生流」を教えてあげた。私にしてみれば少しは気休めにと思っ
て言ったのだが、なんとその人は『未生流』にグワンときたらしくて「いやいや、どこの駅は□□流に取られた、隣の駅も△△流になった」と、そちらの方にいつてしまつて後が続かなくなつた。家の前で別れたが難しいものだと思ふ。落ち込んだ。実は二十何年か前から私の方の学区内で、年4回地域新聞が発刊されている。

愛染帖

檸檬抄

「リラックス」

竹治ちかし・

新家完司選……(84)

それに私の川柳を毎回5句ずつ載せさせてもらっている。が今までなんの反応もない。時たま「ウタ」を拝見してます、といった程度。

一路集

「牙える」
「テーマ」
「栄養」

浅田隆樹選……(91)

民族の詩歌⁽²⁵⁾

七反田順子選……(93)

せんりゅう飛行船⁽⁴³⁾

三好專平……(94)

初歩教室「趣味」

新家完司……(95)

川柳塔鑑賞

山口光久……(96)

水煙抄鑑賞

三島淞丘……(98)

津軽発おもしろ景色⁽²²⁾

松原寿子……(100)

六月本社句会

高瀬霜石……(101)

句会燦燦

井上一筒……(102)

各地柳壇(佳句地十選／桑原道夫・安土理恵)

井上一筒……(106)

柳界展望

各地柳壇……(107)

七月各地句会案内

柳界展望……(120)

■編集後記

朱夏・勝弘……(122)

座右の句

今日よりも明日へ大きな穴を掘る

(たもつ)

私の句

背負うものちよつと減らせばまだ跳べる 初代正彦

7年前に自治連会長からカルチャールの一角として川柳教室をしてくれないか、と依頼があった。喜んで引き受けた。最初11名の出席があったが、2名はこんな川柳はおもしろくない、とその日に帰られた。あとのみなさん、はじめははじめだがとにかく初心も初心。格言、報告、説明ばかり。それでもわかり易い句、身のまわりの句からはじめて月2回、100回を越えるころからぼちぼち句らしくなってきたが、やれやれと思えばまたぞろ報告に戻る。毎回一題を3句宿題にして次の回に出句、入選句と没句もすべて解説をつけて没句を添作。軸も最初3句だったが最近はいろいろな角度から10句に増やし、時には有名句も併せ句報として次回にもう一度読みあげる。そんなこんなで最近はその新聞に会員さんの入選句を発表している。が、それもやはり反応なし。どうにも恥ずかしく大変残念です。



小島蘭幸選

弘前市 福士慕情

朝まだきベッドの妻が消えている

徘徊の妻を捜して雪の藪

葉呑む時間に妻が見当たらぬ

徘徊は妻の楽しみかも知れぬ

言うことを聞かない妻と聞く妻と

徘徊の妻の手綱を捌けない

和歌山市 福井菜摘

アングルを変えるところとよとした美人

糠床を宝に母の四季巡る

相槌がくすりになつてゐる介護

アンテナを張つてわくわく生きている

ギブアップはしない明日の風を待つ

寺社巡り小さな旅はまだつづく

和歌山市 木本朱夏

おもかげを畳んでひらく紙の鶴

おもかげをほどよく包む濃むらさき

檸檬忌のレモン一個と暮れてゆく

さびしいものを視ている夜の真ん中で

通り雨に打たれた傷がまだ癒えぬ

カラカラと回る此の世のルーレット

河内長野市 山岡富美子

九条がだんだん草書体になる

わたくしは褪せて面影の鮮やか

ヴィンテージ十年物を着ています

冷蔵庫コントの種も切れている

ハルカスで一日遊ぶ逃亡記

面影を追えば蛍の宿に着く

堺市 栞原道夫

学校という戦場に咲くチューリップ

教卓の上を歩かされている毛虫

毛虫対毛虫戦うこともあり

ひよこひよこ猫ひよこひよこケセラセラ

郵便局へ真っ赤なものを出しにゆく

坂をのぼる坂をふりかえるために

鳥取県 細田裕花

心にも根っこがあつて花が咲く
囀つてヒバリは精一杯ヒバリ

巢立つ子の首の細さとスニーカー

香芝市 大内朝子

太陽が溶け込み川の水は青
寄り道は遠い青春はるまつり
プレイバック青春SLに乗る
青空と夢を包んでいるキャベツ

たましいの青い部分にある校歌

がちんこのジョークは傷が付きやすい

西宮市 亀岡哲子

ふつつかな嫁でそのままのまんま

じゃんけんばん遊びながらの終の坂

咲き急ぐ花とお喋りしてうらら

追い風のフオローで五月駆け抜ける

数値出ぬ痛さ医者にも分からない

深読みをすると怖さに突き当たる

松江市 川本 畔

温かい返事 貝母^{ばいも}が含^はらんだ

完璧を目指して牛は反芻^{はんそう}す

本めくる風がときどき欠伸する

片道切符一枚握る旅であり

モノリザの視線わたくしだけのもの

鍵あける海は静かに頷いた

橿原市 居谷 真理子

レコードの溝に昭和が時雨でる

どんとと歩くどんとん振り捨てる

シュレッダーにかけた髪の毛も切った

燃えながら沈む夕日もわたくしも
わたくしの道に戦火の跡がある

橿原市 安土理恵

いいたいこと言えないこれも五月病

まだ何か知りたいですか花水木

あいまいな返事の意味はようわかる

ちぐはぐな会話どっちもどっちだし

頼つてた男の足を拭いている

青嵐わたくしはまだ負けません

三田市 久保田 千代

空気にはなれず疲れる差し向い

不即不離 適温保つ一つ屋根

無理だろう境界線のあるうちは

それなりの不協和音もいいもんだ

狭い殻やぶつてみたし昨日今日

許すことばかりで自分見失う

島根県 伊藤 寿美

LP盤今も聞こえる亡母の唄
巢立つ子も鳥も競って湖を蹴る
煮ころがし届くやさしい森に住む
童話の森から帰って来ない雀たち
独居十年なお玄関に置く亡夫の靴
K点を越えてやさしい鳥になる

八幡市 今井 万紗子

懐が寒いお日さま抱いている
人が好き声する辺り豆を蒔く
やさしさにぼつと灯がつき春間近
いつの世も今がステキと思いたい
錯覚でしたワインレッドの陽が沈む
雑沓の中旨い話を聴き分ける

堺市 村上 玄也

歪曲と誇張に塗られてる歴史
煩惱を拭いきれない僧の顔
衰えの見えた五感に鞭入れる
飲み忘れの薬ときどき捨てている
豹変は聞くが虎変もありそうだ
六甲おろし覚え関西人になる

高槻市 片山 かずお

寡黙な人が喋ると言葉重くなる
仲良しの証しだ見つめ合っている
父の血を引いた頑固が直せない

何はさておき元氣笑顔が要る介護
野暮な夫に留守番させて妻は翔ぶ
追伸の方が格調高い文

倉吉市 牧野 芳光

休んだら不安動けば肩が凝る
幸せなことに頭が下げられる
万歩計つけると遠出したくなる
温室で中途半端な味になる
太陽はお喋り秘密守らない
絶滅危惧種にされてしまった喫煙者

奈良市 大久保 眞澄

鼻メガネでメールばあちゃんいじらしい
翔んでいる妻につけたい迷子札
夜桜も酒の匂いと人に酔う
大汗をかいて発声待つビール
オバチャンが笑う全身シワにして
陰気さが値うち高める骨董屋

松山市 宮尾 みのり

歳相応のカラーが似合わない不思議
着る女を選ぶ真赤も灰色も
孫と手をつなぐ支えてもらおうよう
現実を血圧計が弾き出す
一筋を歩む固執と言われても
たのしかった頃の夢でも見ましようか

鳥取市 森山盛桜

温度差は一筆箋で来た返事

泥臭い声カラオケの自己主義

校正で直せる程の癖じゃない

人生の終わりに付ける感嘆符

まんべんに散るふりかけの従順さ

それぞれの訳を運んでゐる電車

松原市 森松まつお

ビリケンの足コチョコチョとやってみる

カップルも外人もいた串かつ屋

豆ごはんおかず一品あればよし

ブランコを漕いで気分が悪くなる

ホームセンター妻とあれこれ小半日

ケアハウスばかりが増えてくる街だ

豊中市 水野黒兎

十二神将も時に笑つてみたい春

旅便り丸いポストがよく似合う

古稀過ぎて婦唱夫随が板につく

境内で楠の大樹をまづ拝む

ゆるやかに時の流れる城下町

書き足りぬことを補う花切手

米子市 成田雨奇

気の強い女も老けてゆくらしい

不機嫌の原因ひとつ寒いこと

母の日にあやかり酒をもう一本

ありがとう形にしたら酒二本
札束が降ってこないか空を見る
歩くにも酒を飲むにもゆつくりと

大山市 金子美千代

朝昼晩用心深い衣替え

たまつた家事一掃の雨二日

失敗が財産ならばたとある

エネルギー不足補うチョコ二つ

母の日に母もういない現実よ

アナログの時間ひとりの物思い

三田市 上垣キヨミ

私のハートに赤い血が滾る

川柳も入れた笑いの美学聴く

胸底の金剛石を研磨中

リバウンドするからしないダイエット

元氣だと子には知らせる文を書く

若者が優先席で繰るスマホ

鳥取市 平尾菜美

生き延びた介護椅子です鍵さがす

助けてと言えぬ孤独死今日もまた

不発弾抱く犬猿の仲しずか

汗結ぶ鍬がやる気を醸し出す

遍路旅愚痴難儀など忘れ去り

泣き笑い紡ぐ仲です夫婦箸

札幌市 小沢 淳

息巻いてみても輪の中抜けられず
長く生きこの生き様が問われてる
個人情報お隣さんの氏索性
「鈍感力」鍛えやつとこ生きている
賞味期が過ぎて味わい深い肉

札幌市 三浦 強一

青春を包む昭和の包装紙
偏差値じゃ分からね人としての価値
黄泉までのカウントをする万歩計
秒針がだんだん速くなる齡
最後には独り引きずる縄電車

青森県 松山 芳生

神様がくれた苦と楽のバランス
背伸びした土筆が掴む陽の光
図書館を賢人らしい貌で出る
光るものに触れたくて古本屋を覗く
ふところの海のおいを詠んでいる

黒石市 相馬 一花

ご褒美に社長の娘を押しつける
副賞のない感謝状濫発す
カクテルを天女の胸で踊らせる
最高の空気を吐いて山笑う
君が代に背筋が伸びるテレビ席

弘前市 浅田 隆樹

あくびするなぜか幸せふと思う
下宿屋は秋刀魚を出して人を見る
思い出は楽しいことを濾していく
薬飲み歯をみがいたら自由時間
春の陽に黄色い帽子よく走る

弘前市 稲見 則彦

ほろほろと母の涙は洩れるまで
思い出はみんな違った箱の中
終いにはやつぱり白になる予定
締めすぎたネジが戻らず不眠症
絵描き歌そっくり妻が出来上がる

弘前市 岡本 花匠

日本一さくら納得旅のひと
サイトサイトにほだされ育つ昭和っ子
春が来て自然の情に和まされ
春の彩求めて走り活を得る
良く撮れた笑顔写真で極楽土

弘前市 今 愁女

懐かしの夜汽車昭和も遠くなる
正社員になれよと息子大学へ
日本の節季さくら餅から柏餅
桜花済んだお城につつじ愛で行く
菜の花の開花宣言人を呼ぶ

弘前市 須郷井蛙
名画と知らず引越しゴミにされ

復興もリニアも五輪も忙しい
節電をしようとゴーヤ南側
アンテナの妻がニュースを寄せ集め
百までは年金もらう万歩計

弘前市 高瀬霜石

字余りと字足らず仲のいいふたり
あの人のコマーシャルならほんとかな
涙の数と汗の数とは比例する
イジワルに染まり役人らしくなる
ロボットがニンゲンよりもあたたかい

弘前市 高橋洋子

孫五人毎年贈るランドセル
疎遠なる君を気づかう風便り
花筏流れ流れてその果ては
歩み出す一歩に覚悟秘めて春
夫婦自立健康年齢延伸中

さいたま市 星野育子

駐輪禁止を読めない人ばかり
定年後ネクタイする日白か黒
ライバルの弱点を知り落ち着かず
大半は老化年金孫のこと
いつ死んでもいいなんて靴新調

東京都 まえで とよこ
ペランダに立てた小さな鯉のぼり
子は育つ小さいままの鯉のぼり

北国のさくらさくころ鯉幟
粽むす湯気につつまれ祖母と母
世界一の車輛をつくる工場の和

東京都 岸野あやめ

九十の今は十九の頃想う
初恋の話が好きな認知症
きょうだいは七人私生き残り
仏様縫るわたしにお情けを
今日はもうみ仏さまもあちら向き

横浜市 菊地政勝

ぎりぎりの財布に喜劇つきまとう
点滴につながれ延びる命の灯
脱皮への過程と思う反抗期
分かるふりして見入ってる草書体
失敗も似た者夫婦笑い合う

横浜市 小野句多留

無呼吸の断に日常こわされる
五月晴れなのに私はカヤの外
春眠のどこまでなのか正常値
連休に電話で済ます子の家族
艶のない話題ばかりで暗い居間

富山市 島 ひかる

亡き友へ思い巡らす山桜
奥山に咲くシヤクナゲの独り言
七夕へちちの名ははの名私の名
満月と話尽きないテント泊
歎を打つ時々青い空眺め

可児市 板山 まみ子

母の日になんとなんとこのバラ五本
夢でさえ会えなくなつた遠い母
母の日は儀式になつて花相場
連休が終り出かける行楽地
増やさない決心揺らぐ花の苗

愛知県 早川 遡行

楽しくてしているのではない散歩
ひとりだけ降りて見渡す無人駅
木洩れ日に鳥の声聴くいい目覚め
でむしが垣根伝いに旅に出る
痛い目にあつて変わった主義主張

大山市 関本 かつ子

髭剃ればまだまだ似合う野球帽
スーパ―に重心移る街づくり
初ガツオ小振り選んで箸二膳
保険証持つて遠出の句会場
良いことを数え消している不満

京都市 高島 啓子

料亭の主人が水を打っている
ここまでは言つてもいいと釘をさす
趣味で打つ蕎麦にとどめておくことだ
それからは迎えに行くこと決めて
捜さないでと沖へ出ていった

京都市 藤井 文代

言いつぎたか弁解で喉からからに
人の噂愉快だつたら消化でき
不愉快な話にもある栄養素
元気だけで今は称賛貰えます
転ぶまいとその気が占めて転んでる

京都市 梶本 宏子

マイ箸を持たされているエコ家族
茜雲西方浄土からサイン
回り道したいおとこが見当らぬ
キッチンで乱雑生きてる証し
一度した寄付が毎月言つて来る

亀岡市 井上 森生

年輪を一気に数えきる根気
数独やパズルで強い脳を練る
年号も三つ変わると生きにくい
喜寿通過どうも世間は早送り
呆けまいとつい頑張りの癖が出る

長岡京市 山田 葉子

雨上がり庭の雑草やつつける
仏壇に頼む何とかなりそうだ
後期突入女の顔を取り戻す
全没で機嫌良く帰るのも芸
年金暮し消費抑えるしかないな

大阪府 桑田 ゆきの

オバマさん八方美人になっていた
母の日の母すつぴんで普段着で
幾つでもニュース溜めてる地獄耳
花時計満開までをお喋りで
吊り橋が揺れて一步の不整脈

大阪府 野田 栄呼

楽しいな百均ならば直ぐ手が出
人待ち顔空のポストが欠伸する
8バーで頭鍛えるのは今だ
思い出を紡ぎあため呑み仲間
髪染めて鏡に問うは若返り

大阪府 初山 隆盛

高ぶりを味わう句会懐かしむ
残照に融け合う彩のお人柄
四季めぐる愛は炎の掌の中で
焚きつけた火の粉払わず知らん振り
九条を盾に矢弾をはね返す

大阪府 米澤 俣子

あるがまま生きてこだわり残さない
先ず孫の任地の天気予報見る
血流をよくするような赤い服
献血に呼びとめられた若づくり
わだかまり消す浅漬けの茄子の青

大阪府 阿野 壽美子

幼子のなんでなんでの好奇心
ベットでもよく知っている相性を
婚約がうすうす判るワイドショー
帰り道家の光にホッとする
世界見て日本良い国感謝する

大阪府 池上 清治

桜散り新緑匂う今が好き
心地よい匂いに負けて寄る喫茶
母の日はカーネーションの香が匂う
どんたくの囃し今でも胸騒ぐ
阿波踊り足がむずむずする祭り

大阪府 井丸 昌紀

スポットを当てられ急に怖じ気づく
手遅れを言われてからの粘り腰
リセットのできない過去にある値打ち
ファッション誌まねそっくりな顔ばかり
風の吹く方へ背中を向けておく

大阪市 岩崎公誠

古稀越えるとみんな同じと笑いあい
四時起きで手の動くこと確かめる
古いこと並べ先輩まだ元氣
老々の介護労わることばない
修飾を加え一句を整える

大阪市 江島谷勝弘

振り込みに怪しく映る歳となる
いまさらに思うカミさん手強いと
それ以上喋るなど妻が目くばせ
なんでだろ後始末だけ任される
普通に暮らしては税上げられぬ

大阪市 榎本日の出

核のゴミどんどん増やす再稼働
お茶にして人の噂を食べました
飛ばないと鳥にはなれぬ千羽鶴
家計簿が傾きだすとみな元氣
最後には頭の差だと諦めた

大阪市 榎本舞夢

好天気掃除洗濯多忙な日
目をやると草木も芽吹き花も咲く
連休のプラン取り止め練り直す
美術館巡りちよっと芸術家
主人ともゆつくり語るいい日あり

大阪市 大川桃花

介護する妻テキパキと手厳しい
草の実をつけて獣の道抜ける
百匹ぐらい一口でつせ白子乾し
放り出したみみずも戻す植木鉢
ばれてても言い訳だけはする女

大阪市 笠嶋恵美

環状線わざわぎ乗って見る桜
納骨式供花のごとくに山桜
オデコ打つ見ているようで見ていない
回復期付添い無しのタカラヅカ
薬師如来亡父に会うてるような鼻

大阪市 神夏磯典子

酒好きの仏にのみす花見酒
引き算がうまくていつも損をする
祖父ちゃんが説くとやんわり効いてくる
次に会う約束へ痛いほど握手
百度石深い祈りに触れた艶

大阪市 川端一步

優雅とは遠い年金慎ましく
美人の湯上った妻を褒めておく
ハローワーク若者たちの戦場だ
敗戦譜並べて明日の糧にする
兄ちゃんになるとはしゃいでいる曾孫

大阪市 熊代 菜月

孫の恋甘くすっぱいレモン味
里山を遠いと思う親不孝
お互いの癖ゆるし合う友と旅
亡き母の笑顔の夢や春彼岸
電話口元氣な声の友が居る

大阪市 古今堂 蕉子

知らぬ間に記憶断捨離されていた
住めぬ土地五月は五月の花が咲く
立泳ぎ風のない日の鯉のぼり
紙一重壁の厚さにうずくまる
ビリケンさんフランス人とは知らなんだ

大阪市 小谷 集一

少し捻子ゆるめて世間広くみる
輪の中で見て見ぬ振りが上手くなる
失敗を踏み台にして生きる知恵
肩書きの過信自分を見失う
地の塩となれ夕焼けのわらべ唄

大阪市 近藤 正

微力でも補い合えば事は成る
消費税こんな重たいものなのか
原発ゼロ死の商人が臍をかむ
風流人やはりミナミに足が向く
被災地にまわす資材を五輪喰い

大阪市 坂 裕之

声出さず頷くだけで分かり合う
散歩道負けん気出してひざ笑う
仲間だと軽く言うなよ初対面
泣き言は言わずこつこつやっていく
叱られてやっと気が付くわたしです

大阪市 佐藤 忠昭

ジパングが旅行に行けと尻叩く
酒飲まぬ約束なれど地酒あり
駅前の酒屋の紹介良い店だ
仕上げには煮汁にお湯のスープ飲む
一人旅寂しくないとは強がりか

大阪市 田浦 實

散るさくら滴る緑生む桜
ハルカスから民の籠を見る気分
御破算で願いましたの日日新た
死ぬという大きな任務のこつてる
平均余命無手勝流のケセラセラ

大阪市 谷口 義

なんかやあやって机の上に置く
こんなにやくのあるのとなひのとは違う
初詣しなかったから軋けたのか
明日はあしたの洗濯物がある
昔からお世辞は下手な方でした

大阪市 津村 志華子

遠い日の記憶の中にホー堂
おほろ月わたしひとりの物想い
窓叩く亡母が来たのか風だろか
あじさいもわたしも明日は明日の彩
しよぼしよぼと雨もまた良し花の寺

大阪市 津守 なぎさ

新緑に心洗われ行く車窓
借景も見事窓枠美術館
消費税以前追加をしたさら地
魚籠覗く癖堤防の人いきれ
サーファーの轍は他人を巻き込まぬ

大阪市 寺井 弘子

過疎の村心なごます鯉のぼり
高所恐怖あべのハルカスそっぽ向く
谷崎の全集書架に眠らせる
鈴の音の散る四国路の遍路笠
若田船長絆をつむぐ和の心

大阪市 原田 すみ子

GWニュース見ながら飲む番茶
飲み込んだ言葉が溜まる胸の内
二円ならシートも平気大人買い
五月晴れそれでいいよと背中押す
これ着たら人の居る方足が向く

大阪市 平嶋 美智子

嫌な思い自分のせいにして捨てる
すり寄ってみても心中読みとれぬ
元氣印先輩とハグ気をもらう
頼なでる風は初恋呼びもどす
タレントが笑う番組おもしろない

大阪市 伏見 雅明

からからの情けに人が干乾びる
裏町へ折れて昔がよみがえり
真つ白い雪が隠した富士のゴミ
大物の証よく寝てよく遊ぶ
折れるすべ覚えて肩の荷が下りる

大阪市 升成 好

雑草の目に人間の不甲斐なさ
玉の汗疫病神を遠ざける
過疎の地にお一人様が多すぎる
痛いなあ聞く人が居てついほやく
人柄が良すぎて駄洒落通じない

大阪市 松尾 柳右子

友からの電話に心癒される
晴天の会合喜々と参加する
カーテンを開けて作句の昼下り
一日に何度時計を見てるだろう
友人の庭先にあるシクラメン

大阪市 山崎 君子

ペランダに花美しく春を呼ぶ
花の色自然の色の美しさ
腰痛に花と遊んでひとり言
久々に御堂筋ゆくにぎやかさ
里の姉電話口では若い声

大阪市 吉内 タカ子

旅立ちの世界平和を背に総理
義姉計報仏に話すなお孤独
早々と納涼床で京平和
さつき咲く真ん丸手鞠無垢が好き
グウチョコキパーテレビ見ながら手が動く

堺市 奥 時雄

ばれてからオフィスラブのおおっぴら
オフィスで煙草が喫えたよき時代
よう辞めんくせに会社をこき下ろす
ねぎらいの言葉に皮肉込めてあり
居酒屋で憂国の士が口惜しがり

堺市 柿花 和夫

前歴をきっぱり捨てて趣味の会
父の背に許すと書いてある無言
折れた矢を拾い集めて槍にする
助け船出すタイミンク計ってる
国訛にどっと涙の堰が切れ

堺市 加島 由一

腰痛が膝の痛さを忘れさせ
相談があり仏壇の掃除する
偏屈な男踊りの輪に入らず
花や月きれいに見えてふと不安
思うこと言い尽くせない日記帳

堺市 源田 八千代

ライラックと卯の花の香に包まれる
牡丹花私好みの色で咲き
母の日に届くかわいさくらんぼ
恐らくは今がピークだ長寿国
次世代を担う孫等のスマホ漬け

堺市 澤井 敏治

人はみな白地図を持つ旅が好き
摩周湖の色で想いをしたためる
時どきは挨拶に行く内科外科
一人また一人と降りてゆく名簿
寿司食いねえ豚食いねえと嘯み合わず

堺市 遠山 唯教

子育てに辛抱強く石を積む
春風にモチベーションがまた上がる
ふたりして参る吉野のおそざくら
見たことはのこり聞いたことはぬける
老い寂し思う浄土が描けない

堺市 内藤 憲彦

良縁にうなずかぬ娘の世話になる
気まぐれに始めたパズル抜けられぬ
仲直りしたくて飛ばす親父ギヤグ
千差万別ただ平凡に生きるのみ
相合傘僕は濡れてもいいんです

堺市 矢倉 五月

雑魚という気楽に慣れて雑魚でいる
姑は大事な夫産んだ人
見事な脱皮蛇は姿を見せぬまま
対岸の花を掴みに行く秘策
七十路の腹立ちポーンとくずかごへ

堺市 山本 半錢

拝まれて加担をしたが気が重い
明治生まれ欠かさず日の出拝んでた
好きだけで四十年を添い遂げる
駅前に電話ボックスだけ豪華
待望の新芽過保護になりそうな

池田市 栗田 久子

雨の日は雨の日なりにおうちカフェ
朝顔かゴーヤで悩むプランター
ケイタイを持たぬわたくしが持つ世界
早苗田に蛙の声が聞かれない
雨音を楽しみながら聴くシヨパン

和泉市 横山 捷也

似た過去に話の弾む縄のれん
独り居に柱時計が時を打つ
木瓜一輪朝のトイレに落ちていた
左遷から解かれ背筋が伸びてきた
神様に任せた命すりガラス

泉佐野市 山本 蛙城

おみくじを括られ枝よ辛からう
土用鰻二日遅れて買うことに
文受けて身の奥の熾起ち上がる
元氣だせ夏だと燕宙返り
首都五月人よ走れと電が降る

茨木市 島田 誠一

血と汗の染みた平和の中で呆け
銃弾は来ぬ大本営は勇ましい
スランプの背に監督の手が温い
論文の不正暴いて暴かれて
とことんがほどほどになる当選後

茨木市 藤井 正雄

一列に並んで自分消した日々
盆栽を毀す憎つき猫の恋
仏との約束果たす遍路笠
仲間だろうそんな言葉のありがたさ
吊革の二本にすぎる物思い

大阪狭山市 矢野 梓

八十路には八十路のおしゃれ初夏の服
いつ何が起る不思議でない歳に
誕生日なかなか角が取れてこぬ
八十路から好きな歩幅で生く事に
味見して子の荷に詰める夏蜜柑

交野市 森本 弘風

俺の財布何故か知らぬが金が漏る
程々に貯めるお金もありません
悪友が集まり酒を飲むノレン
俺の過去包み隠さず伝えます
この時が母思い出す母の日に

河内長野市 植村 喜代

ガンバリも無理が効かないとしになり
大声で電話気にせずかけてはる
鍵一つに頼るが安全とはいえず
血圧が安定しないにらみっこ
ショートステイから血圧さがったかと夫

河内長野市 梶原 弘光

もう眼鏡かけぬ世の中見え過ぎて
タレントが旨い旨いと言うテレビ
緩やかな回復基調とこのこと
大口を開けて笑おう今一度

お世話になりつ放しを返す胡蝶蘭

河内長野市 木見谷 孝代

宇宙人らしい話が噛み合わせぬ
片時もスマホ放さぬのは奇怪
一日を畑で過ごすいい季節
根付いたら手をかけ過ぎずほっておく
うれしげにオシメとれたというメール

河内長野市 黒岩 靖博

入社して花見の席が初仕事
春を呼ぶ自慢のくぎ煮配る妻
日に数度メガネの行方探す妻
ワンマン社長家に帰れば道化役
女生徒をクンで呼びあう頃が華

河内長野市 坂上 淳司

喜寿の息子を氣遣う母はもう上寿
船長が一番先に逃げる怪
老眼が進み年中花曇り
8と9の数字のさばるチラシかな
駅ティッシュ回れ右する二度三度

河内長野市 谷 久美子

じっくりと聞けば悩みも取れたのに
見つければ尻尾を切つて逃げ延びる
鬼になり嫉た子等に諭される
隠しても皆持っている鬼の面
時時は仮面を脱いで深呼吸

河内長野市 松岡 篤

城山に登りひととき殿になり
高いからおいしいですよこの料理
リタイアをしても名刺が好きな人
マンガからスマホに変化歩み読み
最期まで妥協はせんぞ発泡酒

河内長野市 水谷 正子

見舞客自分の話して帰り
リハビリで遠目の桜教えられ
入院で酸いも甘いもまた学ぶ
もう誰も来ない月曜院静か
五月晴自立を祝う車椅子

河内長野市 村上 直樹

なむあみだぶつ賀状リストをまた削除
拝みつつ諭吉迎える年金日
おもてなし大和心をさあどうぞ
うれしめでたし喜寿の美酒白寿まで
過去帳には白寿祝いを終えてから

河内長野市 山室 光弘

またひとつピエロの仮面増えている
堅物の軽いジョークに場が和み
生きる死ぬほどの恋かと思う今
半世紀曇りを知らぬ夫婦愛
使わねば錆びる手足と曇る脳

岸和田市 岩佐 ダン吉

向い風思うことあり受けている
自惚れも僕の味方になっている
決断を苦渋ときつと言うだろう
腹決めるもう風向きは気にしない
水一杯あの八月は忘れない

岸和田市 堤 梢代

花ぐもりやつぱり晴れの方がよい
雨あがり日ざしが強くなりそうだ
お向いのつつじが花を見せてくれ
春風が私を誘ってくれそうだ
引越した友はどうしているのかな

岸和田市 雪本 珠子

三歳児味に文句を付けている
人よりも舌が肥えてる家の猫
感情で叱った後は気が重い
ご時勢か叱る大人が減っている
老いて孫に教わる事が多くなり

四條畷市 吉岡 修

あの世でもクラス分けされすれ違ふ
シニアクラス居心地よくて皆勤中
逢いたいと言うてるわけを考える
しがらみを無理にほどけば流される
財布との相談ごとに明け暮れる

吹田市 太田 昭

ウーロン茶で酔った振りして歌わされ
デパートの物産展で旅をする
身の上話聞くだけの聞き上手
終活にラストダンスを所望する
飲み仲間逝つて花見で酒を酌む

吹田市 木下 敏子

好きなこととして連休の青い空
母の日に嫁から貰う初夏の服
枯れかけていても確り芽の伸びる
ほどほどの倅せ朝のお味噌汁
マイペース鉛筆の芯尖らせる

吹田市 須磨 活恵

世渡りに時折使う義理の棹
貧乏はしても不幸と思わない
見送った後の切なさ孤独感
手のひらを流れる私のさだめ川
順々に花は咲き散り蟬が啼く

吹田市 野下 之男

船長がまず居ないのが不思議です
大変な首相の髪がまだ黒い
褒賞にほめられている十九歳
切り貼りはいろんな場所で使われる
みんなみな心の花を咲かせよう

吹田市 山本 希久子

素朴な疑問原発をなぜ止めぬ
だんだん薄い本業の主婦の影
ブラウスの白 魂は売りません
漢字から平仮名老いてゆく私
風に向かつているわたくしの翼

高石市 浅野 房子

割烹着やはり着物がよく似合う
こき使うだけこき使い先に逝く
手持ち無沙汰何かいたずらしたくなる
他力本願もう無理でしょうみなあの世
しんどいとすぐ横になる癖がある

高槻市 井上 照子

骨密度背中の丸さ気にかかる
転んだらそれが最後と頼る杖
喜怒哀楽その時どきにのむワイン
簡潔な言葉えらんで書く日記
便り書く辞書を手許に置いている

高槻市 指宿 千枝子

入社する子へ新緑のファンファーレ
薫風のベンチで好きなメロンパン
メロンパン雀も鳩も傍に来て
柳友と余談たのしむティータイム
喜びをタッチする手と手の温み

高槻市 島田 千鶴子

高槻市 富田 美義

コンビニに夫頼んで女旅

かすみ草八方美人だったのね

奥の手も切り札もなく笑顔だけ

連休の天気予報は聞き流す

口げんかしてもやっぱり側がいい

高槻市 初代 正彦

板前のきびきび動く太い指

エコカーが威張り過ぎてる展示場

携帯を忘れ自由な身にされる

泥んこでレギュラー目指す兄の瞳

無頓着な僕もゴルフで風を読む

高槻市 左右田 泰雄

飾り気の無い物腰のしとやかさ

そろそろが小走りになる発車ベル

その仕事まかせてくれと買って出る

逆らわず寄る年波に身をまかす

して欲しい事してあげる思いやり

高槻市 杉本 義昭

既得権にどっぷりつかる古狸

青春切符ゴトンゴトンと旅の歌

生き方のモデルになった自尊心

社長職安住出来ぬ首と知る

糠床のかびおふくろの味である

微笑みも気持ちいいのと悪いのと

熱燗の中でクルクル僕の智慧

ボケて無い証拠に疼く胸の奥

飲み込んだ台詞を広げ選んでる

序でだと恋の火照りも捨ててに行く

高槻市 富田 保子

孫を見るだけの旅です新幹線

新刊の雑誌小脇に一人旅

バスツアー演歌唄いに来たような

ことさらに美肌を見せにワイキキへ

温故知新アベノハルカス訪ねよう

高槻市 原 洋志

深入りの情が愛に溺れ出す

大吉の嘘つき恋はやって来ず

一日を使い果たした大欠伸

子には子の波音があるオムライス

父の日のなき頃父は強かった

高槻市 安田 忠子

早朝の空気が好きで草むしり

新緑の仏像巡り石塔寺

天平の座像立像五月晴

我先に席確保するスマホ族

妊婦さんに席ゆずるのはお年寄り

豊中市 池田純子

ただ愛を注ぎ続けた人は母
じゃあ明日逝ってしまった母憶う
薫風が尖った気持ち撫でてゆく
平凡な風が嬉しい春の朝
散蒔いた種は思わぬところで咲く

豊中市 江見見清

暇やからどうやと別の暇が来る
レクイエムのベールが黙々と続く
人目気にしては二度とは来ぬチャンス
朝顔の前ではサンダルが似合う
足枷がとれた時にはもう飛べぬ

豊中市 藤井則彦

そのままの自分でおれば皆味方
医者通いそろそろ止めてみる勇氣
遊んでる中で身につく人の情
安心を包むモラルという衣
判を押すときには一度深呼吸

豊中市 松尾美智代

セピア色のアルバムなつかしい匂い
春の色食べすぎましたさくら餅
三寒四温うっかり風邪を引きました
外反母趾そっくり痛みまで母似
青春切符昔娘の四人旅

豊中市 松村里江

父さんの留任決まり酌み交す
スタートは一緒差がつくコネの有無
KOシーン他人事だからたのしめる
占いの灯におずおずと掌を晒す
若やいでとんで見ましよう私流

富田林市 片岡智恵子

現在地わからず地図でまた迷い
弁解の余地を残してする意見
戻れない過去を背負ってゆく流轉
かけひきもそこまで結び目が緩む
ゆっくりといい湯につかり逝った兄

富田林市 関よしみ

溜息にそつと出て来る温いお茶
新緑を浴びてつやつや心意氣
ブランクにいつもあなたが来て座る
梅雨最中少し派手目に生きて見る
つつし満開私の視野に遊ばせる

富田林市 中井アキ

草笛のやがて大きな糧になる
現役の頃と比べている歩幅
押し返す力を溜めたくすり指
口裏を合わせた瞬間に負けている
ポイントを貯めてやがてがやってくる

富田林市 肥山一文

ライバルと目と目で交わすごあいさつ
酒の席リストラのこと出ずじまい

ふり返り昭和の歴史長すぎる

山の辺は昭和のロマン香る道

なにげないジョークが恋のいのちとり

富田林市 山野寿之

満開のシャワーいちにち丸洗い

一日を鉄砲玉がよく遊ぶ

意地悪な鬼が端折りたがる絆

厳かに白髪を撫でて古希通過

縄電車たった一人と風が居る

寝屋川市 籠島恵子

飛び込んだ店は「がんこ」というそば屋

カーブミラー一寸先が見えている

生駒山峰峰は涅槃像

あれ以来メイブルシロップを隠す

アリバイは無いがだーれも気にしない

寝屋川市 富山ルイ子

この句会辞めようかもう休もうか

一日をただぼんやりと過ごすだけ

何をするのもつまらない困ったな

つかみそこねた幸せはかえらない

懸命の作句六句に届かない

寝屋川市 平松かすみ

スマイルで五月病など寄せつけず（孫へ）

奉納の熊手をちよつと見てみたい

二股も三股もテレビドラマです

お笑いを観て居た時が惜しまれる

趣味あれば青春続く白寿まで

寝屋川市 森茜

ゲートルもんべも知らぬ平和論

遠去かる足音消えて春の闇

なまぬるい落ちでさよならしてしまふ

消えそうで消えぬ役所の非常灯

古書市でタイムスリップした明治

寝屋川市 森田麗

子も巣立ちリフォームの家老い二人

遠き日の伝言板にさようなら

雑草の小さな花がポロリ泣く

あと一度仏の顔になつてみる

掌の不満が闊歩して困る

羽曳野市 安芸田泰子

濡れ衣を着せられている猫の爪

初孫を待つて今年も梅漬ける

巻き戻す遠い記憶へ舞う落花

絶景を横目に高所恐怖症

よく見れば蹟くほどでない段差

羽曳野市 宇都宮 ちづる

クシャミ五連発譽められても貶されもせず

リタイア後無職と書かず主夫と書く

老いの身にスイッチ入る孫の守り

イソップもグリムも知らぬマリオ好き

通学の車中スマホが横並び

羽曳野市 徳山 みつこ

海越えた子から母の日おめでとう

楽しみ優先ガラス拭き順延

ハルカスのランチへ赤い靴磨く

おやすみ鏡よあしたも笑おうね

借金大国だから転けられないワ

羽曳野市 永田 章司

昭和史に世界の中の日本見る

不遇な日人の情けが身に沁みる

使い方孫にコーチの肥後守

母の日に疎遠の子から花届く

鷹生んだ鳶の苦勞判ります

羽曳野市 三好 専門

ゆびさきでスマホの上の恋さがし

ドングリはくらべられるとイヤと言ひ

人形をあやつる人が泣いている

藤娘どこへ嫁いでゆくのかやら

本当にボケてわたしは首相です

羽曳野市 吉村 久仁雄

祖父の歩が花の香りに包まれる

噛み合わせぬ会話楽しむ老夫婦

弱点を指摘し合つて友でいる

嘘は嫌いと平気で嘘をついている

ツル折つて気合を入れるボランテニア

東大阪市 笠井 欣子

年のわりに忙しすぎる吾八十路

寄り合えばあの世の話出る八十路

孫子来て笑い貰つた一人部屋

お祝にもらつた湯呑み春招く

黙礼はしたがお名前浮かばない

東大阪市 北村 賢子

真つ直ぐに向き合いまごころを掴む

からからのハート潤す種を蒔く

君の傍類染めたのは血の巡り

泣き所タッチをされてから虜

生きた証笑顔の友の居る写真

東大阪市 佐々木 満作

肩の荷を下ろして人の輪に入る

突つ張つていた息子今二児のパパ

片意地を張らずに妻の意に任す

時々妻のジョークに苦笑する

二三行読めば転た寝する齡

東大阪市 米田水昇

雀たちどこへ行ったか雀の巢
車椅子孫に押されてハルカスへ
高階より大阪平野一望に
山ふところ母がいました祖母もいた
残り福食べたり寝たり我儘す

枚方市 安達忠央

波の音枕に寝入る一人旅
はつきりと言い過ぎ帰り悔いばかり
曲り角マンネリ変えるいいチャンス
友と飲みやつと気持ちがぬるみだす
凍ってて解けそうにない嫁姑

枚方市 伊達郁夫

蓑虫が風に任せている気楽
平凡に母を鏡にして生きる
英字新聞逆さに見てる鼻目鏡
お利口と言われ何にも喋れない
綴じ代に逃げ道少しある余裕

枚方市 海老池洋

ぴちぴちの美学と思うAKB
リストラの哀史は載せぬ再建史
年式は古いが僕はまだ動く
十二色で生きたが白になる老後
暗闇に安らく合歓の木の私

枚方市 小林わこ

アルバイトかばんにアンパン一つ入れ
パンが好き美味いコーヒー匂わせて
朝の元気焼きたてパンの匂いから
焼きたてのパン屋へ走る朝の靴
手作りジャム幸せのパン噛みしめる

枚方市 丹後屋肇

適当な悪さ長寿の秘訣かも
逢いたくて会えない哀愁のとはり
僕に会う鏡が袖を放さない
空襲談義誇張も入れて盛り上げる
杖をつく老人無言で擦れ違う

枚方市 寺川弘一

楽しみは季節毎する衣替え
僕は今葉桜かもという余生
CMを見る度変えるサブリメント
ハルカスも天に届くにまだ遠い
これきりと柩の釘のレクイエム

枚方市 二宮紫鳳

心まで緑に染めてリフレッシュ
楽しみを増やして老いに歯止めかけ
無理難題笑顔でかわす楽天家
今を生きまだまだ六十路無限大
白椿父の命日蝶が舞う

枚方市 二宮 山久

どん欲に生きて人生楽しけり

ハイキング集う仲間とにぎり飯

里の味届いて配る両隣

作句する心晴れば今日生きる

また一つ趣味を増やして若がいり

藤井寺市 伊藤 アヤ子

春うらら人並み続く藤の道

亡き母に感謝と花も添えました

鉢植えのカーネーションも八分咲き

連休のお里帰りもひと苦労

天プラを揚げてる最中ピンポンが

藤井寺市 太田 扶美代

あたためてやったら涙ぐむ昭和

叫んだら叫ばないでと言う哥

晩年をととも気にしている鏡

初恋の人も五人の孫を持ち

脇役のわたしも貰う花吹雪

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

新緑を嗅ぎソフトクリーム欲しくなる

薔薇咲いて庭は五月の息をする

良い葉になったと言うておく火傷

見ぬ振りのいたわりもある茜雲

さみしいな追伸のない友の文

藤井寺市 鈴木 いさお

ヒーローはまぐれでしたと謙虚なり

買わねば当たたらぬが買っても当たらない

エルメスの財布へ入れるモノが無い

早起きをするから早く眠くなる

優先席へズラリ並ぶは皆スマホ

藤井寺市 高田 美代子

胸底に音だけ響く昼花火

反芻と咀嚼のちがいを考える

マグネシウムが突然謀叛した騒ぎ

天気図の機嫌で今年どんな夏

此処だけの話が長く立ち話

藤井寺市 津田 シルク

病癒えみどりの風が心地よい

目の術後年齢詐称やめにする

頂の気を満身に下山する

噂話通り抜けする木のベンチ

手造りの器独り善がりをする

藤井寺市 増井 ヨシ枝

荒れ地にも花が咲いてる亡母の庭

十葉の強さに完敗してる朝

ぼたん咲く庭はほっこり猫膝に

心通う言葉はいつも使いたい

お茶するも入る店ない車椅子

藤井寺市 俣野 登志子

いつ来るかわからない娘の寝間仕度

いい夢見て後が切ないおさんどん

保護色を着て慎ましく生きてます

素敵な服もう似合わない試着室

程の良い人でまわりに温い風

藤井寺市 吉田 喜代子

ベランダで尾を挟まれた鯉のぼり

GW事故の怖さを知るテレビ

GW平凡と言う有り難さ

待ち時間藤棚の下甘い風

孤独には馴れてるはずも風は吹く

藤井寺市 若松 雅枝

丹精込めた花が今年によく咲いた

連休は一人で愚痴を仏壇へ

リーダーになって欲しいと言うお世辞

何時までも母は達者と思う子等

居るだけで心丈夫と言ってくれ

箕面市 酒井 紀華

太陽に問うて答えるわたし流

口下手でもやさしい心わかります

春の風やさしく揺らすイヤリング

やさしさと強さ秘めてる母の笑み

古里のやさしい風に会いに行く

箕面市 出口 セツ子

渋滞を横目近くの温泉へ

孝行のつもりで子らも食事会

孫の顔どころか結婚しない子ら

豪華船も不安外国船長で

九日も音信不能船の旅

箕面市 広島 巴子

弥陀坐像ばつちやり癒す友思う

カーネーション渡しにつこりUターン

カーネーション母の笑顔の皺に似る

登山後の乾杯ゴクリリフレッシュ

万物と共に蘇生の若葉風

守口市 井上 桂作

わが老いは如何なる薫り放つやら

人生を砂漠の井戸と喩えたり

アメリカはだまってロシアみすごすか

温暖差の激し毎日列島は

時移り駅前花壇はなやかに

八尾市 内海 幸生

人生は組立て体操みるような

若さよし老いは尚良し石を積み

年寄りになれる保証は持ってるの

パスワード忘れ痴呆のこと想う

鯨にも牛馬豚にも可愛い瞳

八尾市 高杉千歩
STAP細胞若い芽を摘まないで
ご近所へ篤親善大使です

円い和の中で補聴器電池切れ
嫌なことみんな忘れて腹八分
気配りの果てが除け者にされ

八尾市 寺川はじむ

美しい誤解をそつと仕舞い込む

人生は嘘を暴いていくゲーム

労りの言葉に飢えている地球

古すぎるギャグを諫める妻の笑み

労りが過ぎて厭味になる見舞

八尾市 宮崎シマ子

カーネーション買わずに待つが娘が来ない

日曜でなくてもいいよ母の日は

逢えてよかったと微笑む花時計

肩を組む輪の中に居る反逆者

この大地にひとり残ればどうしよう

八尾市 村上ミツ子

彼岸までつながるスマホないですか

母の日へ食べたいものを買ってくる

かき穴の向こうの涙見てしまう

かあさんの傘が迎えに来る雨だ

親ばなれ出来たか息子一人旅

家中に何やら知らず電子音

柏餅時代に添った餡の色

藤つつじ百花つなぎで夏はじめ

血が通う心が温いお人柄

タッチの差川柳行きのバスに乗る

神戸市 井上じろう

友来たれ心の鍵は開けたまま

山ふじの紫さみし計報さく

青春は古いノートに宿ってる

一読をすすめられたが積んだまま

特養でどこかが違うもと神童

神戸市 白川淑子

ときめかぬ物捨てる春のまんなか

五月病君の心をノックする

ほんやりも腕白も居る一年生

花見膳つくし菜の花豆ごはん

春の雪一生涯の恋解かす

神戸市 福原悦子

孫には孫の言い分がある聞いている

一日の長さ薄着して生きのびる

元気で感謝の鶴を折っている

内視鏡心の奥は暖かい

人生をやさしく解いた辞書がある

神戸市 山口 美穂

母の日は亡母へ謝ること数多
断捨離が出来ずストレスためている
誇らしく祖父の見上げる鯉幟
改憲と戦争知らぬ人が言う
朝寝夜更し老人らしくない暮し

神戸市 山崎 武彦

耳飾り外せば本音聞けそうで
矢印に添うておろおろ泣きに行く
ハイタッチ明日も元気に遊ぼうね
からからの心に響くありがとう
掌を合す心に邪心ないですか

神戸市 山田 婦美子

受話器から故里の空気がほとばしる
老いの齒にそつとやさしい春キャベツ
一杯のコーヒに仮面をつけかえる
気紛れな神の支配下雨霰
置いたとこ探す日課が増えてくる

明石市 梶谷 和郎

壁に耳あるから少し褒めておく
沈む日は歌がリセットしてくれる
知らぬ顔してるが耳は立てている
幸福の極み家族がまた増える
水洩れはするけど屋根は屋根でいる

芦屋市 黒田 能子

長年の横着断捨離で脱皮
さっぱりとしすぎた人でつまらない
水と油相棒となるフィーリング
ふっ切れてやつと私の空が晴れ
スマートで憧れだった人なのに

芦屋市 竹山 千賀子

鈍いのは歳のせいではないらしい
ママの愛とろとろ煮込む離乳食
栄光はあえて語らぬカタツムリ
笑ったら涙ホクロが落ちました
笑うならオホホホよりもワッハッハ

尼崎市 市坪 武臣

センバツ野球春に湧き出る郷土愛
取って置ききの切り札を持つ憎い敵
健康を祈ると書いて風邪に伏す
おろおろと泣くばかりより進まねば
試合後に一人打席に立つ補欠

尼崎市 加川 靖鬼

雑踏の一筋ずれた路しずか
回転について行けずに目眩する
原色がまだ身につかぬけど欲しい
和やかな遺影ほんとはいい人だ
べったりと夫婦してたら顔も似る

尼崎市 春城年代

チェックした意味を忘れた四月馬鹿
気まぐれな指定席持つ老いひとり

矢印が親切すぎて行き違う

五丁目ののら猫うす眼あけて寝る
でんぐり返り出来ても寿命は同じこと

尼崎市 藤井宏造

表札に出来たクモの巣取っ払う

休肝日 月・水・金と決めている

ぞんざいに扱ってきた足の裏

動じない振りもする年の功

がみがみを小声なんかで言えるかい

尼崎市 藤岡りこ

光り物好きだがまがい物ばかり

油断大敵最後の段を踏み外す

億や兆政治家軽く口にする

彼女出来好み変っていく息子

二番目に好きと答えておことわり

尼崎市 山田耕治

連休に柱の傷を見に帰る

仏様に花とビールを買ってくる

文明は飽食という罪つくる

過去という物置小屋に住んでいる

健保証割り勘負けをして元気

加西市 金川宣子

尊厳死望んだ橋を渡りきる

からからと笑い転げる孫青春

凸と凹夫婦漫才みたいな日

ゆるゆると春の苦味を食べつくす

オフとオン使いこなして喧嘩せず

川西市 西内朋月

白骨になるまで出られない樹海

嫌なことみんな忘れて飲んでいる

丸くなる背なはなかなか直らない

真つすぐに歩いていても落ちる穴

閻魔にも効くかも知れぬ袖の下

川西市 山口不動

新緑が心の色を塗り替える

アルバムの整理の時間疲れ切り

妻娘孫と続いたタカラヅカ

格安の飛行機に乗る若さかな

友達が俺もガンだと告知する

川西市 米原雪子

心配性何度も施錠確かめる

すきやきの香り帰宅の暖かさ

練習で陰の努力を垣間見る

ナイトーで昂奮したか寝付かれず

ユニフォーム替わってファン楽しませ

篠山市 酒井真由

野良猫になつかれている喜寿である

答弁のぬらりくらりはお手のもの

月からの便り兎は文使い

ペンションの扉に虹が描いてある

玉音に頭を垂れた夏の日よ

篠山市 酒井健二

ダイヤルを回しながらもする思案

ストレスを食べてしのいだ付けが来る

予定には無かった目と齒朽ちていく

慣らされてイクサ支度以身を覆う

飲み代の残業代まで狙われる

三田市 石原歳子

親切を胸のポケットにしまつとく

生活の音を奏でるひとり者

夫の物三回忌までのままに

今月もメモで埋まった予定表

新聞の切抜き止めてまたはじめ

三田市 尾崎一子

母さんと呼ばれうれしい母の日よ

学校のトイレ一人で行けた孫

花束を贈られひとつ若くなる

たおやかに母のところに咲く桜

沢山笑う果ては宇宙の大銀河

三田市 北野哲男

初めてのスーツが板につく五月

全没の夜に茶柱立つ番茶

愛想良く褒めて聞いたとく孫自慢

楷書から草書を目指す定年後

明日がある明日があるぞと酎二杯

三田市 福田好文

靖国にお参りしたが騒がれぬ

孫娘孵化したらしいじゃれ付かぬ

前立腺だけが肥った痩せ蛙

弔電は順不同でも議員から

尺取虫メートル法で何と呼ぶ

三田市 堀正和

達筆じゃないから絵ハガキ好きな僕

惚けはった向いの人は三つ下

また一つ薬をふやす処方箋

ツーカーの仲でときどき出るアクビ

おじいさんいつもニコニコしてなさい

宝塚市 田中章子

母の日に母との橋をふりかえる

いいのかな動物園もただになり

二人居て一人居るよりさびしい日

千の風見られて困ることもあり

誰にでもやさしくなれる山笑う

西宮市 秋 元 てる

緑萌ゆいのち燃やせよ世は短か

五十年後に咲くサボテンと子の土産

アドバイスは要らない聞いて欲しいだけ

もう聞けぬ友の正調津軽弁

母恋し昔も今も老いて尚

西宮市 足 立 茂

負けん気が努力不足で空回り

女とは違う男の羞恥心

孫の気持聞けばなるほど三分の理

出来ぬ子が徹夜で取った二十点

強がっても女の涙には勝てぬ

西宮市 緒 方 美津子

婦唱夫随新聞だけは後で読む

ながらスマホこちらが避ける羽目になり

筈を二本買う明日はゴミの日

小銭たつぷり持ってきた京都駅

夫の機嫌いいうちに出掛けます

西宮市 片 山 忠

マンネリがとても居心地良くさせる

学歴でまず一番に得をする

嫉妬をさせるだけの魅力がありません

安心をさせる笑顔はいい笑顔

飄々と枯れた男の闘病記

西宮市 西 口 いわゑ

しあわせな錯覚でしたそれもいい

アルバムが過ぎしロマンを映し出す

屈託のない笑顔に任すことにする

それぞれの夢に向って青リリング

雲ゆうゆうわたしもゆつくり生きてます

西宮市 福 島 弘 子

思い切り笑って来ました繁昌亭

思いがけぬ賞で家族が仰天す

骨密度あれが効いたとほくそ笑む

丹波路の新緑絵心あったらなあ

三個千円サイフが緩む道の駅

西宮市 牧 渕 富喜子

日曜を月曜日かとまた思い

筈にことし最後と書いてある

真央ちゃんと孫呼ぶようにいいのかな

この町も朝は空気が澄んでいる

身の丈のされど川柳五月晴れ

西宮市 山 本 義 子

昭和っ子手作りパンで飢えしのぐ

アンパンをひとつは残し山下りる

サンドイッチ耳は落さぬ主義である

パン食に馴れちゃったねと亡母笑う

非常用食パン味およろしうなりました

西脇市 七反田 順子

ベルサイユ完売孫が無念がる
ハルカスは東大寺展招かれて
レシピメモ未だ作ったことがない
パートツー思いがけない良い映画
おもちゃ箱やんちゃが来ると踊りだす

奈良県 中 原 比呂志

私を忘れた人の背を洗う
見回して降せる位置で手を挙げる
気遣いは予算と別に忍ばせる
低気圧来るぞと神経痛疼く
聞きにくい耳で相槌うつておく

奈良県 渡 辺 富 子

目に映るものいきいきと夏になる
人生の旬は今だと着るピンク
富岡製糸女工の涙忘れまい
文化財の生家に猫と母が住む
妻のハート黄ばんでいるが温かい

奈良市 阿 部 紀 子

艶やかな本と法話の寂聴尼
友に注意促し私詐欺に遭う
亡夫恋し涙の友のいじらしさ
なんでそんなに急いで逝くの若き友
熱唱のスターに酔って時忘れ

奈良市 岩 本 浩 二

琴の音に暫し佇む古都の路地
ときめきを求めふらりと旅に出る
なんでやる急に優しくなった妻
頑固者少しまああるくなつて喜寿
羊羹を五等分する難しさ

奈良市 加 門 萌 子

アフリカの女性虐待今の世に
白ピンク都忘れは亡母の物
バラが咲いた歌った息子早五十
青天に映える若葉に気を貰う
夫には素顔一緒に老いたから

奈良市 辻 内 げんえい

駅ナカは結構時間つぶせます
一張羅着たのに妻は古臭い
乾杯が済めばこっそり席をたつ
元上司に会えば背筋がしゃんとする
頑固な孫 隔世遺伝頼もしい

奈良市 天 正 千 梢

夕食にしようお寺の鐘も鳴り
人の真似できん自由に暮らさねば
いざ鎌倉はもう無いものと思つてる
年金を細かく割って繋いでる
友はいいなあいつも一緒に泣いてくれ

奈良市 米田恭昌

切り貼りの腕見込まれたトラバーク

花マルの孫と嬉しいハイタツチ

自叙伝のちよつと背伸びをしたページ

黒光りの屋根屋根屋根の能登の旅(能登 2句)

加賀中島昭和が匂う郵便車

生駒市 飛永ふりこ

つつじ達見守る矢面の覚悟

腹八分スイーツの香に呼び込まれ

道を説く美声かわらず千春節

嘘っぱち突き詰めぬのが大人です

わらび餅つるりと棘も飲んじまい

大和郡山市 坊農柳弘

四捨五人どっち付かずの梅雨半ば

七月のドラマを仕切る星まつり

自由席一期一会の缶ビール

紫陽花の心ね青のひと滴

節操を守り通した舞扇

和歌山市 岩本美智子

菓子いっぱい食べて埋まらぬこの隙間

眠られぬ深い暗やみ生きている

生き様は違うけれども皆仲間

夏日に電日本の気象よその国

あれあれとヘルパーさんと阿吽の気

和歌山市 上田紀子

呆け少し悟りも少し沙羅の花

冒険のおしゃれを歳が邪魔をする

努力した轍が宝石より光る

根気では負けてはいない針仕事

終章は流星のよう鮮やかに

和歌山市 柏原夕胡

さくらさくら明日のことを憂うまい

男と呼べる男だんだん減ってゆく

お小言をもらう有難くもらう

わたくしに鈴つけたのは誰ですか

人間を遠ざけ痛いほど孤独

和歌山市 喜田准一

ご気分はぼちぼちですと答えとく

正論はひと先ず置くというゆとり

舌打ちをかすかに聞いたドアの外

何事も無かった顔のティータイム

叱られてすぐに辞めてく時代の子

和歌山市 楠見章子

美しい夢をみたくてバラを買う

何よりも気になる予定日の天気

着飾ってみても変らぬシルエット

オカリナの音色がしみてくる豊か

ワイングラスの足の長さに一目惚れ

和歌山市 坂部 紀久子

我が暮し可もなく不可もない幸よ

糖味噌を混ぜて今日を締め括る

エンピツを削り削って出た一句

ティータイムで流せるほどの行き詰り

おしゃべりを忘れ若者スマホ潰け

和歌山市 武本 碧

中弛みらしい我慢の土踏まず

飛び出した尻尾念入りに仕舞う

こめかみにちよっぴり素直飼っている

断捨離が恋の終りのごと進む

峠越え今ひとときの風にいる

和歌山市 玉置 当代

言い勝った気持ちをほぐす豆ごはん

道の駅巡り山菜抱きしめる

山菜を盛る大皿も笑いだす

何もかも忘れてはしゃぐ花の中

人並みの暮らして恙無く生きる

和歌山市 土屋 起世子

薫風を招待しよう窓開ける

誕生日カードに曾孫ピカソの絵

独り住まい無罪放免されたから

自由時間やっと出来たら八十路坂

模様替えしても独りでする食事

和歌山市 福本 英子

亡母の歳に近づいてきて母の愛

蛇口ポトポト決心はまだつかぬ

長生きで素うどん好きになってきた

真直ぐに歩くと若く見てくれる

顔洗って夢のつづきをたぐりよせ

和歌山市 古久保 和子

つまずきも転びもするが根が陽気

野の花は野に咲くままにいたしましょ

居心地はシュークリームの中ほどで

料金不足の文がため息ついている

母から私そして娘へ梅仕事

和歌山市 堀 富美子

踏んで来た道が教えた幸せ度

枯れ鉢を恥かしくみる命萌ゆ

老いの意地堪忍袋バンクする

捻子緩み路線はみ出す日が続く

幸せ彩転がせて行く処世術

和歌山市 松尾 和香

祥月に父母のお墓へ会いに行く

長閑だなわたしの心包む風

無駄な物捨てる勇気がまだ出ない

思案する脳ほけ防止だと思ふ

五分間今日の反省して眠り

和歌山市 松原寿子

楽しくて少し弾けた酔いごこち
矢印を変えた出逢いというご縁
旅行ならいいのに里へ足運ぶ
人生の嵐へ家訓読み返す
これ以上聞くのはよそう副作用

岩出市 藤原ほか

天仰ぐ恵みの雨に生き返る
宇宙から見れば小さき砂の城
天下人孤独を抱え突き進む
張り切って心の橋を渡りきる
水たまり跳べば明日が見えてくる

海南市 小谷小雪

にんげんの汚染に森も耐えている
いい話お茶の時間に挟みこむ
ピリ辛でなければならぬ唐がらし
ゆらゆらと出過ぎた言葉まとい付く
お隣も蟻の薬を買う五月

海南市 堂上泰女

花暦他人の汗を愛で回る
少子化の街で光った鯉職
豊饒な風を呼び込む代替り
花より団子と母の日に息子から
孫を抱く嫁に重なるマリア像

紀の川市 宇野幹子

結願証抱いて新たな第一歩
職人の手におごらない汗つたう
ベンベン草威張りはじめた庁舎跡
はち切れる熟女を乗せたバスツアー
ちぎれ雲今日も届いた計のしらせ

紀の川市 北山絹子

山ほどの話を持つて母が来る
一粒の種が器用に実を結ぶ
安らぎの世界はいつも母の膝
野の花を愛した姑の一周忌
音量を高くしている父の耳

紀の川市 辻内次根

心まで澄んで野の花一面に
和歌山の梅を信じて食べていた
すつきりと覚悟はできぬものらしい
街灯のない道だつてあった過去
死んだならどうなるだろう花の散る

田辺市 岡本昇

木洩れ日で読書三昧ハンモック
こだわって中古を磨くカーマニア
忌明けて涙くんともさようなら
尺取虫にやらせてみたい徒競争
水たまり三段跳びでまだ越せる

橋本市 石田 隆彦

頼もしい明日が見える幼児の絵
搾るなら民の財布という政府
銀行で寝ている論吉起こさねば
陽に風に触れて生きてる歓喜抱く
九条はお国自慢の一つです

鳥取県 石谷 美恵子

結び目に心配性の母がいる
背なの荷を半分こする夫も老い
敗因は伏せさわやかない握手
のどかさへ私の湖も春の彩
鼻唄でマドンナ男選っている

鳥取県 斉尾 くにこ

フレームに似合う笑顔をつくりあう
うちとけて親しくなつて軽はずみ
書いて消す最上級のひまつぶし
感動の風船うさぎ飛んでいく
薫りたつ半身枯れたライラック

鳥取県 竹信 照彦

御馳走をみんな排出今朝の快
食文化高価な味はいりません
水道の水がおいしいおらが町
地球上過食と飢餓がせめぎ合う
濾過しても飲めぬ原発事故の水

鳥取県 西谷 悦子

ありがとう今日無事終えていい眠り
消去法外れて残るのはあなた
青春の思い出セピアにはならぬ
あいまいに生きて一日スーと過ぎ
フワット浮いてわたしも春が来る

鳥取県 松川 行男

好天に法事の客は田を語り
人知れず雑草喜々と背伸びする
草刈らず鳥の巣立ちを遠回り
大阪へ愛しい我が句行ったきり
催促は春の逃げ足早いから

鳥取県 山下 節子

頑張ったねそれでいいのよ続けましょ
不意打ちにこれから行くとメールくる
何しても相談相手居る至福
指切りで結んだ小指枷になる
結んで開いて今は介護のリハビリに

鳥取県 山本 正光

明日が来ぬ日はないと知る芽や蕾
草抜きのできて心地のよい疲れ
ひとり酒勝手気儘に飲む至福
義理がたいお方で姿勢崩されず
カラオケバーママに一杯奢らされ

鳥取市 池澤大鯨

どうにでも化けてみせるという自信
チャンスには大口あけてひと踊り
ガソリンのセルフサービス面倒だ
手前味噌自身で元気づけている
他人の振り見て流行を追いかける

鳥取市 奥谷彩子

泣き笑い溶けないままの舌下錠
老いたって夢のつぼみを掌の中に
父の敷く轍を越えて子の巢立ち
終焉の舞台つとめる馬の足
彼岸めざし泥舟漕いでいるピエロ

鳥取市 加藤茶人

明暗は死ぬ時言えるありがとう
それまでが長くそれからつい欠伸
妻と言う曲者妥協点探す
改憲へブルータスかよ民主党
先見れば不安募らす温暖化

鳥取市 岸本宏章

隠しごと孫が真実ふと洩らす
信号の黄色がいつも迷わせる
審判は偉い監督クビにする
忠告を蹴った若気をいま悔いる
損か得か貧しいところだと気付く

鳥取市 岸本孝子

こてこてと性に合わないサスペンス
始球式女性の大使とは粹だ
嫁の座を蹴って逃げたい日もあった
赤を着て白髪に華を添えてやる
手弁当安・近・短の趣味仲間

鳥取市 倉益一瑤

変哲もない風景にいて安堵
輪を抜けるとても清々しい朝だ
迷い道待ち針打ったのは母か
甘い点付けてわたしの妥協癖
結び目に少しほどいた跡がある

鳥取市 鈴木一弘

青い空ひばり囀り夏だより
揚げ雲雀空一杯が音楽堂
ひるがおは夏の陽なかの浜に咲く
木漏れ陽が木の葉揺らして夏を呼ぶ
ものさがし明けては暮れる認知症

鳥取市 永原昌鼓

軽過ぎる口は男の値を下げる
男なら尻尾振らずに闊歩せよ
光る春靴を磨いて出かけよう
こたつからもう出なさいと花は咲く
不意打ちを食らうようではまだ未熟

鳥取市 中村金祥

鳥取市 福西茶子

一時の安らぎスマホ電池切れ
日常に戻る渋滞重い足

自信過剰ビクリと胸を突いてくる

指切りを信じ命をかけている

古新聞タイムスリップして開き

鳥取市 夏目一粹

家計簿の余白に妻の歌がある

子に残す遺書に御身を大切に

潮どきを忘れとうとう高齢者

リラックスすると心は青い空

かなしみの杖一本が捨ててある

鳥取市 西川和子

ほど程の所で高くは望まない

背が縮み高い所は避けている

二三段下の高さが丁度いい

ブライドがちょっと介助の手を拒む

お手本がいいから僕もほめられる

鳥取市 春木圭一郎

何事も許す豊かな心持つ

自意識をリセットはぐれ鳥になる

失敗も場数を踏んで克服す

雑誌から学ぶことあり咀嚼する

周到に準備しながら結果待つ

風船割り残った人はお嬢様

クラス会みんなキラキラした余生

亡父母に逢うには杖と掛け声と

泣くよりも歯を食い縛る悲しさよ

脚腰の粘りに自信持ちすぎた

鳥取市 前田楓花

フィルターを通して愛を確かめる

三日目の旅の終りに傘忘れ

我慢したらガマンした分食べている

赤裸々に自分をさらけ出してみる

リトマス紙涙一粒吸い取った

鳥取市 吉田弘子

女人禁制のまつり少子化には勝てぬ

慎ましい女性だぶらず山桜

ストレスも毒も吐き捨て大笑い

決断の時へどきどき呑み込んだ

駄駄こねる機械なだめる達人よ

鳥取市 両川無限

風の裏呼んでダルマの無表情

熱心に口説かれ青いバラになる

表向き亭主関白以下余白

恥かいて学んだ過去に乾杯だ

さよならと女が捨てた時刻表

倉吉市 猪 川 由美子

増税へ儉約主婦の腕が鳴る

寿司は褒めキツイ注文オバマ氏だ

冤罪は晴れても心病んでいる

ゴールデンウィークみんながみんな休めない

買い溜めも期限に迫われ腐らせる

倉吉市 山 中 康 子

煩惱をほうり投げたい洗いたい

綻びが何と不器用だと笑う

遜ることを学んだ有頂天

底のそこまで落ちてから一本気

胸もとに忍の一字を植えつける

米子市 後 藤 宏 之

仏壇の写真みながらコップ酒

それからがつもりつもっていい結果

こりもせずいつも美形にだまされる

外交のカードこちらでバツと切れ

無理をして神話ブームを追いかける

米子市 後 藤 美恵子

藤簾雅の時を過ごさせる

鯉のほり眺め安堵のお茶を飲む

それからとせがむ童話が出てこない

金槌が宇宙遊泳憧れる

ユニークな顔にメス入れ能面化

米子市 竹 村 紀の治

廃屋が噛み砕かれて生を終え

ふる里がいつぱいダンボール届く

おもちゃ箱戦車が眠りから醒める

本当に寛げるとこひとつ在る

年金に合わせて痩せる努力する

米子市 中 原 章 子

物忘れせぬ妙薬は間を置かぬ

ハコモノが役目終えても放置され

遅咲きの花にお日さま微笑んだ

お節介より手助けがありがたい

これからは台本のない道歩く

米子市 吉 田 陽 子

あたため直しするたび愛が深くなる

思い出を詰めてお返しする命

ロボットの介護は堅くお断り

八パーにびくともしないもやし買う

ミシン踏む寡黙な時を楽しまん

松江市 石 橋 芳 山

脅迫であろう光も音もない

重いもの背負って耐えている駱駝

まぼろしの目覚めたときに飛ぶ蛸

バタゴニアあたりで踊いた風だ

ニンゲンに線をひくから変になる

松江市 小川 注湖

消費税小銭が重い皮財布

一流店食べて帰って聞くニュース

散歩道愚痴も貰って歩きます

ポインツの溜まるカードを良く使う

良いニュース読んだ電話を喜ばれ

松江市 錦 織 禮 子

ひと鉢の花に心を奪われる

美に触れて食に感動至福の日

のほほんと終い支度の話聞く

半島で蛭育てていと言ふ

美白へのロマンあきらめきれずいる

松江市 藤 井 寿 代

検診をかかさぬ夫それも愛

蟻一匹殺して終える内輪揉め

素直になれよなれよと撫でる石あたま

ジェットコースター空も一緒に宙返り

楽しい予感夕陽にもらうファンタジー

松江市 松 本 知恵子

五月の陽体内時計合って来る

ネット社会賢者もどきが増えていく

底辺を流れる継続は力

逆説を言って荒野にただ一人

お誘いは未だか牡丹に藤の花

松江市 松 本 文 子

旬のものの裏の山から採ってくる

オレオレ詐欺まだひっかかる人が居る

厳寒をもう忘れたか花の宴

モンローウォークで鳥が後を従いてくる

許されて咲いているのだどの花も

松江市 三 島 淞 丘

蓋をした筈の心が詩に出る

蹟いたはずみに過去が甦る

嘘ひとつついて私を軽くする

喜怒哀楽それぞれ違う酒の味

試験管などは似合わぬ割烹着

出雲市 石 倉 美佐子

逢えばもう昔々の恋の花

遠いと思えば遠い山の向う

朝陽に夕陽毎日違う美しさ

老い二人夫婦のような友のよな

近所中鳴らした鈴は何処へ行った

出雲市 伊 藤 玲 子

腹へって押し問答は後にする

昭和のメロデー歪を膨らます

メルヘンの世界湯舟に首浮かし

ヤアヤアと淋しん坊が来るベンチ

隠し事なんにもないと阿波踊り

出雲市 岸 桂子

久々に涙見せ合う山ワサビ
感動を呼び戻したくメガネ買う
炎え尽きた椿の匂い包む風
鎮魂の母の墓地へと足が向く
やぶ椿ひとつりと散るそれでいい

出雲市 小白金 房子

戴いた神号吊す大祭礼
ひとつひとつ咲いた笑顔が地にかえる
カーナビが教えてくれる景勝地
袋帯ひととせ一日大事に花の宴
米袋みやげ島根の味愛す

出雲市 竹 治 ちかし

季には季の恵みがくれる小さき幸
同窓と語れば湧いてくる昔
年経ても生徒は生徒師は師なり
悔やみ欄載る相応な齢となる
地に染まり切れないままにいる余生

出雲市 多久和 敬子

包丁をにぎると主婦の顔になる
給油して無口どんどん喋り出す
酒飲んで昨日の事も忘れてる
平凡な二人の会話今日の幸
知恵袋開けても何も出てこない

広島市 岸 本 清

路のとう口の中まで春にする
瀬戸の海安芸の小富士を引き立てる
V予感今年の鯉は生きがいい
記憶にはないが日記にある事実
譲られた席を妊婦にまた譲り

竹原市 石 原 淑子

進む命眠りを浅くする
石南花に見惚れ本尊観ず帰り
このところもぐらたたきのもぐらです
約束が消えて一日何もなし
命の灯ふうわりふわりただ祈る

竹原市 岩 本 笑子

無に還る還ると独楽が言うのです
何を悟ったのか枯れてゆくバラよ
嬉しさは蛙が鳴いて雨が降る
種をまく夫の背少し丸くなり
医者通い慣れていねむりしています

府中市 藤 岡 ヒデコ

おめでとう八十はまだまだ途中で
エプロンを付けて気持を引きしめる
甘やかしたつけか左手しびれます
つらい事があるのぞきみるひと言よ
あしたへと幸せつなく横糸に

宇部市 平田実男

信号の青が少なくなる八十路
入賞の花壇へしばし手を合わせ
忙しい人へ病気は寄りつかず
菜園の草と野菜の背比べ
賞味期限切れを拒まぬ僕の舌

東かがわ市 川崎ひかり

ハングリー骨身にしまっている昭和
たんぼの綿毛生命の旅に発つ
平成に取り残されていく昭和
隠してる処に深い傷がある
生涯を以下同文の列に入る

松山市 古手川光

リストラをされた男が菜を間引く
もっと上手く捌けと鯛の目が叱る
あんだ誰五〇年ぶりクラス会
パスポート無くても行ける黄泉の国
相性が悪い雰囲気が悪い

大洲市 中居善信

アベノミクスへ切り捨てられる千枚田
下半身からじわじわやって来た老化
五手先は読める十手は考えぬ
イカ釣って流せるほどの鬱である
孤独死へあんたも運のない人だ

西予市 黒田茂代

お月さまが出たので話変えました
すぐそこに見えても頂上は遠い
台詞聞こえなくても楽しめるお能
軽そうに面白そうに一両車
パソコンもスマホも知らず生きている

高知県 小澤幸泉

共稼ぎ多忙多言の罪を負い
サフランの花をさがしに誕生日
雑草の強さが消えた城下町
電話では言えぬ思いで書く手紙
開かれることなく隅にくすり箱

高知市 小川てるみ

集中力欠いて欠伸をうつし合う
思うようにならぬ夫も人生も
借りてまで私を飾りたくはない
筍の旬をたらふく食べました
連休をじっと我慢の庭いじり

唐津市 坂本蜂朗

カロリーをカットしている鬼の愛
新婚の旅で魔法がとけてくる
辛うじて女の証紅をひく
生きている恋の扉は開けてある
介護済み身軽になれば迫る老い

唐津市 山口 高明

国民も懸念してまず武器輸出
憶測で責めると詰めが甘く成る
遠回し言えど堪えぬ鉄面皮
息止めて見ても死ねない洗面器
維新にも任せて見るかご政道

熊本県 岩 切 康 子

宝箱頂き個々に心打つ
相棒の分まで作るにぎりめし
機嫌見て聞き返して確かめる
そよ風に揺らぐ観察山野草
リコル車テレビが教えて呉れました

熊本市 永 田 俊 子

天災人災すまし顔して地球は回る
テレビの馬鹿笑い見ているロスタイム
億の金見たことがないお碗の花麩
どこに置いたか私を探している迷路
にこやかに出来ぬ百寿のVサイン

(前月分) 神戸市 福 原 悦 子

声程の元気が欲しい手と足に
目標をすれば越えたい自負がある
切実に友の心を聞いている
迷うまい強く生きよと亡夫の声
子の部屋に角度の違う空がある

(前月分) 黒石市 相 馬 一 花

馴れ過ぎたクマは演歌に踊り出す
大物同志贈収賄の腐れ縁
こっそりとルビを振つてる名祝辞
ご主人は正座で妻は胡座かく
世渡りが下手で社会を敵にする

(前月分) 奈良県 中 原 比呂志

頂上へアタックルートが狂い出す
瀬戸際で仁王の眼光がしかる
あみだくじはずれてうれし歳重ね
被害者は美人ばかりの週刊誌
深海魚永田町にもいるらしい

(前月分) 倉吉市 牧 野 芳 光

自尊心を持ったか雑魚の群れを出る
金勘定すると自分が嫌になる
ゆるゆると春へと落ちていく夕日
釣竿を持つて唐変木になる
好きになるたび弱点が増えてくる

(前月分) 京都市 西 村 益 子

桜吹雪今しかないと浴びまくる
良い人になろうとしたら肩がこる
物差しを変えれば見える思いやり
量より質価値観変り老いを知る
こんなにちは名前出て来ぬ間の悪さ

(須郷井蛙さんの句は49頁にあります)

川柳塔の

川柳讃歌

(15)

木津川 計

無農薬こだわる妻は薬漬け

中村 金 祥

自然食品を求めながら、薬漬けの老人は高い医療費を健康保険で救われている。先日僕に届いた昨年9・12月の医療費に驚いた。

Kクリニックに4回・11万2千円(薬代含む、以下同じ)、A耳鼻科2回・1万7160円、市民病院2回・1万7700円、T歯科1万5900円、計16万2800円。大体この割で通院するから年間50万円近い医療費が1割ですむのが有難い。団塊の世代が病み始めている。受難の世代の老後は厳しい。

東海林太郎唄えば孫の薄笑い

丹後屋 肇

「赤城の子守唄」を僕も唄う。「国境の町」に「むらさき小唄」、「ヘリラの花散るキャバレーで逢うて」、「上海の街角で」も僕の十代の思い出。

東海林は「マイク一本の四方が僕の道場」

を信条とした。単なる歌の道、ではない。歌道^{カク}を歩んだ人だったから舞台で直立不動だった。飛んだり跳ねたり之歌をうたう若者に東海林太郎は古色蒼然である。肇さん、お孫さんに薄笑いされてもよしとしましょう。僕も青春の歌道に殉死するつもりです。

戦争を知らぬ人らの樟さばき

岩本 美智子

「積極的平和主義」を造語した戦争を知らない人物は智者である。積極的に九条を守るのかと思うと、まるっきり逆なのである。この4月、勤労者の実質賃金は昨年比31%のマイナス(厚労省調べ)。大企業と大金持ちにはアベノミクスは輝きであろうが、輝ける闇もある。ベトナム戦争を取材した開高健は惨憺の戦場体験『輝ける闇』をこう結んだ。「いやだと思った。つくづく戦争はいやだと思った」。開高と美智子さんに共感する。

蟻と象命の重さでは同じ

三浦 強一

この句、川柳だが詩でもある。現代詩に人氣がないのは当たり前で、詞はあるが納得したり、胸を打つ(詩)が少なくからだ。

子もごころを把えた「アンパンマン」のやなせたかしは「てのひらを太陽に」で、「ほくの血潮」は、オケラやミミズやアメンボに

も流れる血と同じだと歌った。これが主張であり、詩なのだ。蟻と象は同じ命という強一さんのように今日の川柳もかくありたい。

ボンと背中叩かれそうな日曜日

川本 晔

「千日前肩をたたくと連れになり」、岸本水府の名句だ。まして日曜日、ボンと背中を叩かれたら「いいいこ」ところがはずむ。

せめて日曜日は杉山平一の詩「日曜の夕方」のようにいいことばかりであってほしい。

「ジュースもんだし／ホットケーキモタバタシ／おもちゃも買ったし／ヨカッタネ！／粗末な服の母と子が／手をとりあって／私を追いついてゆく」。ここに詩がある。

潮時という納得のことばあり

瀬戸 まさよ

僕はどんな終末を迎えるのか、この頃時に考え込む。久保田万太郎は梅原竜三郎の美食会に招かれ、赤貝を気管に詰まらせトイレに走る途中、大音響を立てて廊下に倒れ窒息^シ死した。74歳だった。友人の佐藤春夫は「逝莫^シ、我はまた誰とか与に詩を語らん」の弔辞を詠んだが翌年、放送の録音中に大苦悶の声をあげて急死した。山田風太郎の「人間臨終図鑑」が記している。まさよさんの言う通り潮時に蕭然と逝けないものか。

(「上方芸能」誌発行人)

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

水 鶏 庵

鬼になりきれなかった人生のたそがれる

八十五点という人生でありしよな

水すましに暫し忘我の我でよし

牛の瞳に人間何をあわてとる

口八丁自分の恥もさらけ出し

リーダーともおっちょこちょいとも言われ

社長とは金融に走るものなるか

虞や虞や汝を如何せん四十八

還暦が自分であった面白さ

命ある句命ある句とて寝てしまい

優越感フト気がつけば一人なり

社長今日孤独の二字をかみしめる

浅間温泉にて

出湯の窓乗鞍常念指呼のうち

エビフライ時価というのが気にいらず

落人部落成程という目鼻立ち

元軍人という礼をして借りてゆき

古川柳の通りに指図風邪の妻

血圧を計りに来てる大三十日

まどろんで手形の夢とはあわれなり

バラ垣の主は戦争未亡人

伝書鳩のような夫となり果てぬ

かにかくにトレードマークとなりし髭

自選集

小島蘭幸

父の儀打当り前だと思つてた
青鬼と言われた頃の父が好き
父と飲むことは叶わず義父と飲む
しゃべりだしたら止まらぬ義父と飲んで
娘のボーイフレンドが来るさて父よ

遠山可住

三男坊の丑で黙々米作り
靖国の神は貧しき二三男
自衛権戦争知らぬ者が吠え
留守宅へ筈一本ありがとう
四代目を継いで燕に癒される

都倉求芽

美味しいね どれだけ使った隠し味
あじさいが人選り分ける不許葦酒
町内を守るお地藏さん守る
悩みごとなんかに使いたくない時間
目の高さ以上は年金望まない

土橋 螢

人殺す練習をした青春期
お別れの曲はゆっくり海ゆかば
死ぬことを忘れ誕生日を祝う
報恩感謝終りの鐘を三つ打つ
真っ黒になる悪人の影法師
性別は男の方に○をする

西出 楓 楽

おほろ月大人の童話語り出す
脅えています寝た切りと認知症
腹立てるたび書き直す遺言書
亡母ふと食べに來そうな豆ごはん
三軍の補欠わたしの役どころ

仁部 四郎

勇気でした初めて親についた嘘
勇気でした教育勅語棒暗記
勇気でしたパンツルックにハイヒール
勇気でした初日上司に口答え
勇気でした互選で受けた部長職

波多野 五楽庵

珈琲の匂いがまじる標準語
ひなげしや夢ははかなく消えるもの
黙ってる男に黙って酒をつぐ
一匹の猫と真面目に話し合う
血糖値自動販売機が並ぶ

大宇宙の一つの星よこの地球

名匠との出逢い寿命がまた伸びる

優しさが欲しくて珈琲店をさがす

どんぐりの夢へ優しい雨が降る

天窓のいつもの位置へははの月

春の挨拶なくて夏日がやって来る

日の出待って大阪城の一万歩

うつ伏せ寝枕三つの心地よさ

話し合い忘れてヒト科どこへ行く

悪政も三年半と聖書言う

秒針の早さよ読書まだ途中

時に時計も老いを気遣い立ち止まる

哀しさよ電波時計がややこしい

諍いを中断させる鳩時計

時移す時計に背なを押されてる

旧友にまた会いましたお葬式

いろいろとありすぎました黒真珠

遠回りして得たものも多かりし

飲みに誘われて行ったら喫茶店

鞭打たれ狂気の沙汰が駆け抜ける

林 瑞 枝

前 たもつ

政 岡 未延子

三 宅 保 州

てくてくと日傘代りになる青葉
呑むほどに酔うほど過去の苦

裏側に女の秘めたかくしごと

ほっこりと阿弥陀堂も開く青葉

オッパイもおしゃれも嘆く胸の線

バスポート

朝夕に千度は回す風ぐるま

生きるのか死ぬのかと問う歩数計

すんなりと朱の戒名を受け入れる

千の手のほとけと指を絡ませて

黄泉路よみじランドの通行証も下された

ざまあ見ろロボットが子を産めるかい

愛の目方げっそり減って来た離婚

もちろんだ妻より先に逝くつもり

ロスタイム間近か認知とボケが待つ

年金カットいつまで続く氷河期よ

九階は自殺するには高すぎる

寝転べば蟻の乳房に指が触れ

皿に水入れて泳いでいる鯨

水の愛氷の愛は解けやすし

世界一キレイな妻だんなアホな

宮 西 弥 生

八 木 千 代

両 川 洋 々

板 尾 岳 人

奥田みつ子

過去から逃げて小さい灯点す胸の底
柔らかい笑顔で包む硬い意志

直接逢えばとても気さくな人だった

注目の二人をかくす夜の霧

チャンスチャンス絆大事にあたためる

河井庸佑

四苦八苦やつと迷路を切り開く

ジंकスを信じ打つ手が出る裏目

風読んでここは動かぬ策を取る

お互いに誤解と分かり縊り戻る

世の常と思う矛盾が気に掛かる

川上大輪

あの日からまだ繋がらぬ接続詞

華があるのは寄り道をした証拠

甘やかし過ぎた尻尾がよう動く

足して引き引いてまた足すものがない

和洋中 何でも揃う裏通り

小西雄々

軍隊で習い役立つ縄を縛う

我を通し男気またも出しすぎた

値切ったら扉の締り悪すぎる

裏側は見えて欲しくない花もある

恩忘れ影法師から叱られる

斉藤 荔

陽の匂いたつぷり沁みているシャツだ

蒔く種の一粒ずつにあるドラマ

絵馬の裏にもたつぷりと陽を浴びせ

狂い咲く薔薇には薔薇の訳がある

手植えする子らの田んぼに明日がある

新家完司

トイレまでバニラの香り菓子工場

墓掃除般若心経唱えつつ

誰にでも誠意を尽くすウオシユレット

宴会の段取りだけは腕まくり

満開の駅をぼんやり通過中

恒松町紅

投げやりの庭で牡丹の花盛り

足腰が弱つていても爛はする

千客万来湯吞茶碗も忙しい

円満な風が出入りをする障子

窓開けて輝く星を探してる

津守柳伸

せめてもの贅に欠かせぬ朝バナナ

雪解けて野麦峠に光射す

奥入瀬の水滔滔と風みどり

耐え抜いた戦後瓦礫の音がする

築七十シーソーゲームをする命

14 尼崎川柳大会

月 日 8月23日 (土)
 場 所 兵庫県立・ピッコロシアター
 開 催 12時 出句締切: 13時
 会 費 2000円 (大会誌・粗品呈)
 兼 題 各題2句・欠席投句拝辞

「凝る」	河原野折杭	選
「異」	早泉 早人	選
「目線」	村上 直樹	選
「それから」	山口ヨシエ	選
「きらきら」	大楠 紀子	選
「集う」	長浜 美龍	選

懇親宴 4000円

主 催 尼崎川柳協会

連絡先 藤井宏造 (06) 6494-5187

川柳塔

(つづき)

(前月分) 弘前市 須 郷 井 蛙
 寝ることが趣味傘寿が過ぎました
 元老と言って欲しいよ後期高齢を
 買ったままスキー一式捨てられず
 初受診オール検査で疲れます
 結局はアメリカ支配PPP

温故知新

『谷垣史好句集』より

壮大なゴミとなる日の地球かな
 やがて秋紺の背広が待っている
 お元氣な陛下を母は生き甲斐に
 お喋りは楽しくしようふくらし粉
 惚れているから返してほしくないお金
 きょう口をきいたは集金人とだけ
 赤インク思えば長いつき合いだ
 肉じゃがが好きかそれなら信じよう
 悪乗りの最たるものよロンとヤス
 この世には美人はいない午前四時
 風は五月お弁当でもこしらえて
 人嫌いには非ず酒場の隅にいる
 こんにゃくの馬鹿正直は生れつき
 良心を家に残して逢いに行く
 葬式セットそんなギフトを下さいな
 灯を消せば灯がなつかしき路郎の忌
 年上の恋は小皿にとつてやり
 ノホホンと暮らして苺ジャムが好き



川 上 大 輪 選

佐賀県 真 島 久美子

哀しみが来たのは句読点あたり
一滴の黒が私を眠らせる

太陽になり損なつた笑顔です
まっすぐに並ぶと人は嘘っぽい
絶対に押すなど書いてある背中
恋をした日から人魚のいない海

岡山市 藤 成 操 江

右左揺れてリベンジ繰り返す
気掛りな言葉貰つてからの雨
真実を見たくて少し距離を置く
頑張つてノーと答えてから晴れる
咲いた日もあつた貴女もわたくしも
おかげさまともかくにも古希間近

三原市 鴨 田 昭 紀

水が澄むまで行使する黙秘権
水飴をなめる密やかな楽しみ
前列に立たされ風除けにされる

着飾って寒いところを温める
四面楚歌川の流れが速くなる
寒々と灯す会話のない暮らし

豊橋市 藤 田 千 休

引き際で男の価値を決められる
今日という日から逃げだす夜行バス
肯定も否定もしない首の骨
肩書きをひけらかしたい名刺入れ
何方とも仲良くしたい自動ドア
箱入りにメロンが座る貴賓席

米子市 湯 浅 俊 久

連れて出た犬がリードをする散歩
ライバルに勝って話がしたくなる
くつろげば心配事が顔を出す
光るもの持っていないから歯を磨く
お二階へ手摺りにっこり助け船
大安を頼って買ったはずれくじ

泉佐野市 稲葉 洋

踏み出した古い路早いと聞いてたが

賞罰もあつた八十路を可としよう

自叙伝よさて短篇か長篇か

脳内を初期化して聞く余命かな

八パーセントちよい暗算に時間とり

花よりも若葉に力見いつけた

山口市 中前 幸子

藻に揺れるわたしの中の夜光虫

風の彩までるんるんの旅日記

波打ち際のポエム裸足の青春だ

冷静な影に見放されたわたし

涸れた思考で虹の尻尾にぶら下がる

影の無い男を追いかける白夜

和歌山県 森 下 よりこ

仕切るのが好きな女はどこにでも

おじいさんに褒められているおばあさん

連休は花と対話をしてひとり

一人食べるたこ焼きあまりうまくない

生きていけば手相も変わるものと知る

すっきり目覚め朝寝がっつらいおばあちゃん

池田市 上山 堅 坊

旅に出る見知らぬページ開くため

人いろいろ自分らしさで生きるんだ

それでそれだと聞いて噂を流す人

遠ざける自慢話の好きな人

心配はやめてひとまず居酒屋へ

ごそごそとゆく路地裏のパラダイス

松江市 武 島 千代枝

十二単脱いで筭伸びてゆき

花の名は覚えきれないカタカナ語

小春日にシルバーカーのお供する

何も彼も値上げしわ寄せどつとくる

値上げした値札並んで店静か

押入れに昭和びつしり眠ってる

松山市 神 野 きつこ

請求書ばかり舞い込む五月病

8%に買物物が軽くなる

初舞台他人の視線突き刺さる

母の日は母の自分を解き放つ

スマホから顔を上げない反抗期

激動の時代を泳ぐ鯉鱈

横浜市 川 島 良子

大丈夫ひとりでちゃんと生きてます

ナビ通り走らなくてはダメですか

正直に話してくれてありがとう

ストライクゾーンで君を見失う

英会話よりも挨拶できる兎に

合わせてはならぬ視線を意識する

弘前市 吉川ひとし

愛知県 樺嶺志

仏滅にひよいと顔出す欠けた月
青空に演歌流れている足湯
シャッター街人の匂いも消えました
見るたびに父の遺影が若く見え
満開の百合の花粉が邪魔になる

塩竈市 木田比呂朗

血圧と無理に折り合いつける日々
家計簿も予備費思案の夏休み
晩酌のビールもついに亜種にされ
不器用がまだまだ続く古希の妻
原発と値上げ飛車取り王手かも

東京都 川本真理子

厚化粧何も映さぬ目の少女
心配をよそにボカリと月浮かぶ
心配の種も一緒に炒めるか
居住権猫の主張に耳を貸す
本日は失敗ゼロの佳き日なり

横浜市 長島亜希子

甘えちゃだめ先に逝くとは限らない
素適な方現われそうなバラの庭
古希祝うカタログ目立つ場所に置く
じいじに頼め売り場でママが勧めてる
人知れず咲く花で良いわが余生

耐え兼ねてつい手が伸びる鎮痛剤
痛みには我慢不要と医者は言う
腹痛を鎮痛剤に頼る日々
思わずも赤子の指に感嘆す
孫のため長く生きてと息子言う

大阪府 神野千恵子

鈍行が停まる優しい顔の駅
仏壇に笑顔を見せてさあ今日も
美味しいと思うメザシもフォアグラも
エキナカとスマホですます味気なさ
朝昼晩だけは毎日変わらない

大阪市 大治重信

あれこれと鏡睨んで皺隠す
出世せず人畜無害憎まれず
底抜けに飲んで話は難しい
ママ一人欠伸してから暖簾下げ
ママさんはベッピンやけど吝嗇やねん

大阪市 宇都満知子

今更と思いながらも日焼け止め
紫外線上下左右に攻めてくる
休日はずいぶん空気をチャージする
晩酌に冷えたグラスをさりげ無く
専属のスタイリストはうちの妻

大阪市 柴 本 ばつは

不義理したふる里山はデンとして
乗り継いでついで行きます母の里
楽しそうに暮してますが火の車
長生きはめでたいけれどさみしいね
来てほしい帰ってほしい孫五人

大阪市 高 杉 力

繁盛の度合いが分かる駐車場
満員の電車昭和と揺れている
辛苦手なのにポテチなら食べる
幸せの数だねマンシヨンの灯り
責任をとるのは誰だ判並び

堺市 羽田野 洋 介

いいとこだけそっくりとればそれもよし
とんちんかん言うた言わぬのくり返し
顔だけは広くて心狭いのか
登らずに見るだけでいい富士の山
怖い慣れそつと油断が忍び寄る

泉大津市 助 川 和 美

弱点を見せない夫にくたびれる
紅引いた娘に父はもう不安
何取りに来たつけ開けた冷蔵庫
いつまでも女記念日忘れない
閉店の貼紙剥がす春の風

河内長野市 大 島 友 子

ヒーローショー子よりはまって座り込む
ヒーローは苦手野菜もちゃんと食べ
ヒーローを目指し腕立て続けてる
知らぬ振り外ではしろという息子
知らぬこと知らぬと言えぬ腑甲斐無さ

河内長野市 辻 村 ヒ ロ

会合に遅刻した人よく喋る
老いてなおキラキラさせる好奇心
女です再生させる化粧箱
未知数をカバンに秘めた靴の音
欲ひとつ減らして過ごす老いの日日

河内長野市 藤 塚 克 三

居ると邪魔居ないと寂し俺の位置
ヨチヨチの孫追いかけるよたよたと
説得に折れたが叛旗胸に秘め
優しすぎる奇怪な妻に身構える
女の怖さ知らないうちが華だった

河内長野市 穂 口 正 子

赤い羽根これは私の免罪符
美容室帰りの道は人恋し
車中メークそんなに時間なかったの
意気地無し嫌なら嫌と言うが良い
母の日が終わる間際の子の電話

貝塚市 吉道 あかね

富田林市 中村 惠

体力を温存今は風のまま

色褪せて空気になった宝物

まだまだと女で映る姫鏡

笑って笑って私美人の仲間入り

山菜づくし世界遺産も飽きてくる

豊中市 荒木 郁子

なりわいは主婦息抜きはへそくりで

意地を張りますます悪い噛み合わせ

寂しいね喧嘩相手もいなくなる

唸るほど金はあるっても慎ましい

楽しみは余力残して後半に

豊中市 荒巻 夢

花水木次はわたしとほころびる

おばあさんと呼ばれもやもやるわたし

原発に試されているわが心

原発の安全神話言う不遜

国守るそのひと言に騙されて

豊中市 貝塚 正子

星みても乙女にならぬアラセブン

物を言う道具が増えてやかましい

束の間も目を離せない孫と夫

小指だけ離れてくれぬ足グッパ

ネバーギブアップまたいいことがきつとある

春風に乗ってきたのは影だった

前売りの切符2枚はおしゃべりで

想像は籬の奥にあるドラマ

夢一つやがては春のラブコール

一斉に動きを止めた咳払い

寝屋川市 岡本 勲

春風にさそわれ女房の薄化粧

ぬるま湯の恋に低温やけどする

幸せはここにあったか妻の留守

猫舌の母の遺影にぬるいお茶

春うらら乗客ゼロのバスが行く

羽曳野市 藤原 大子

五臓六腑主治医それぞれはしごする

リフォームに歳が待ったをかけてくる

ときめいて前頭葉を芽吹かせる

8バーが暗算力を磨かせる

願い事叶えたいから黙ってる

八尾市 中岡 妙

母の日のカーネーションの売れ残り

気を抜けば花も私も萎れてる

パソコンは使えぬけれど障り無し

食洗機にご苦労さまとお礼言う

年の差は問わぬ波長が合う仲間

八尾市 前田 紀雄

平均寿命過ぎれば欲は捨てる

几帳面短所と長所交差する

雑学で知識を漁る好奇心

方程式解けないままに古希半ば

父の日は無視母の日はありがとう

神戸市 玄 番 美恵子

迷いから抜けてあすへの風を読む

母の背を抜くには遥か遠い道

止まるなどみどりの風が背なを押す

あいまいな返事大きな荷を背負う

大往生おろおろしない家族葬

神戸市 富 永 恭子

膝と腰悲鳴をあげて歩行阻止

楽し気に牛歩の列の熟女たち

フジの花しだれて幸が降るようだ

花巡り遠回りするウォーキング

白い花に囲まれちよつと清くなる

神戸市 松 井 文 香

切り札を持った菩薩にすがりつく

幸せの定義自分で作ります

不本意に翼を畳む時もある

米囃みの疼き自責の念かしら

自分史もそろそろ転に差し掛かる

神戸市 山 根 弘子

あいまいに返事したのが命取り

切り札を切ったばかりに後引けず

三枚目今日も演じて無事に暮れ

補欠でも夢はでっかいホームラン

切り札は妻の十八番の離縁状

川西市 大 坪 一 徳

春の雨生命の賛歌が聞こえます

言うよりは自分でやるが母の主義

距離感を大事にしたい淡い恋

二泊三日二キロ増加で無事帰宅

齒科眼科内科と回り今日も暮れ

三田市 上 田 ひとみ

ご一緒にゆっくり風とはなしましょ

口元がかたくなつてはいませんか

好きな色やつぱりピンク今だつて

クッションの位置がとっても大事です

あぁなんて優しく強い声だろう

篠山市 北 澤 稠 民

飲み会で酒の肴は欠席者

何もかもかけ声のいる年となり

苦勞性いつも不幸を負っている

妻の留守もらったネクタイしめてみる

逢うたびに今度飲もうよまたいつか

西宮市 株元 玲子

和歌山市 北原 昭枝

のどかに過ぎてゆく小さな幸せ
昨日のこと忘れ今日だけしっかり

心配は体に悪し神棚へ

訪ねくる病にこんにちはと言う

悟った振りだまされまいと目がすわる

南あわじ市 萩原 狸月

バラバラの帰省に困るおもてなし

屋上の星も呑み込む大ジョッキ

ストーカー押しの一手と勘違い

ぜいたくな眺め峠の田舎そば

同窓会これが最後と言う知らせ

奈良市 尾畑 なを江

お二階と携帯でする頼み事

好奇心いっぱい煮詰め夢つかむ

ガッテンのゆくまで家中掃除する

春の宵まずは手製の梅酒から

玉葱に泣かされお菜出来上がり

和歌山市 磯部 義雄

弾よけにされる覚悟で前に出る

大胆な薄着で誘う初夏の蝶

今はただ祈り見送る救急車

ヘッドから入れてバックで出る苦勞

掛け声はよいが上らぬ重い腰

ほとほどの元氣うれしくありがたく

いつからかはずしたままの薬指

封筒の中の大事なかくしもの

あの頃のコーヒークップふたつあり

坂いくつ越えれば母に近くなる

紀の川市 楠原 富香

心の窓あけて微罪を受け入れる

道草をしただけついた知恵の数

二人三脚いたわりあつて続く道

雑草は苦難を生きる糧とする

傷ついた言葉の上を飛びこえる

田辺市 小川 イセ

日曜のまた雨となる花筵

わっと菜の花紋白蝶の舞踏会

辛さを積む汗今日もたつぷりと

重ね合う心だんだん温くなる

老いにネジ巻いて望みは捨てられぬ

田辺市 大峠 可動

福祉の掌僕の手足を活けている

増税の日々におぼえた嫌悪感

八十路から先の命は運まかせ

人生を少し薄めて痴呆症

追伸の袖に一行辞世の句

鳥取県 下田 茂登子

一人とは虫一匹も恐ろしい

一人喰う食事の不味さ身にしみる

退院を夢見て逝った夫の靴

一人言言ってなんとか日を送る

八十歳まさか一人になるなんて

鳥取県 橋谷 静江

ドライブは人込みさけて田舎道

楽隠居したいが田圃しない子等

仲良しをつづけたいから妥協する

山菜の美味しいうちは採り歩く

仲良しの友と食べれば別腹だ

鳥取市 近藤 秋星

百名山わが大山も凜と在り

自らが燃えねば何も始まらぬ

母の日の亡母は心の中にいる

指切りをしたことがないわが指よ

四国霊場巡り一度はして見たい

鳥取市 田中 天翔

軽く相談されて両肩重くなり

相談と言われて自慢話聞く

窓全開無料の空気たんと吸う

ありがたいと無料で心あったまる

言いたいことの半分は飲み込んでおく

鳥取市 津村 律子

棒切れを手当り次第杖にする

よく来たね言ってくれてる亡母の前

こぼす愚痴飛ばしてくれる千の風

井戸端会議口止め話で盛り上がる

割烹着白でありたい母ごころ

倉吉市 堀 かずこ

新聞をルーベがないと読めません

口上手虫も殺さぬ顔をして

春だ春花も咲きますこの胸に

一言の心づかいが身にしみる

仲裁に入り八方ふさがりに

米子市 池岡 たけし

手前味噌一人力んで気合かけ

老ゆる身にまとう寂しき振り掛け

寂しいと思う我が身に発破かけ

年毎に壊れる我が身思いよせ

一人減り二人減りする旅の友

米子市 野川 宣子

杖になる約束違え友が逝き

杖持った老人パワー絶好調

過去形で語られている火吹き竹

旅立ちに四月の風が背を押す

この先が見えない老いも齒は磨く

松江市 中 筋 弘 充

息子おらぬのでオレオレ電話待っている

父の日は母の日よりも地味である

善人もドキドキさせる検問所

ママさんの笑顔に負けた酔っ払い

母の日に母の遺影に会いに行く

松江市 山 根 邦 代

受講料いらぬ趣味です我流です

一日が早くて仕上げ出来ぬまま

あなただけ内緒にしてと言われても

だからとて従うことの難しさ

頑張れのはげまし辛い時もある

雲南市 菅 田 かつ子

手を振ってとても元氣な押し車

それなりの理由もあるうがゴミにされ

世知辛い時世ですなとワンカップ

穏やかな人とは見えぬ酒の席

あれあれとすんなり言葉出てこない

岡山県 田 中 恵

霧の中鈴音ばかり追って来る

踏ん切りを付けて一風呂浴びている

筍の煮しめばかりが続く旬

土壇場で身をひる返す福の神

断捨離が出来ぬ思い出強すぎる

岡山市 工 藤 千代子

夕焼けという答がやっと出る

過ぎた日の楽しさ語るフライパン

左手に隠しています武器その他

例えばで突いてくる義母がくる

燕来る挨拶などは省かれる

瀬戸内市 東 横 ますみ

春一番動き始めた私の芽

原風景の中の私が崩れだす

勝算はあるが尻尾が重すぎる

末席の割り箸風を読んでいる

振り向けば今日の私はもう過去に

岡山市 永 見 心 咲

夢現つ気楽に今日を生きてみる

蓋をした水路いろんな音を出す

吹っ切れて一皮剥けた茹でたまご

瞬間に沸くから冷めるのも早い

蟻だつて巨石動かす志

尾道市 日 谷 寛

碑に注ぐお酒とろりと路郎の忌

七夕にいま甦る比翼句碑

少子化を嘆いて笑う腹乃さん

残るいのちが川柳塔を駆け抜ける

一度だけの父の笑顔を忘れない

竹原市 若年幸子

奔放に遊び心を生きている

この辺でラストダンスにしましょうね

ライバルは手強いメーク決めていく

ヨチヨチへ花もバツタもみんな友

五歳児も泣いて主張の自衛権

竹原市 土井輝恵

美味しいとオバマが言った酒を買う

五百羅漢男ばかりも姦しい

散歩道更地と空家並ぶなり

我儘な適応障害と言う病名

家一軒遺すだけでも揉めそう

宇部市 高山清子

知らないと言えば済むこと済まぬこと

キッチンで割りたい皿を洗ってる

相槌を打ったばかりに座を立てず

言い方を変えて本音を暴きたす

一枚の紙が石より重くなる

防府市 坂本加代

はっとして初心の頃を思い出す

子が巣立ち後は無欲のこの世なり

コッソンとぶつかるたびに視野開く

型どおりやってみてから秘策練る

日替わりで喜怒哀楽の面白さ

松山市 栗田忠士

決め所で決めて男の顔になる

こんなにやくの堅さぐらいで意地を張る

洗っても洗っても抜けきらぬ灰汁

しがらみは脱ぎ捨てました蝶の舞い

隠そうとするから嘘が浮いてくる

大洲市 花岡順子

昔ならもつと似合った春の色

土砂降りの雨しがらみが切れていく

敏感に空気を讀んだ片思い

若竹の後押しをする雨が降り

ゆっくりでいいと言われる年でない

山鹿市 三谷たん吉

何もかもまあいいかなですませて

けとばすかどなるか寝るかそんなこと

留年のお陰人脈多いこと

ドロ沼の政界学会教育会

こんな世に牙むき暮らす俺が居る

シドニー 坂上のり子

行ける時行こう命が燃える間に

ロンドンの春の息吹に出合う朝

石畳バイクの群れが走りぬけ

梅干をリュックに花のヨーロッパ

鮮やかな句が出来るはずだった旅

札幌市 斉藤 宏子

春風に髪遊ばれて夢を編む

店頭の春色野菜自己主張

手さぐりでなりたい自分を探す日々

チューリップ一本飾り祝う春

札幌市 富永 恵子

ボランティア明日の我が身を預託する

炊き上がる湯気の向うにおもてなし

一輪の花を眺めて五七五

春の陽をふわりと肩にバスを待つ

弘前市 高森 一吞

酒やめて酒吞まないで妻の声

馬鹿バカと言うなほんとの馬鹿に成る

ニューハーフ仮面二つをつかい分け

百名山ドッコイコラシヨ登りきる

弘前市 肥後 和香子

判断は心の底の湖に

死ぬ時のリハ―サルならちよちよいのちよい

あの一瞬間かに飛んだのはわたし

ああ何んと陶器のようなお方です

つくば市 嶋本 喬

目に青葉小鳥の声がさあ起きて

血圧も糖尿も邪魔美味そうだ

婆母娘アッシー旦那と温泉へ

黙々と食べて支払う父の役

東京都 井上 つよし

雑談にちりり本音をのぞかせる

何くわぬすました顔にピンとくる

隠し事してると顔に書いてある

カレンダー君と会う日に鍵カッコ

東京都 大竹 一良

話しては二言目には愚痴となり

美しく心遊ばす万華鏡

声からしメガホン叩く虎フアン

ほっとする水平線に夕陽落ち

東京都 高岡 弥生

参加者はいつも変わらぬクラス会

子育ては何が吉かはわからない

新しい駅ビルの中人に酔う

中学生大きな違い交通費

佐渡市 高野 不二

女房に感謝日記に書いてある

日記帳昨日と同じ事を書く

少子化だそうだ成程家もそう

あれで金貰う人氣が恐ろしい

静岡市 渡辺 芳子

芋づるのその生きざまをほめる日々

快復の遅さいらつく八十歳

感じます年の流れに勝てぬ事

認知の友その歌声のすばらしさ

熱海市 三谷圭角

お茶コーヒーお酒も断つて四十年

この時勢静かに過す幸せよ

寿司が好き少うし食べて満足し

オレオレが何時まで続くお人好し

京都市 清水英旺

こけ方が上手というのも処世術

はち切れそう南海トラフのエネルギー

面白いことおまへんかと聞き回る

男社会を睥睨してるピンヒール

長岡京市 日置みどり

著ころげ笑った頃に戻れない

許さないそんな私を許せない

悩む暇なんてないはず我が余白

ワンダフル鬱な私に呪文かけ

大阪府 小栢こずえ

野菜作り子育てしてる日々楽し

気くばりの座席ことさらに心地良い

何回も続きうっかり許されず

有難う言うて行くしかない言葉

大阪府 高木道子

あどけない天道虫の騙し癖

万緑の風に押されてバスが行く

山里の風を自在に鯉幟

スーパールの軒でつばめの宙返り

大阪府 西川冷子

若葉風胸いっぱい深呼吸

連休明け孫去りやつと身を休め

五月雨の代田競争耕運機

子沢山戦時の母は怖かった

大阪府 畑中節子

旅の宿解放感に浸る夜

紫外線人相変えるサングラス

太陽と肩を並べて種を蒔く

木の芽和え山椒の香り母偲び

大阪府 浅井公平

句を作る合間のビール美味しいね

ところと昼寝が出来る歳たのし

金に縁なくもそこそこ幸せだ

縁あって始めた作句生きがい

大阪府 魚住順子

ダイエット今日は食べるよ明日から

幸せは笑っていたらやって来た

事故多発ルール忘れてなぜ急ぐ

今日もまた頑張り過ぎず張りきらず

大阪府 内田志津子

声かけで仮設住宅もつ絆

アンテナもたまに息抜きさせてやる

春の風フツと芽生える恋心

断捨離を今年も出来ず衣替え

大阪市 梅里南天

黑板消したたけば聞こえてくる昭和
名人も初めは駄句で安心し
長命で糖尿病で酒好きで
のこされて伯母が続けるさがしもの

大阪市 太田としお

逃げ出した船長さんに妻や子も
はじめからないと思えば気が楽に
医者にはゆかぬもつと長生きしたいから
足腰が萎えてお金にしがみつく

大阪市 田中ゆみ子

冷静になれる他人のことならば
どんな風に返そうキャッチしたボール
ズル休みできぬ自分に腹が立つ
ジョーカーを引かぬ保証はないけれど

大阪市 寺本実

ダブダブの制服の列にぎやかに
ちよつとねでいつも始まる長電話
時々は冤罪もある鬼退治
割高な連休させて旅に出る

大阪市 栃尾奏子

サルビアのような真つ赤な恋敵
少女ではないので願ひなど書かぬ
風鈴も鳴らないんだね倦怠期
ただいまをみようが刻んで待ってます

大阪市 橋本典子

下り坂風のここちに身を任す
満面の笑みで母親待っていた
膝小僧頑張ったねと撫でてやり
野の花の優しく揺れる散歩道

大阪市 藤田武人

許せない私自身の黒い個所
一瞬の闇へ止まった腕時計
若い頃はいたズボンがはけた夢
許可もなく車庫の真上にツバメの巢

大阪市 堀田温子

お日様の真下歩ける子に育ち
太陽ががんがん照りのお葬式
失意の日だまってそばに居てくれる
優男愛の賛歌を口ずさむ

大阪市 前川善之

頑固者圧力釜で煮てみたい
また来たいきつと食べたい日本食
困った時心の絆見せてこそ
宗教の網の目潜る悪の道

大阪市 松田聰

物忘れ痴呆症にはまだ早い
あつさりと負ける阪神観たくない
頑張らずあきらめずわが道を行く
童謡の中に生きてるまどみちお

大阪市 吉田 知之

手近にと置いたけれども見当らぬ

普段よりおしやれして行くデイサービス

何も彼も横文字だらけ住み難い

デパートのトイレ綺麗で長居する

大阪市 若本 安代

百態のドラマ見ている椅子がある

葛桜小皿の中でゆれる恋

一步譲る心がその場和ませる

器量より優しい思い出来る子に

堺市 梅木 澄空

八重歯さえ眩しく見えた青春期

老木の裸木妙に眩しくて

店員のお国訛りに惹かれ買う

過去帳が我が家の百年語り出す

堺市 近藤 治子

疲れても寝ればすつきり治ります

強がるが根は小心で泣き虫で

ハイハイが来るぞ片付け大いそぎ

つまらない妬み心を流さねば

堺市 増田 わこう

老いた木に水は無駄だと福祉切る

薬にも毒にもなっている言葉

高齢化担ぎ手少ない夏祭

認知症予防に良薬575

堺市 山崎 早苗

記念日をひとつひとつと忘れゆく

冷蔵庫あけたら中に家の鍵

新財布ポイントカード入れになり

テレビではカルガモ親子平和な日

堺市 大和 峯二

逆境でかざすと見える人の恩

農民の利益守れと立つ案山子

前に出る勇気が古希を光らせる

秘密法時事吟さえも難解に

貝塚市 石田 ひろ子

お互いに酒量も減ったクラス会

リフォームの部屋にそぐわぬお仏壇

ミステリー解くように剥ぐ春キャベツ

信号が赤で一服ウォーキング

河内長野市 渡邊 修

金と暇掛けて悲願の遍路道

母の日の倍の返しをせがむ子等

STAPがあるかないのか論議消え

銭湯を温泉行くと言わす親

四条畷市 西川 ひろし

潮干狩り撒いた貝でも子ははしやぎ

駄菓子屋で子どもも払う消費税

連休のみやげ配って一休み

スーパーで蕨を買って独り煮る

高槻市 三谷白黒

お喋りを減らすと咳もとまるのに
野球でもランク上位はカタカナだ
カープ勝ち朝刊来るの待っている
おばちゃんは口を出しても手を貸さず

豊中市 源田啓生

生かされているらしいな今日も無事
信頼も本音言うたら直ぐ壊れ
手垢つく言葉ばかりが浮かぶ歳
美辞並べ生きる歯車滑り良く

寝屋川市 荒川鈍甲

春が行く後追いつてる花筏
恋人は和泉式部かやや多情
添うほかはない哀しみの傍に居る
透明になったら南風に乗るつもり

羽曳野市 磯本洋一

二時間のバスを待ちつつ囲碁の本
休肝日明日を夢見て早寝する
赤提灯言い訳通る俄雨
納税が出来た自分を褒めている

羽曳野市 安本美喜

連休を楽しく次は盆休み
七夕やおらの字きれいに書けるよう
かき氷八百円に並ぶ列
アルバイト笑顔をゼロにしないでね

枚方市 河田洋子

少子化で介護ロボットきつと来る
のんびりと時を気にせず旅したい
歳重ね掃除洗濯隔日に
しみじみと歳を感じる顔の皺

枚方市 坂本ミヨノ

良く笑う少女の瞳ピンク色
歌う踊る老人会で年長だ
日記忘れ昨日一日もう書けず
五月晴ばやき返して母笑顔

枚方市 松原保

右にカジ世の中不安日本丸
取説を無くすと家電ただのゴミ
マイゴルフバンカー狙うとバンカーへ
その策は格差を作るヤメてくれ

藤井寺市 田付絹枝

春なのに一円玉が騒ぎ出す
粉だらけ孫挑戦のパン作り
パン生地を捏ねて叩いて憂さも晴れ
パパママへ出来立てパンのメール便

箕面市 寺井柳童

すみれの花匂う乙女の一〇〇周年
鯉のぼり川面泳がせ村起し
生態系乱す深夜の猫の恋
復興へ槌音にぶくしめりがち

箕面市 村田恵子

けんかする夫が家にいてる幸
埋まらない穴が心に一つある
走れない悔しさかみしめ次のバス
への脇タンポポ一輪自己主張

八尾市 田邊浩三

お手玉になつてはならぬ正社員
ネタ切れでケーキを抱いて終電車
回つてゐる間が勝負観覧車
買うことは無いが見ているコマーシャル

神戸市 井上忠貞

熱戦を冷静に観る補欠の目
古希すぎて補聴器の友増えてきた
内緒よと言えば必ず筒抜けに
老いてなお胸の高まり止まらない

神戸市 奥水弘

鮮やかな朝焼け病から抜ける
ときめいた妻見て今はありがとう
医者^{いしや}の鈴告知の崖をやつと抜け
この道を曲がれば里の風が吹く

神戸市 徳留節^{ふし}

僕の影それとも影の僕どちらか
ちよつと嘘いれて酒席を盛りあげる
天国へ行けないほどのワルじやない
幸せはどつちか棺の内と外

神戸市 能勢利子

亡夫の声耳を澄ませば聞こえそう
若い頃時価におろおろした財布
夕暮れのブランコそつと乗つてみる
古希迎えこれから先の案を練る

尼崎市 中井楓花

ゆるキャラがはでな仕草で客を呼ぶ
味つけは亡母より学ぶさしすせそ
ねえあんた久方振りに呼んで見る
逆境もビールを飲んでうふふのふ

小野市 藤原泰宏

リフォームも歳を考え迷つてゐる
咳一つ誰だか分かる人の癖
ATM早く済ませと後ろの目
人間の心理を衝いた値段表

加西市 中川修

孫四人四等分のハゲをする
トーストの厚さが決めるモーニング
木彫も陶芸もダメ歌習う
夏野菜植える前から痴話ゲンカ

加東市 安達厚

七回忌七年振りの人に会う
この顔で生きて来ました八十路まで
散るときはかくあれと散る桜かな
老いるほど幸を感じる米寿かな

加東市 岩 本 美緒子

失敗を笑って過ごす老い元氣
八十路の友人入る施設に吾を重ね
もや心放すに手操り一筆画
絵筆には遊ぶ基地あり彩もある

三田市 足 立 つな子

シルバーは旗日をさけて旅に出る
ふり向けばお氣をつけてと長命寺
人力車ヒロイン氣分着物着て
娘がくれた靴がびったり春色で

加東市 黒 崎 美紗子

デイスービス時間たつのが早いこと
同じ歳話も合って皆笑顔

三田市 今 西 廣 子

草とりの伸びる早さへ氣もあせる
ころぶまいゆつくりでよい年なりに

代返を為合う仲良し巢立ち征く
ペアルック老いには眩し共白髪
無理に無理重ねた末の若づくり
かまきりのおのでひとふり反戦歌

川西市 日野岡 和 之

女房に靴を磨けと倍返し
貧富の差知らぬ野良猫威張ってる
すぐ理屈夫も私も割り切れん
カステラと論吉厚みで癒される

三田市 木 村 マユミ

優しい嘘をようやく言える人になる
写真では実物よりも美人です
突然の計報言葉が出てこない
生きていることはつらいね齒の痛み

篠山市 石 田 久 子

年金ぐらし百均あたりがいいところ
辻褄の合わぬ夢には疲れます
私にもそわそわしたい日もあるの
後期には後期の薬待っている

篠山市 佐々木 勇

お遍路に行けない人のお砂踏み
牽引はしてるが背中丸いまま
遊ぶ子等居ないがコイは泳いでる
サスペンス後に出て来る新事実

三田市 辻 開 子

睡眠の不足介護の邪魔をする
色あせも続いた日記で覗く過去
眉をかく今日の心が素直に出
甘えん坊七十過ぎてても甘えん坊

三田市 多 田 雅 尚

三田市 野口 晶子

盛り塩で願掛けします浮気止め
捕まった車横目で徐行する
大丈夫捕まっついて僕がいる
諦めない飛び出す今が好きだから

宝塚市 井上 風花

年取れば悩みなくても不眠症
鴛鴦も時に一羽で泳いでる
退職後趣味の世界で身を起こす
手も触れずまなざしのみの恋もある

宝塚市 丸山 孔一

迂回して私の心工事中
何思う終活ノート急かす妻
クレーンで二階に入れる冷蔵庫
ホーホケキヨ若葉の香り山の風

三木市 山口 久子

横着にひるまでねては食べている
日本晴わが家の庭は花盛り
糸通す針の穴にも見はなされ
雨風に折角咲いた牡丹ちり

奈良県 安福 和夫

呑んだくれ体が酒で液状化
TPPタフな相手と闘ぎ合い
あと一人コールで投手金縛り
情熱が過ぎたか何か欠けている

奈良県 谷川 憲

五百羅漢自分の顔に出会えそう
国賓をおもてなしする寿司文化
ばあちゃんのヒントが五味を引き立てる
手差しまでして掛けた鍵出てこない

奈良市 前田 弘恵

一泊の旅で五日も疲れ出す
旅先の思い出を買うストラップ
古傷が疼き出したら空仰ぐ
税上がり鹿せんべいも小さくなり

和歌山市 平田 元三

ハイ二つ聞いているのかいないのか
少子化を嘲笑う如草生える
年波の御蔭騒音耳知らず
木陰選り遠回りする昼の道

和歌山市 福呂 秀子

取って置く新券最後出てしまい
お互いの言葉で保つ恙無さ
賞味期限ついつい過ぎて懺悔する
バイキング老いの体にきつい欲

岩出市 村中 悦男

ハンマーもすねると釘を曲げて行く
笑顔よくどこに折目があるのやら
朝が来た夜の妄想断ち切って
楽しかった事だけにする長い過去

鳥取県 飯野 菖子

針の山歩いて強く生きてきた
春の空眺めて草も背を伸ばす
立派なこと出来ないままに逝きそうだ
甘い話裏を見分ける術もない

鳥取県 岡村 孝明

傘寿すぎ歯は健康だ親に謝す
師の絵筆動きうっとり見とれてる
凡庸も雑魚に混じれば人目引き
綿棒の掃除済ませて笑顔する

鳥取県 田口 清帆

酌み交わすちよこに本音を覗かせる
こっそりと灯した想い吹いて消す
あすは咲く信じて今日もこの笑顔
いやな事総て忘れて花作り

鳥取市 高原 かおる

心労に輪切りレモンが出てくれる
限らない未来につなぐ橋を架け
耐えて来た足に証の座りだこ
立て板にぶつけた愚痴も老いてくる

鳥取市 谷口 回春子

いいのよの言葉に甘え墓穴掘り
面倒な話はいつも先送り
うっかりと過ごした日々が恨めしい
マンネリと言ったひとことやぶ蛇だ

鳥取市 山下 凱柳

気が合うと信じ一緒になったのに
孫達よ大化けせよと送り出す
冗談も笑いも消えた老い二人
跡継ぎがでまず先祖に詫び墓参

倉吉市 岡崎 美知江

佇たてて心の中をガードする
川柳も碁もそここのもののばかり
独り身の長い電話が生きる糧
連なっている屋根の下みな空家

倉吉市 鈴木 たけ代

七転び弱気を捨てて立ち上がる
唇が微笑む亡母の筑前煮
桜咲きはしゃぎたくなる新人生
あせらずにチャンスは我慢とタイミング

倉吉市 田中 紀美恵

赤んぼのぶよぶよ頬っぺ食べたいな
あれこれと言いつけて妻遊び出る
ばっさりと友の心を切ったまま
目鼻立ちくつきり美人は私かな

倉吉市 中村 毅

悩みごとひとつ消えてはまたひとつ
成るようにしか成りません我が暮らし
ストレスの解消法か妻の愚痴
五月晴れもつたいないと陽を浴びる

境港市 中井虎尾

おもてなし妻の作法は裏千家

ああ合区鳥取消える参議員

無口だと言っていたけどよく食べる

その昔ハンドルだこの指だった

米子市 生田和之

この巨体見たかと今日もいけずされ

花冷えの夜風に逢って風邪を引き

春雨が止んだ竹藪のぞき込む

よちよちとお足歩いて逃げて行く

米子市 小野鶴子

語り部のソフトな声に惹き込まれ

ママきれいソフトタッチの豆画伯

今日の事起きてゆっくり考える

年ごとに輝く君に拍手する

米子市 加藤正二

年拾い体あちこち自己主張

年の功あの手この手で知恵しぼる

独り者ゴミ出さなくてカラス鳴く

消費税一口減らし対抗する

米子市 田村周子

たつぷりの時間もらってもて余し

さくら咲き相棒いない散歩みち

五月晴れ心の穴を風が吹く

川柳の友のおかげで癒される

米子市 永井三津子

車間距離とった途端に割り込まれ

文明の早さに脳が悲鳴あげ

健康の重さどつしり老いに染む

平穏を願って母のからだ拭く

米子市 見山温子

消費税暮しのゆとり消している

戦中派葱の根庭の角に植え

へらず口孫が成長見せつける

洋服がメタボに負ける冬の悔い

松江市 相見柳歩

太陽のように輝く石になる

天国のキッスあなたといつまでも

ラヴレター君のこころをどよめかす

抱きしめる耳の裏からささやいて

出雲市 黒目英男

夢を追いつ夢に生かされ平和説く

ひとり旅年重ねても川柳がある

変化球たまには投げてみたくなり

愛燦々生かされ生きて七十年

雲南市 松本昌

人生にぶれあり指針のないままに

売出しの旗を横目に百均へ

生き様の評価初盆終えてから

力なき人生それもまた楽し

安来市 原 煩惱児

後期高齢医者が舌巻く心臓で
ほろほろの身体で意欲尚盛ん
日日夢を追いつけてる独居老
老いの意気運転免許更新へ

岡山市 丹下 凱夫

未来図に描かれていないさくら道
自己弁護できずに桜散っている
パントマイム続けています桜散る
深呼吸青い信濃を吸うている

岡山市 前田 恵美子

マスク取り世間話に花が咲く
母さんの元氣家族を照らしてる
鍵開けて心の奥に風通す
守れない約束なんて飛んでいけ

倉敷市 安東 モモ

カーネーション自分用にと買いました
母の日もいつものように暮れて行く
スマホで見る君はどんな大きくなり
中身より高い小包送ります

玉野市 片岡 富子

立ち暗み少し女の弱さ出る
日常に減り張り効かす句読点
腹減るとケンカの種が目立ち出す
勘が良いナビより喋る妻が居る

竹原市 六田 半徳

姿よくシヤクナゲ見事咲いてくれ
梅雨入りを未央柳と待っている
空豆を二鉢植えて初夏の夢
今年こそ八朔蓄ちゃんと付け

山口市 増田 めだか

帶きりり銀座の蝶は人恋し
夫婦喧嘩茶碗が一つずつ割れる
長旅にやれやれですと妻本音
目的が出来ると足が弾みだす

今治市 渡邊 伊津志

年輪は笑顔に似たり敬老日
止むを得ず貰い欲ばりだと呼ばれ
プライドが邪魔で譲れぬ妥協案
ガガンボは脚が外れてから本気

高知市 三谷 待太郎

構わんよボロの帽子で街を行く
釣りバカがトドのつまりの成れの果
お元氣そうお久し振りね喪主不在
啓蟄を忘れていたか青大将

福岡県 本田 さくら

三家族孫とジジババはしゃぐ旅
うぐいすを旅の宿にて聴く窓辺
ガンなどに負けぬ男の心意氣
花匂い鳥がさえずる今が好き

北九州市 小松紀子

まアいいか誰に似たのか大雑把
心の栄養不足かひがみぐせ

バイキング隣の人が押してくる
腰と膝痛いいたいがまたふえた

佐賀県 門井 孝

久々のデートの先はホスピタル
靴の中住みかにしてる虫もいる
春うらら心も晴れる蝶の舞
メモ紙を頼りにしてます七〇路

唐津市 岩崎 實

声を出せカラオケ一番与えられ
すり大根焼きにんにくが添えてあり
いさぎよく散りし桜はわが脳裡
二円切手貼る枚数を確かめる

唐津市 北村松風

花実咲く苦勞苦勞の積重ね
臥せる母知らせてならぬ計の知らせ
核心を衝いたか泳ぐ目を閉じる
政界を抜手で泳ぐ二枚舌

唐津市 吉富節子

予定表書いてばんやり過ぐす日々
腹いせにいった言葉が跳ね返る
糸切り歯糸は切れずに歯が折れる
長生きし子に感謝状書いておく

熊本市 杉野羅天

花好きが八重や一重で競い合い
マスクばかり美人なのが気にかかる
粹だけはお金で買える物じゃなし
「ドクトル」と呼ばれる人のいた昭和

山鹿市 前田幸子

明日へ明日へ今日も一日背を伸ばす
気がつけばわたしも仲間認知症
貧しさを笑顔で返す利口者
取立ての無農薬です朝の膳

(前月分) 佐賀県 門井 孝

運勢で今日の一日決めてます
鬼は外なくてはこまる鬼もいる
追いつけぬ母の背中と煮物味
夢つめて小さな背なにランドセル
当選の美酒に忘れず公約を

愛知県 樺嶺 志

副作用味覚失い苦悩する
副作用ランク一位は味覚麻痺
医者怖い決断せよと囁い言う
囁え来る医者の言葉の軽きこと

川西市 日野岡和之

明日があることを信じて克己心
成長の証し孫にも反抗期
渋滞も今日は許せる桜道
不器用を神の恵みに替えて生き

第143回 大阪川柳の会

やるからにや一度は欲しいトツプの座
 寝屋川市 鈴木 楽 鬼
 ひたむきに生きた男の太い道
 輝いているが陰では磨く石
 原石の輝くまでの長い道
 鳥取市 近 藤 秋 星
 お花見もしたし逝く春悔いはなし
 春なのに冬の衣裳がまだ脱げぬ
 新天地は君の新たなスタートだ
 銭に僕の涙を贈ろうか
 大阪市 宇 都 満知子
 話し声笑顔が見える電話口
 花散らす風が口笛吹きながら
 一年生背中すっぱりランドセル
 民意を離れ原発回帰許せない

日 時 8月5日(火) 午後1時開場・2時締切
 会 場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル五階
 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室

宿題と選者(各題2句・席題なし)

△「朝」矢沢 和女 △「泳ぐ」大西 泰世

△「調味料」桑原 道夫 △「並ぶ」住田英比古

会 費 1000円

欠席投句(切手82円5枚同封) 8月4日まで(会員に限る)

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

本田 智彦 宛



「プール」

楽しいな春でもプール入りたい
 (四年 長谷川平蔵)
 夏がきたプール始まるうれしいな
 (四年 徳田 成)
 プールでも服を着たまま入ってよし
 (四年 中浜 遥翔)
 夏がきたプールはじまるうれしいな
 (四年 田中 萌誠)
 気持ちいいプール入って遊ぶんだ
 (五年 遠藤 彩華)
 夏休みプールに入る気持ちいい
 (五年 中濱 瑞樹)
 プールから飛び込みすると気持ちいい
 (五年 谷口風美子)
 水着を着てプールにはいると気持ちいい
 (五年 川内 暖香)
 夏休みずっとプールに入ってる
 (五年 山根 有貴)
 海よりもプールの方が安全だ
 (六年 新 博喜)
 夏になりプールに入り足つった
 (六年 熊野 湧斗)
 夏休みプール行ったら人いない
 (六年 磯邊 涼太)
 着衣泳プールで服がへばりつく
 (六年 小川 直純)



新川柳鑑賞

(29)

麻生 路郎

塗下駄の感觸女だけが知り

(千代美)

一寸面白いネライの句である。女性に限られた塗下駄の微妙な感觸をとらえてうまく句にまとめている。しかし、その感觸は男性にとつても、絶体に味えない感觸ではないと思うが……。

売春禁止

足洗いし女に履くものをやらす

(挽 郎)

世相のきびしさを皮肉った句である。売春を禁止するの法律は作ったが、それらの女性を救うためのうけいれ体制のないことはなかなかいいことである。

宿命が男のクズを養う身

(谷 水)

失業をよいことにして、競馬や競輪を追いかける。それがなければ、麻雀バチンコへ入りびたりである。それでも連れ添う夫には違いない。ジツと手をつかねていれば人間の乾物が出来るので、飲み屋の女で僅かな金をつ

かんで来るが、暮しは決して楽ではない。それを宿命として甘受しているのも妻なればこそであろう。斯う云った環境の女を詠んだのがこの句である。

振返りはせぬかと女まだ立つて

(薫風子)

愛すると云うことはふしぎな情熱が湧くものである。さよなら、さよならを何べんかして、手まで振つて別れたのに、まだ女はそこへ立っているのである。もしか振り返りはせぬかという気がそうさせるのである。女ごころを端的に描いた句である。

かき眉毛みみずくという顔になり

(葉)

かき眉毛というものは下手にやるとまことに滑稽なものである。それがあこがれの映画女優のかき眉毛などを真似たりすると一層滑稽なものである。「みみずくという顔」になったとは思わず、本人は案外平気でいらつしやる。女つてものはとツイいらぬことのひとつも云いたくなる。

螢光燈のせいにしておく唇の色

(梨花)

「どっか悪るいの?」
「い、え、別に」
「でも唇の色が変だわ」
「螢光燈のせいですよ」

と、すべてを打ち明けようとはしなかったのである。女性心理にメスをあてた句。

この人もやはりケモノの一人なる

(一 善)

女から見ての話なのである。この人ばかりはそんなことはないと思つていたのに、二人だけになった時に、その瞳には女のあるものを要求していたのであると云うのである。男の心理を巧くつかんだ句だ。

泣いても女蜜柑を口に入れ

(俊 江)

世に女の涙ぐらい不可解なものはない。この句のように、女は泣いていても、みかんを口に入れるという余裕?を持っている。泣くということが必ずしも悲しいから泣いているとばかりは云えないように、みかんを口に入れるという動作も喰べたいから喰べようとしているのでなく、一つの習性から来ているように思われる。こうした女性の習性をうまくとらえたのがこの句である。

撫肩は淋し解けてく氷に似

(湧 三)

ジツと眺めていると撫肩は淋びしい。それが次第に解けてゆく氷のようだと云うのである。冷徹な特異な比喻に作者の感覚の鋭さを見る事が出来る。斯うした句は黙って静かに味より術がない。

刻下の路郎

高 鶴 礼 子

麻生路郎門外の私が路郎の興した誌に寄稿させていただくにあたって、路郎と時代をともにした川柳人たちの記述を再踏査することにより、その残滓を——ちいさなひとしずくでもないから——新たに探れないだろうかと思ひ立ったのには理由がある。それは、二〇一〇年に刊行された『麻生路郎読本』（川柳塔社。以下『読本』と略す）編集後記に見つけた「本書は今後の麻生路郎研究の基礎資料となるようなものになりたいと心がけた」という栗原道夫氏の言葉に、しんと打たれたからである。

対象としたのは「氷原」「番傘」「もめん」「川柳人」「蒼空」「三味線草」「古川柳」「手」「若舂」等々、架蔵させていただいている柳誌中、アジア・太平洋戦争終結期頃までの数百冊余りである。ただし、『読本』制作の意図に鑑み、「川柳雑誌」所収の資料についてはご了解済みであろうと考え、今回の探索対象には含めなかった。

結論から言えば、柳界消息のような欄にある細かなものまで含めると、路郎ならびに「川柳雑誌」に関する記

述は幾つも見出すことができた。ここではその中から、路郎像を探る便となりそうなものを幾つかご紹介しようと思う。まずは昭和四年一月一日刊の「氷原」36号が浮かび上がらせる路郎のかたちである。そこでは田中五呂八が「昭和三年の柳界——主として論壇を顧る」と題して、当時の「川柳雑誌」を次のように評している。（引用文中の表記については、仮名遣いはそのままとし、漢字の字体のみ、新字体に改めた。旧仮名遣いの表記にゆれが見られる場合は原典通りとさせていただいている。以下同様）。

柳壇革新の為三十年計画で進む代表誌の一つに、大阪の『川柳雑誌』がある。それが過年度をどんな風に働いたか。元来『川柳雑誌』は発刊の当初より斬新主義の立場を執つて来た。その主張は決して既成川柳的なものでなく、麻生路郎氏の過去の業績から見ても、むしろ熾烈な川柳革新論者である。然し、その運動は、社会的漫漶といふ元氣のよい宣言の割合に実質的な進歩を見せてゐない。なるほど鼻紙式な川柳誌の多い柳壇において、あれだけの雑誌に仕上げた事業家の苦心、社会の中心に割り込んで行った努力は多しなればならないが、それにしても、過去に振出した手形の清算はまだついてゐない筈だ

し、稍ともすれば既成的情実の前に盲目たらんとする弱い意志はどうしたものか。(以下略)

前半部の評価に対して後半は舌鋒鋭き批判となっている。が、これは、路郎の企図を評価しつつも、その実現に際して「停滞である」と五呂八が感じるものを——それは同時に、路郎が直面していたであろう困難の種類を示すもののように私には思えるが——彼独自の批判の刃に突き刺し掲げて指摘し、路郎に、よりいっそうの奮起を促しているようにも読める。

同年六月一日刊の「氷原」41号「氷原漫語」(無署名欄ではあるが、執筆者はおそらく五呂八であろう)が路郎のことを「われ等は麻生路郎を新興派の同志と見る」と書いた(但し、その後は先述した論旨と同様の記述が続く、同44号(同年九月一日)に同人・八橋榮星が福田三雨楼の一文「川柳と興味」を取り上げ、「かゝる透徹した批評家を存する路郎氏は幸福だが(以下、「雑誌政策」に翻弄され得る危険性についての危惧が語られる)」と書いたりしているのを見るにつけ、右の印象は強くなるのだが、この、五呂八らをして、同志なれどその行動には不満が残ると感じさせてしまう事態はいったどこからくるのかと考えてみた時に、種々の誌を採った後の私には、そこに路郎の情に深き性的な部分が関与していたのではないかと思え

てならない。それは、たとえば、木村半文銭が残した次のような文章からも窺うことができる(木村半文銭「日車氏と路郎氏と私」『氷原』50〜53号昭和五年三月〜六月)。

路郎氏は某書店を廃業して、私と同じ土地へ引き移った。(略)路郎氏は、慌しい古本屋の営みより、すつかり生き返った生活にのんびりとしてゐた。そして、彼の手で漫画雑誌を編集するについて、私も其の一員に加へられた。その頃の私は、今もどん底をついた生活だが、その頃の方が、何倍か酷かった。永い間の徒食と、大きな商人の暴威と、一生のぞみである会社が、破綻の数歩前に立つてゐたのとで、直接に間接に私のくらしは深刻の頂上に立つてゐた。漫画編集の一員として、なにがしかの謝料を、路郎氏から分配された時、ほんとうに有難味を感じた。私のやうな、無学のものが、その文字から金を生むといふことは、全く予想もせなかつたからでもある。

『読本』所載の「年譜」によれば、路郎が古本売買を営んだ葵屋を廃業し、大阪市外萩の茶屋三日路に転居したのは大正八年であり、岸本水府や半文銭も近所に住んでいたことが記されている。半文銭がその編集に携わり、謝料を手になつた書籍というのは、よつて、

大正九年十月に奎文堂から出された方の『川柳漫画懷手』である。おそらくは、こうした川柳と漫画をコラボさせるという社会へ向けての発信の手法が五呂八らにとつて路郎の所業が許し難い世俗への迎合と映る要因であつたのではないかと思われる。『水原』43号の『水原漫語』で、漫語子が「(前略)路郎も一度は、揚柳などで古川柳無価値論を唱え、先輩無用論に讃したほどの快漢だ。それが何ぞ俗受けの古川柳漫画書で川柳価値を下落せしめ……(略)」と、該書に続く路郎の一連の書籍の志向を挙げて、怒りをぶつけていることからそれが窺えよう。

しかし、「川柳価値を下落せしめ」と、五呂八主宰誌を憤慨させた行為のもう一方の側面として、私は、先に引いた半文銭の赤裸々な吐露が証する一つの事実注目しないではられない。路郎の該書編集・上梓という作業は、どん底の底また底にいた半文銭に、今日を生きのびるためのパンの一切れを供することによって、半文銭を——彼の生存、引いては彼の川柳を——支えることを確と果しているではないか、と。

批判を言うはたやすい。が、大勢を乗せてともに未踏の地へと漕ぎ出そうとするのであれば、ともに歩む人を支えることを抜きにしては何もはじまらない。半文銭の窮状を見、もちろん半文銭の力量を買つてのことではあるにしても、彼に一端を担ってもらうことによって彼が

正当な取り分を得られるようにする。その行為に、路郎が生来的にもつ『難儀なやさしさ』(やさしいことは難儀なことである、と私は思う)をみるのは私だけだろうか。

一般の探索を通して、私が印象的に受け止めた路郎の像はもう一つある。それは、幾つかの挿話に通底する『誠実であるがゆえの不器用さ』ということである。

たとえば、先の半文銭の稿には、瀕死の娘を必死の思いで看る半文銭の元に川上日車が路郎らを連れて、夜の街に繰り出そうと誘いに現われる場面が描かれている。娘のことを伝え、断る半文銭に、日車は「どうせ死ぬものなら仕方あるまいに」という、聴き方によっては何とも非道に聞こえる言葉を残して去ってゆく。自分が家にも非道に聞こえる言葉であるとわかつてはいても、半文銭は平静ではられない。それはそうであろう。子が死ぬかもしれないという非常の事態にいる者のところへ、飲みに行こうなどという呑気な誘いを携えた人たちがどやどやとやってきては、暴言と見紛うばかりの言葉を残して去ってゆく。怒らない方がどうかしている。

「女の子は夜明方に冷たくなつて了つた」。「かたばかりの葬ひ」を終えたその夕方、「路郎氏が悔みに来た」。

路郎の弔問を受けて、しかし、釈然としない思いが半

文銭の心には残る。路郎のその好意は「たゞ好意として受けてゐても、鋭い反抗心は燃えさかつてゐた」「なぜ私は路郎氏にまで好意がもてなかつたかは理由の発見に苦しむ」と半文銭は綴る。

路郎はもちろん、純然たる弔いの気持ちから半文銭宅を訪ねたわけである。前夜のこともあるので、訪ね難い思いを秘めての弔問であつたことは想像に難くない。

弔問を、と思ひ立つた路郎に、非のあらうはずはない。そのことは半文銭も認めている。けれど、子を亡くしたばかりの半文銭の前に姿を現わすことによつて、前夜の愚行の全責任を指弾される標的としての位置に路郎は自身を晒してしまふ。日車のことは何も書かれていないので、おそらくこの時の弔問には彼の姿はなかつたのであろう。本来であれば日車が受けるべき非難の鋒先を、ここでは路郎が、ひとり、享けた形となつたわけである。

こうしたある種の、誠実であるがゆえの不器用さ——運命が彼に与えた間の悪さを世渡り上手な人のようにやりすごすことができず、さりとて自身の誠実に叛くこともできず、その帰結を予感しながらも、間の悪さを間の悪いままに突ききつてしまふというような——が、路郎にはあつたのではないかと私には想えてならない。

路郎と「轍」等で行をともした浅井五葉の死に際して、「番傘」は昭和七年七月十六日にその追悼句会を催し、同年九月一日発行の同誌第二十一巻九号をその追悼号としてゐる。「五葉の面影」と題して巻頭に載せられた水府による追悼文の最後には「五葉君がある」と付された大正四年八月箕面吟行時の写真が掲げられており、そこに、五葉とともに写る若き日の路郎の姿がある。

「霊前に襟を正した六十三名、かはるがはるに焼香を済ます」と記された五葉の追悼句会は、水府選の兼題を故人の風貌にちなんで「沈黙」とし、席題は三題に絞り、他の時間は五葉のことを語る講演に充てられたようだ。演者は水府以下の九名。路郎もその一人であり、「五葉君の片鱗」という題で話をしてゐる（内容については同号不掲載のため不明）。席題選者には西田富百、本田溪花坊の名とともに路郎の名が見える。路郎に与えられた題は「詩人」で、路郎は紋太、鳥語ら四人の句を抜いている。同号にはまた、「五葉を語る」と題した追悼特集が組まれ、路郎の寄稿もそこにある。追悼句会に寄せた路郎の弔吟とともに、その一部を紹介したい。

「一本杉の五葉」

麻生 路郎

五葉君が死んだ。

永い間柳壇のために働いてくれた五葉君が死んだ。私は暗然として彼の死を見送る一人となつた。(中略)

葉湯のすみにひとりの君なりし

路郎

五葉君と僕が始めて会つたのは明治三十九年の夏、平野町の五二館楼上で開催された川柳大会で隣合つて坐つた時であると記憶する。

その時五葉君は了軒と号し、僕は天涯と号してゐた。最後に通信を貰つたのは本年の五月四日の夜、朝日会館で川柳雑誌社が「川柳の夕」を開催した時招待状を送つたのに対する礼状であつた。

この時にはもう悪かつたらしいが、例によつて微恙に過ぎないであらうと思ひ、自分の忙しさにかまけて見舞状も出さなかつた。死ぬほどの病氣だつたら一度見舞に行くのだつたのに……。

告別式がすんでからみんなに知らせよと家人に伝えて、永眠した五葉君の態度はまんざらうなづけぬこともない。

五葉君の計を聞いて私を訪ねて来た半文銭君に、そのことを談したら「矢張り五葉や」と云つたがそれにしては淋しい男であつた。(以下略)

路郎による弔吟は右の追悼文とともに読むと、その味わいがいつそう胸に迫る。路郎のもつ「難儀なやさしさ」は、五葉という男の独行に纏わるえもいわれぬさびしさを路郎に感受させずにはおかなかつたのである。

河野春三はその著書『現代川柳の理解』(昭和三十七年八月天馬発行所)において、路郎が「土團子」創刊に際し、かの「青い玉」「赤い玉」の修辭で綴つた一文に加えて「この雑誌へ集つてくる人達は、浴衣がけや印絆天でよろしい」と後記に書いていたことや、「揚柳」に次のような言葉を寄せていたことを紹介している。「柳樽を読むことを忘れてはいけない。眼で読むことを避けよ。心で読め、心で読んだら直ぐに捨て、了へ」。

この二つの指摘はその後の路郎の動向を思えば、大変に興味深い。春三はそのあたりのことを「彼が日車や半文銭らとの尖鋭な作家精神による雑誌を捨てて、番傘や大大阪のような既成川柳でもない、いわば中間的な態度に於て伝統と革新を共に抱擁するような方針のもとに彼のいう社会進出を企てた事は、彼自身にとつては一つの必然であつたかもしれない」と総括している。対置する二側面に心を配ることを「中間的な態度」と呼んでよいかどうかについては措くとしても、なるほど路郎の唱えた「川柳革新」は、伝統的なものはすべて廃すべしといった意味合いでは決してないのだということが先の路郎の文言からは解せよう。「揚柳」での言葉など、私には路郎が次のように言っているように思えてならない。伝統への盲従は否定する、しかし、自分たちが格闘している

ものが、どのような根の上に築き上げられてきたものであるかについて無知・無関心のままでいることは異なるとだ、盲従はするな、だが心は承けて、育てよ、と。

五呂八らが批判的とした路郎による「川柳の社会化」は、この文脈の上に置いて考えられなければならないことであるような気が私にはする。

社会化という課題は大衆化という事柄と表裏一体を成す。そしてこの「大衆化」は「深化」ということとともに、「革新」を実現するための不可欠な要素となる。しかもそれは常に相反する二点を私たちに突きつける。本質か非本質かのどちらに拠るかを問われれば、人は誰でも、より本質的なものを自身の志の発露の拠り所として選ぶうとするものであろう。量対質の二者択一は質を優先させる答えを容易に導き出し得る。が、量が力となるという側面が、何かを成し遂げようとする試みの前には厳として存在することもまた事実なのだ。「川柳雑誌」創刊号において、路郎は評論にまで皆振り仮名をつけたという（春三 前掲書）。そうした行為から窺える路郎の思いを、迎合という名の下に拘子定規に断罪してよいものであろうか。結果として何を果しえたか、不覚にも何を遂げてしまうこととなったかという議論は企図についての議論とは別のところで行うべきであると私は考える。

最後に、ともに歩む人々のために、と、路郎が踏ん張

り抜いたのではないかと思える事例を一つご紹介させていただいて筆を置くこととしよう。

戦争の長期化に伴い、表現活動が大きな制約を受け、「川柳雑誌」も昭和十八年十二月号を以て雑誌奉還となったことは既に知られている。が、今般の探索でそれには前段としての抵抗史があったということに気づき、驚いた。「天守閣」誌らとの五誌統合を社告として掲げた「番傘」第三十巻七号（昭和十六年七月一日）はそのあたりの事情を次のように伝える。「二月十四日、川柳雑誌、鶴はし、赤煉瓦、昭和川柳、天守閣、番傘（川柳春秋欠席）の七誌代表は御津八幡に集合、今後の事につき討議する。翌十五日、各社当局（府特高課）に集る。当局の一誌説に対し、二誌存立を願ひ出て当局の指示をまつ。（略）五月七日、再び当局の呼出は川柳雑誌、番傘の二誌を承認、結局今回の結果をみる」と（傍線筆者）。

「川柳雑誌」存続を懸けて、路郎は、きつと踏ん張ったのである。そしてその思いを——それが「当局」の意向には反することであったにもかかわらず——、御津八幡に集った各社代表たちは支持したのであった。（了）

【高鶴礼子】川柳誌ノエマ・ノエシス主宰。全日本川柳協会常任幹事。日本詩人クラブ会員。埼玉大学大学院博士後期課程。近現代川柳論。

誹風柳多留一二篇研究 13

小栗 清 吾・細井 龍夫

伊吹 和男・山田 昭夫

石川 道子

清 博美

94 毛のじょくはいやとくれ人の前でいひ

小栗 じょじょは、草履の幼児語（「日」）。

子供が「毛のじょじょは厭だ」と、それを呉れた人の前で言った。子供は無邪気だが、親は赤面で大あわてという場面であらうか。表に毛皮を張った履き物はあつたようだから（毛雪駄）、子供がその類の物を貰つてもおかしくはないが、何か唐突な感じがする。無邪気な子供の言動で親が赤面するという日常よく見る場面を詠むのに、わざわざ「毛のじょじょ」である必要性は全くない。そういう意味でよくわからぬ句であるが、外の解釈も思ひ付かぬので、前述の解としておく。女陰を意味する毛雪駄で考えてみたが、辻褄が合いません。

細井 子供の好みで毛雪駄は嫌だと言つたのだが、母親はそれが女陰の別称であることを知っているので、ハラ／＼している。

山田 諸兄考え過ぎなるべし。単に足がチクチクするので、いやがつていただけでしょう。清 小生も山田説のように単純に考えていた。

95 めんつうといゑ八牛かたいきどほり

小栗 面桶は、一人前ずつ飯を盛って配る曲げ物。後には乞食の持つもの。牛方は、牛を使つて荷物を運ぶのを仕事にしている人（「日」）。

牛方に「面桶」と言つたら牛方が怒つたということだが、何が面白いかよくわからない。

牛方の持ち物たとえば弁当箱の類が面桶によく似ているので、「面桶を持つている」と言つたら「乞食の持ち物と同じと言うのか」と怒つたという設定は一応辻褄が合う。しかしこの解は、牛方に限つて面桶に酷似したものを持つていふことが常識でないと思ひ立たない。管見の限り不詳であるが、川柳でおなじみの馬方でもなく車引きでもなく、牛方のみがそういう特徴ある物を持つていたとは考えにくい。

あるいは、「面桶」は持ち物ではなく、牛方自身を「乞食」と罵つたとも考えられるが、相手が牛方である必然性がよく分らない。牛方に限らず誰でも「乞食」と言われれば怒るのは当然である。牛方に何か非人に通ずる要素があつたのだらうか。

清 不明。いします。

96 おやぶんとつれ立て行初の山

小栗 「初の山」の語句は、主題句の外には川柳の中に見当たらぬが、「初めて行く山」のことだらう。山の名前は特定されていないが、類句から見て「大山」と決めていいと思ひます。

う。初体験なので、親分と言われる人と一緒に行くのである。参考までに親分と大山の句をいくつか。

おやふんのうやまつて持ッ納メ太刀

明五天²

おや分の内義不動に待つて居る

一〇²⁴

親分シの四ツ手にのるハ山かあり

安元義⁷

伊吹

賛。初の山は初山と同じだと思ひます。

清 賛。はつ山を大念仏て引キあける

明七天²

97 舟子共やいとよろける柳はし

小栗 「舟子」は、船方・船乗りと同じく舟の乗組員のことだが、ここでは猪牙の船頭をいうのであろう。柳橋の船宿から猪牙を仕立てて吉原へ向かおうとする客が、「舟子共やい」などと声を掛けながら、よるけて猪牙に乗り込む光景。船頭のことを「舟子共」などと言うのは、謡曲『船弁慶』の「船子ども。はや縄をとくく」との洒落に違いないから、この御仁船宿でかなりメートルが上がついて、そのために足元もおぼつかなく、よろけるのであろう。

君ハ船臣ハ帰れとやなぎばし

四三²

——「養老」

柳はし如渡得船とのつて出る

拾七¹⁵

——「兼平」

清 賛。謡曲『船弁慶』を思い浮かべてはじめて面白さがわかる句。

98 小人シかんきよしてやたらふせたがり

小栗 「小人閑居して不善を為す。至らざる所なし。」「(天学) 伝六」のパロディ。

小人(徳のない品性の卑しい人)が何もうることがないと、ロクな事は考えない。やたらに博打をやりたいがるといふことになるのである。

小人閑居してやたらおやしてる

五六²³

小人閑居して何かしら喰たがり

八二¹⁰

清 賛。

99 かづさ戸をひつしやり立て五十とり

小栗 上総戸は、粗末な出来合いの雨戸。上総地方で作られたところからいう「日」。五十歳は、一切り五十文の私娼。本郷の大根島、芝の三田、下谷の谷中など諸所にあつた。吉原の百歳の対(「江」)。

五十歳の営業場である切見世は長屋になつ

ていて、客のない時は土間の戸を開いておき、客が付くと入口の戸を閉め切った。主題句はこのことを詠んだもの。

五十そう引キつり込んでかぎをかけ

明七松⁴

清 賛。

100 おも入レをわらつてぞうに「せん出シ

細井 「思入」オモイレ。思う存分。思い切り(「日国」)。

三河万歳は檀家帳を持っていて、毎年、決まった日に決まった家に廻勤した。家によつては、万歳の舞いで思いつきり大笑いをして後で、大夫と才藏に雑煮を出したり、屠蘇酒を振舞つたりしたようである。

三河からきつ、馴にし門トへ来る

二四¹¹乙

どつと笑ツて雑煮二膳出し

二六¹⁶

小栗 辞書で「思入レ」を引くと「思う存分。思い切り」の意になるのは副詞。副詞に「を」がつくのは落ち着かぬが、例句を見ると、そういう用例があつたようである。

おもいれを寐たと桜をふつふるひ

一〇²⁰

清 賛。

英語 de Senryu ③①

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

農村の時計は 重く重く 鳴り

*farm village---
wall clock rings
with heavy sounds*

恋という字を老人凝視する

*the old man is gazing at
the letter of
"LOVE"*

～リバーウィローのため息～

(川柳の国際化 7: 川村安宏の英訳川柳 (2) *FIRST LEAVES*)

前号で紹介した川村安宏茨城大学名誉教授の *FIRST LEAVES* (七月堂 1996) は、本邦初の英語センリユウ・チャップブックです。すでに日本のハイクやタンカの世界では海外との交流が進み、チャップブックを出版していました。川村は自作の川柳を英訳して、縦 15 cm、横 10.5 cm、56 頁を有するチャップブック (英文) を出版しました。それが *FIRST LEAVES* です。*FIRST LEAVES* は新緑の意味です。川村は *introduction* (序文) で、*"This booklet is meant to be a substitute for my name card to be given when I meet new friends abroad."* (この小冊子は新しい海外の友人に出会った時の名刺代わりのものです) と説明しています。川村にとってセンリユウのチャップブックは「詩の名刺」でした。「アメリカ人に日本から来た人は詩人なんだ」と言われて、「照れたりした」と川村は私への手紙で述べています。

そして序文の中で、川柳の小史、短歌と俳句との違いを説明しました。「また英語のセンリユウを書くときの注意として、シラブル (音節) の数よりも、ストレス (韻律) の数に注意を払うようにと提案しました。これは英語詩の伝統の弱強格のようなリズムを作る方が、海外の読者にとって、センリユウを理解しやすくなるからでしょう。それでは *FIRST LEAVES* から川村の英語センリユウを紹介しましょう。」

When I take out/my earplugs, I hear/the noises of the world.

耳栓をとれば世間の音がする

A poor cockroach is killed/for doing nothing but/taking a stroll.

散歩ただけでゴキブリ殺される

花嫁は初々しい

小栗 清 吾

婚礼が終われば、新婚生活の始まりです。

誰にでも皮肉な目を向ける川柳作家も、花嫁にはおおむね好意的です。当時の風習では、花嫁は十代後半が多く、「初々しい」という形容がピッタリの年頃ですから、百戦錬磨の川柳作家の筆先も鈍るのでしょうか。

笑う度嫁手の甲を口へ当て

九 40

古女房のように大口を開いて「ガハハ」と笑ったりしません。ちよつとうつむいて手の甲を口へ当てて笑うのです。

花嫁は飯を数えるように食い

九 29

汁粉餅嫁はちぎって舌へ乗せ 明六宮一

食事の時もしとやかです。ご飯はまるで一粒一粒数えるように、少しづつ箸でつまんで食べます。汁粉に入っている餅も、かぶりついてかみ切ったりせず、箸で小さくちぎってから口へ入れます。

嫁の着替えるを覗くと縮むなり 一二 21

着替えをしている時に、誰かが覗いたりしようものなら、「きやつ」と叫んで手足を抱えるように身を縮めます。何の羞恥心もなくなつた古女房とは大違いです。

そんな初々しい花嫁の最初の試練は、「嫁の礼」です。姑が花嫁を連れて町内へご挨拶に回ります。

嫁の礼町内中へ首が出る

九 22

新婦の顔を見ようと、町内中の人が顔を出します。恥ずかしいですね。

引き合はす嫁何とやら言いは言ひ 一二 24

そんな緊張の中で、まともな挨拶ができないはずはありません。姑が引き合はすと、口の中でモゴモゴと何か言うだけです。

それでも何か言えたのはいい方で、たいていは、姑がしゃべりまくる後に隠れて、ただお辞儀をしているだけです。

根性悪にしゃべらせて嫁お辞儀 傍一 18

「根性悪」は、川柳の約束通り姑のことです。花嫁がお辞儀ばかりしているのは、嫁の礼の時だけではありません。

来た当座嫁ひれ伏すにかかてる 安四梅 2

周囲の人に好印象を持つてもらおうと、とにかく顔を合わせる人みんなにお辞儀をするのです。心身共に疲れますね。

来客にも気を使います。

会うのかと客の来る度嫁は聞き 明四智 1

親戚の人などがやって来れば、ご挨拶をしなければなりません。来客がある度に、どういう関係の人なのか、お会いする必要があるので確かめます。

嫁も出て会つたらたんず開ける音 安四智 9

会わなければならない人とわかれれば、普段着でご挨拶しては失礼ですから、急いで自分の部屋へ行つて着物を着替えます。

家の外に出ると、近所の若い者がからかつたりしますから、油断はなりません。

五六度のぞいて嫁の夕すずみ 明四梅 2

何度も外をのぞいて見て、大丈夫とわかつてから涼みに出たりします。

恥ずかしがりの花嫁も、近所の子供相手なら気持も楽です。

来るほどの子に髪を嫁結つてやり 七 21

あいそつに嫁は鶴だのお舟だの 一七 38

遊びに来る子供全員の髪を結つてやつたり、折り紙で鶴や舟を折つてやつたりします。もちろん、こんな平穏な生活がいつまでも続くわけではありません。まもなく鬼より怖い姑の嫁いびりが始まりますが、それは次号で詳しく。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 278名

大阪市 桵尾 奏子

巢立つ日の朝も小言を言つたらう

(評) 何歳になつても子は子。服装や髪型、言葉遣いからドアの開け閉めまで、煩がられても言う。それは母の仕事。母の折りだ。

大阪市 江島谷勝弘

通天閣ちっちゃくなつてかわいそう

(評) もちろん、通天閣はそのままだが、ハルカスの展望台から見ると「あんなちっちゃかったか?」。たまには慰問してやろう。

佐賀県 真島久美子

嫌われたついでにまつすぐにしゃべる

(評) きつぱりした性格で本音を言うタイプは反発を買うこともある。だが、裏がないことが分かると好感に変わること多々あり。

米子市 生田 和之

全没で帰る列車に花吹雪

(評) 意気消沈した目に鮮やかな花吹雪。今回は負け戦だったが、次はリベンジしてやろうぜ!と応援してくれているようである。

高槻市 富田 保子

飽きるほど添うた夫とバスツアー

(評) 「飽きるほど」はお互いさま。だが、一緒に出かけているのだから仲が悪いわけではない。これ以上飽きぬように願いたい。

加西市 中川 修

飛行機も船も諦め草鞋履く

(評) 飛行機は墜落する。船は沈没する。列車は脱線する。バスは衝突する。自分の足でてくてく歩くのが健康のためにもベスト。

鳥取市 前田 楓花

しぼんではいけない此処はこの世です

(評) 心が若い人はいつも洗滌としている。外面を飾っても心が萎んでいると鬱陶しく見える。萎むのは柩に入ってからでいい。

羽曳野市 吉村久仁雄

気持ちいい日だから読まめ社会面

(評) 強盗殺人、放火事故詐欺、麻薬、じめ、自殺等々。爽やかな日にそぐわない記事ばかり。それが現実の世ではあるが……

和歌山県 森下よりこ

自転車であんぱん買いにまだ行ける

(評) 雨や風の日は無理だが、爽やかに晴れた日はチャリンコで元氣がいい気分。いつでも、そのような元氣を持続していたい。

四條畷市 吉岡 修

女子プロの臍が悟りの邪魔をする

(評) フルスイングしたときにチラリと見え

る臍。たしかに色っぽいが、その程度で惑わされるようではまだまだ修行が足りない。

大阪市 柴本はつは

汚す子がいる幸せなせまい家

和泉市 横山 捷也

出世した奴が真ん中同期会

大阪府 米澤 俣子

ありがとう増えた夫が気にかかる

小野市 藤原 泰宏

恋なのか会えば何だかきこちな

鳥取市 西川 和子

ご先祖の山の手入れに金がいる

堺市 内藤 憲彦

世の中を回してるのは「金」らしい

岡山市 工藤千代子

想い出を食べる心が貧しい日

寝屋川市 籠島 恵子

溜息がダメならあとはプチ家出

茨木市 藤井 正雄

バス旅行飲む男にも回る給

長岡京市 日置みどり

幸福度気分しだいで乱高下

唐津市 坂本 蜂朗

気心の知れた友あり青い空

大阪市 平井美智子

スキとだけ書いて五月へ出す葉書

豊橋市 藤田 千休

白魚の指が食らわすでこパンチ

神戸市 徳留 節

今日もまた殺意飲み乾す大ジョッキ
匙の裏もあるくつくる人の愛

島取市 田中 天翔

ドキドキと入試気分で初投句
春ですと大きな顔で寝坊する

西宮市 片山 忠

善処する言ったあなたを見届ける
ノーマイク近寄り難い女だな

弘前市 高瀬 霜石

猛毒に注意 よだれの出る話
重大なことは晩酌前決める

和歌山市 古久保和子

気の抜けたソーダーほどの片想い
いい陽気お誘いすべてお受けする

大阪市 高杉 力

ママ仕事ババは仕事を探してる
口数で字の大きさが決まる寄付

青森市 守田 啓子

屈伏の形に茂る人の森
糠床の春愁をかき混せている

松江市 石橋 芳山

ふところの深さよ山はみどり色
これからも引かないだろう当たりクジ

箕面市 広島 巴子

油断した罰だチャックが閉まらない
徘徊じゃないトリユックでウォーキング

東大阪市 北村 賢子

酒が好きないのち消毒しています
街ぶらで酒の肴を見繕う

大阪市 田浦 實

わたくしの主義は変えない酒肴
吟醸酒ときどき盗み魚煮る

松江市 三島 崧丘

すっぱんの心触れ合う飲み仲間
気に入った猪口と馴染みの四合瓶

香芝市 大内 朝子

百薬の長切らすなと天の声
飲みだすと過去形ばかり食べている

河内長野市 大島 友子

酒の味偽装されても気付かない
むずかしい顔ばかりする男たち

弘前市 吉川ひとし

いいところ見つけてくれてありがとう
のめりこむタイプで行かぬバチンコ屋

三田市 上田ひとみ

咳き込んでしまう好きだと言いかけて
選曲は要らぬ持ち歌一つだけ

池田市 上山 堅坊

洪滞に遭って変わった目的地
選曲は要らぬ持ち歌一つだけ

島取県 平木 公子

海南市 小谷 小雪

天空の父母にも届け若葉風
特別なお手紙ポストまでダツシユ

堺市 澤井 敏治

遮断機の前で足踏みするいらち
友だちのその友だちも高齢者

貝塚市 吉道あかね

童謡を次々歌うお湯の中
ぽっかりと淋しくなった母の日よ

堺市 矢倉 五月

感動をしましたすぐにハガキ出す
姉ちゃんに片手拝みで服借りる

紀の川市 辻内 次根

賞味期限読んでなければ同じ味
春の日のシルバースhirt脚美人

島取県 斉尾くにこ

すごいねの一滴夫が澄んでくる
プリンターの準備運動長すぎる

大阪市 笠嶋 恵美

古新聞出す日間違え持ち帰る
寂しいと言うたら罰が当たりそう

篠山市 佐々木 勇

突然の目眩に一句消えていた
眉尻が優しくなっていく余生

大阪市 谷口 義

太っても痩せてもおばあさんである
長生きをする辛抱せんならん

堺市 奥 時雄

喜寿過ぎて夫婦喧嘩の情けなさ
通過するのぞみの速さ知るこたま

橿原市 安土 理恵

自由気まま何てぜいたくなんだろう
熟睡ができた食パン厚く切る

鳥取市 岸本 宏章

クールビズ昔は誰もやっていた
顔も名も知らぬ副知事副市長

神戸市 能勢 利子

カーネーション言葉添えずに息子から
重い物運んでくれる店で買う

堺市 加島 由一

スイーツじゃなかった頃の芋の味
靴下の穴も此の頃珍しい

和歌山市 坂部紀久子

昭和の日ひばりの歌をさいている
自動ドアだけが愛想のいいお店

奈良市 米田 恭昌

東かがわ市 川崎ひかり
米子市 竹村紀の治

松山市 神野きつこ

無人島噴火するたび広くなる
賞味期限切れて献血車に乗れぬ

弘前市 福士 慕情

三田市 久保田千代

飲み込んだ言葉吐き出す時を待つ

八尾市 中岡 妙

バルーン葬せめて最後は宇宙まで
病院を駆け込み寺にする議員

堺市 村上 玄也

地下鉄に辛い辛いという寝顔
大好きな西瓜を食べる夏が来る

橿原市 居谷真理子

木の子芽和え先に食べた鼻が言う
消費税アップ豆腐も高くなる

大阪府 古今堂蕉子

矢方市 寺川 弘一

鳥取市 夏目 一粹

和歌山市 柏原 夕胡

米子市 成田 雨奇

吹田市 太田 昭

八尾市 宮崎シマ子

驚いた三日の風邪で足たらず
何かもネット頼りで辞書持たず

大阪府 坂 裕之

豊中市 高島 啓子

京都府 水野 黒兎

カド番の大関いない場所は無い
そう言えは少なくなったこいのほり

倉吉市 中村 毅

鳥取市 吉田 弘子

八億円湯水のように遣う人
びっくりだ8億円が生活費

枚方市 松原 保

橋本市 石田 隆彦

奈良市 大久保眞澄

血圧を上げて南無三蘭科の椅子
胃カメラが覗いた命さくら咲く

岡山市 丹下 凱夫

紀の川市 北山 絹子

鳥取県 竹信 照彦

日本も明治維新は紛争地
バイキング欲張りばあ顔を出す

堺市 近藤 治子

荒屋のローンも済んで老い二人
裾直し切り取る布の長いこと

堺市 増田わこう

つくば市 嶋本 喬

大洲市 花岡 順子

散り際は桜に敵うはずもない
督促が花の切手でやってくる

三田市 福田 好文

長岡京市 山田 葉子

札幌市 三浦 強一
トイレにも梅一枝のおもてなし

鳥取市 岸本 孝子
衣更え華やぐ春の色並べ

大阪市 井丸 昌紀
脇腹をつまむと肉が絡み付く

河内長野市 谷 久美子
嬉しくても腹が立つてもおなか減る

富田林市 山野 寿之
寝て食べてまた寝る雨の充電日

喜屋川市 平松かすみ
久し振りに食抜けた朝寝坊

河内長野市 藤塚 克三
妻は留守安楽椅子で自己主張

京都市 榎本 宏子
焼きもちを焼いてた頃の赤い靴

大阪市 岩崎 公誠
ヘソクリの残りチマチマ確かめる

和歌山市 福井 菜摘
いつからか小部屋になった同期会

枚方市 丹後屋 肇
応接室ピンボーゆすり止まらない

倉吉市 山中 康子
流し台目立たぬように磨いとか

河内長野市 梶原 弘光
意味解りだんだん怖くなるコビレ

三田市 上垣キヨミ
採血のナース笑顔で針を刺す

明石市 梶谷 和郎
言わないと何にもやらぬすぐやる課

和歌山市 武本 碧
断捨離もそこそこ出来てまたこの世

松江市 中筋 弘充
凶のくじに何とかなると書いてある

鳥取県 山下 節子
趣味聞かれスマホでゲームとも言えず

大阪府 初山 隆盛
ケータイもスマホも持たず列にいる

和歌山市 上田 紀子
両輪が軋みながらのボランテア

青森県 松山 芳生
声帯が鈍り麗声が届かない

西予市 黒田 茂代
もう遠慮要らなくなった優先席

豊中市 藤井 則彦
ユルキャラの中に入って叫びたい

羽曳野市 徳山みつこ
一周忌過ぎてても泣かす夫の字

堺市 遠山 唯教
不似合いな造花が墓地に咲いている

倉吉市 岡崎美知江
葬式の段取りちゃんと書いておく

高槻市 左右田泰雄
寝不足を絵にしたような生あくび

大阪府 桑田ゆきの
法話受け脳に栄養賜った

東京都 川本真理子
強烈な刺激があるか我が海馬

川西市 山口 不動
一族が集まりやすいバーベキュー

加西市 金川 宣子
絵手紙の心跳ねてる紙の上

泉佐野市 稲葉 洋
伴奏はオルガンがいい童歌

米子市 見山 温子
チューリップ夜は眠いと閉じている

篠山市 遠山 可住
四種類の葉忘れず老いてゆく

鳥取市 永原 昌鼓
折角のひとり余生を楽しまん

和歌山市 磯部 義雄
鬼嫁と楽しく花見小半日

富田林市 片岡智恵子
やりくりが上手繰り越しいつもゼロ

尼崎市 市坪 武臣
頑張りが利かなくなつて四股を踏む

三田市 尾崎 一子
長生きもほどほどでもほほど

鳥取市 池澤 大鯨
ときどきはスーパ―はしご食変える

喜屋川市 森 茜
さもちでは席ゆずりたい満員車

大阪市 佐藤 忠昭
嘘言わず恥を覚悟の五七七

共選欄

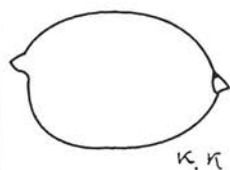
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 380名)



「リラックス」竹 治 ちかし 選

花束のようやく匂うリラックス
 リクライニングシートになって肩が凝る
 あの人が帰ってやっとリラックス
 大役を果たした後のリラックス
 穏やかなウクレレのある昼下がり
 故郷の川で両手を遊ばせる
 一人来てせせらぎ聞いているしじま
 ケセラセラ肩も張らずに恙ない
 補聴器を外し連休リラックス
 出張で上司のいない事務所内
 リラックスできない椅子が待つ歯医者
 春うらら私も猫も大欠伸
 リラックス出来ないままに旅終わる
 リラックスしすぎて私呆けて来た
 若葉風いっぱい吸った里帰り

尾崎 一子	三田市	尾崎 一子	三田市	尾崎 一子	三田市	尾崎 一子	三田市	尾崎 一子	三田市
舞夢	大阪府	舞夢	大阪府	舞夢	大阪府	舞夢	大阪府	舞夢	大阪府
榎本	大阪府	榎本	大阪府	榎本	大阪府	榎本	大阪府	榎本	大阪府
多和久敬子	出雲市	多和久敬子	出雲市	多和久敬子	出雲市	多和久敬子	出雲市	多和久敬子	出雲市
東横ますみ	瀬戸内市	東横ますみ	瀬戸内市	東横ますみ	瀬戸内市	東横ますみ	瀬戸内市	東横ますみ	瀬戸内市
森松まつお	松原市	森松まつお	松原市	森松まつお	松原市	森松まつお	松原市	森松まつお	松原市
村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市
木下 敏子	吹田市	木下 敏子	吹田市	木下 敏子	吹田市	木下 敏子	吹田市	木下 敏子	吹田市
桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄	香南市
福井 菜摘	和歌山市	福井 菜摘	和歌山市	福井 菜摘	和歌山市	福井 菜摘	和歌山市	福井 菜摘	和歌山市
錦織 禮子	松江市	錦織 禮子	松江市	錦織 禮子	松江市	錦織 禮子	松江市	錦織 禮子	松江市
山根 弘子	神戸市	山根 弘子	神戸市	山根 弘子	神戸市	山根 弘子	神戸市	山根 弘子	神戸市
後藤 宏之	米子市	後藤 宏之	米子市	後藤 宏之	米子市	後藤 宏之	米子市	後藤 宏之	米子市
龍島 恵子	寝屋川市	龍島 恵子	寝屋川市	龍島 恵子	寝屋川市	龍島 恵子	寝屋川市	龍島 恵子	寝屋川市
春城 年代	尼崎市	春城 年代	尼崎市	春城 年代	尼崎市	春城 年代	尼崎市	春城 年代	尼崎市

「リラックス」大内 朝子 選

投函を済ましゆつくりレモンティー
 リラックスさせてはくれぬ消費税
 リラックスして作戦を練り直す
 親子とも何処でも眠る特技持つ
 ネクタイを外しただけでリラックス
 リラックスすると難問解けてくる
 縁側で蜜吸う蝶を眺めおり
 リラックス心の糧とする読書
 実家には老母が居るからリラックス
 週刊誌読んで待つてる治療院
 正座からあぐらに酒が踊り出す
 気の利いた雨が疲れた頃に降る
 リラックスすれば空気も柔らかい
 ハワイアン聴いてまどろむ昼下がり
 リラックスしたいが妻の目が怖い

矢倉 五月	堺市	矢倉 五月	堺市	矢倉 五月	堺市	矢倉 五月	堺市	矢倉 五月	堺市
政勝	横浜市	政勝	横浜市	政勝	横浜市	政勝	横浜市	政勝	横浜市
藤原ほのか	岩出市	藤原ほのか	岩出市	藤原ほのか	岩出市	藤原ほのか	岩出市	藤原ほのか	岩出市
福島 弘子	西宮市	福島 弘子	西宮市	福島 弘子	西宮市	福島 弘子	西宮市	福島 弘子	西宮市
唯教	堺市	唯教	堺市	唯教	堺市	唯教	堺市	唯教	堺市
佐々木満作	東大阪市	佐々木満作	東大阪市	佐々木満作	東大阪市	佐々木満作	東大阪市	佐々木満作	東大阪市
徳山みつこ	羽曳野市	徳山みつこ	羽曳野市	徳山みつこ	羽曳野市	徳山みつこ	羽曳野市	徳山みつこ	羽曳野市
藤井 正雄	茨木市	藤井 正雄	茨木市	藤井 正雄	茨木市	藤井 正雄	茨木市	藤井 正雄	茨木市
加門 萌子	奈良市	加門 萌子	奈良市	加門 萌子	奈良市	加門 萌子	奈良市	加門 萌子	奈良市
平松かすみ	寝屋川市	平松かすみ	寝屋川市	平松かすみ	寝屋川市	平松かすみ	寝屋川市	平松かすみ	寝屋川市
竹村紀の治	米子市	竹村紀の治	米子市	竹村紀の治	米子市	竹村紀の治	米子市	竹村紀の治	米子市
岸本 孝子	鳥取市	岸本 孝子	鳥取市	岸本 孝子	鳥取市	岸本 孝子	鳥取市	岸本 孝子	鳥取市
村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市
米澤 俣子	大阪府	米澤 俣子	大阪府	米澤 俣子	大阪府	米澤 俣子	大阪府	米澤 俣子	大阪府
山下 凱柳	鳥取市	山下 凱柳	鳥取市	山下 凱柳	鳥取市	山下 凱柳	鳥取市	山下 凱柳	鳥取市

ヘッドホン独りの城でリラックス
露天風呂ゆったり星と語り合う
ケイタイを捨て縁側の日向ぼこ
ハワイアン聴いてまどろむ昼下がり
チエックイン素足がホッと息を吐く
式服をぬいだ我家の台所
リラックスするとビールが首もたげ
夫の留守モーツァルトにつつまれる
日向ぼこ過去も未来も後回し
湯あがりの妻鏡台へ横坐り
ゆったりと明日には明日の風まかせ
五つ星宿よりうちの四畳半
わたくしに羽根を休める家がある
リラックス出来なくなつて来た実家
リラックスしすぎ認知と疑われ
夕食の片付け終えた母のお茶
スピーチが終つてやつとリラックス
散らかした一間天下のリラックス
肩の力抜けば明日が見えてくる
散らかった部屋でごろんとリラックス
リラックスすればするほど緩むゴム
伸びのびと眠る一間の城がある
リラックス出来る夫と半世紀

弘前市	高橋	洋子
高槻市	杉本	義昭
茨木市	島田	誠一
大阪府	米澤	俣子
鳥取県	細田	裕花
神戸市	山田	婦美子
松江市	川本	畔
西脇市	七反田	順子
高槻市	原	洋志
唐津市	山口	高明
富田原市	中村	恵
芦屋市	竹山	千賀子
鳥取市	倉益	一瑤
宇部市	平田	実男
藤井寺市	田付	絹枝
弘前市	福士	慕情
鳥根県	伊藤	寿美
雲南市	菅田	かつ子
松江市	三島	淞丘
和歌山市	福本	英子
岩出市	藤原	はのか
出雲市	小白金	房子
神戸市	松井	文香

すててこで大の字になる四畳半
リラックス出来る訳ない手術台
私を縛るもの無し日曜日
ケセラセラ肩も張らずに恙ない
釣り糸を垂れてこころを泳がせる
バスツアー今日は一日羽根伸ばす
先頭打者ホームランから波に乗り
風呂上がりプハーツと言つて飲むビール
子の家でリラックスして肩が凝る
リラックス蟻の列には見られない
アヒル浮きリラックスする仕舞風呂
水晶体新緑眺めリラックス
リラックスし過ぎ戦に遅刻する
家族留守今日はベットと天下人
リラックスできない椅子が待つ歯医者
周平の世界に浸る心地よさ
まず一步そしてゆつくり二歩三歩
指定席やつぱりここがほつとする
リラックスしろとコーチは力んでる
リラックス未だに出来ぬ妻の星
子は巢立ち親を見送り妻と酌む
悔しいね泣きたいねって母パフェ
散らかった部屋でごろんとリラックス

大阪府	初山	隆盛
弘前市	福士	慕情
大阪市	栃尾	奏子
香南市	桑名	孝雄
三原市	鴨田	昭紀
西予市	黒田	茂代
篠山市	遠山	可住
橿原市	居谷	真理子
西予市	亀岡	哲子
枚方市	平尾	定昭
寝屋川市	森田	麗
倉吉市	中村	毅
羽曳野市	吉村	久仁雄
三田市	上垣	キヨミ
松原市	森松	まつお
大阪市	江島	谷勝弘
弘前市	高瀬	霜石
和歌山市	坂部	紀久子
神戸市	徳留	節
泉佐野市	稲葉	洋
唐津市	坂本	蜂朗
青森市	守田	啓子
和歌山市	福本	英子

鎧ぬぎメーク落として飲むお酒
 釣り糸を垂れてこころを泳がせる
 リラックス出来る仔猫と住んでいる
 負けてこい父の一言リラックス
 足湯して旅のページを繰っている
 せせらぎに河鹿鳥の音山の宿
 正座からあぐらに酒が踊り出す
 休日の陽に当ててやる足の裏
 リラックスする筈だった定年後
 ちひろの絵眺め続けている夕陽
 雑踏の中で見つけたシャボン玉
 リラックス心の棘が抜けていく
 空っぽにならぬ程度にリラックス
 リラックスするとよく飛ぶシャボン玉
 水玉のパジャマで今日を締め括る
 どんぐりの仲間だあれも気張らない
 リラックス言葉少なき人と居る
 リラックスするのは石の下だろう
 疲れたら樵の巨木に会いに行く

秀句

大阪市	若本	安代
三原市	鴨田	昭紀
大阪市	升成	好
和歌山市	磯部	義雄
三田市	上垣キヨミ	
河内長野市	村上	直樹
米子市	竹村紀の治	
出雲市	伊藤	玲子
鳥取市	岸本	宏章
池田市	上山	堅坊
大阪市	内田志津子	
大阪狭山市	矢野	梓
倉吉市	山中	康子
京都市	榎本	宏子
佐賀県	真島久美子	
西予市	黒田	茂代
藤井寺市	太田扶美代	
松江市	松本	文子
弘前市	稲見	則彦

俺のソファで息子の嫁が昼寝する
 リラックス出来ましたかと嫁が聞く
 天国はこんなだろうか露天風呂
 高槻市 片山かずお
 鳥取市 近藤 秋星
 三田市 福田 好文

ゴロ寝から無になるまでのリラックス
 新郎だけ緊張してるハネムーン
 いい曲だリズムが脳を浄化する
 介護する静かな夜はリラックス
 新緑の森で小鳥としゃべってる
 花咲かせ今日も畑でリラックス
 リラックス出来ぬわたしの預金帳
 大役を果たした後のリラックス
 リラックスするとよく飛ぶシャボン玉
 一日のノルマ果した酒の味
 ありがとう声聞く度にリラックス
 煩惱消え力が抜けてきた男
 リラックス気分になれる思いやり
 九条に守られて来たリラックス
 笑顔見せ笑顔みせられリラックス
 リラックスいつもしてます自然体
 夕焼けと別れようやくリラックス
 お湯割で脳細胞を休ませる
 日向ぼこ過去も未来も後回し

秀句

樺原市	安土	理恵
三田市	福田	好文
明石市	穂谷	和郎
和歌山市	北原	昭枝
貝塚市	吉道あかね	
鳥取市	西川	和子
弘前市	稲見	則彦
神戸市	山根	弘子
京都市	榎本	宏子
札幌市	三浦	強一
豊中市	源田	啓生
奈良県	渡辺	富子
亀岡市	井上	森生
鳥取市	中村	金祥
大阪市	升成	好
高石市	浅野	房子
松江市	松本	文子
大阪市	小谷	集一
高槻市	原	洋志

万緑に預けきつて無我の境
 生前葬済ませて風に同化する
 寝ころんで空まるごとと会話する
 寝屋川市 森 茜
 青森県 松山 芳生
 茨木市 島田 誠一

「牙える」

(投句 203名)

水 野 黒 兎 選



あの頃は牙えてた 腹を空かせてた
まな板で女の勘をみじん切り
牙えすぎる弁舌胡散臭くなり
牙え過ぎて先を読んでは浮き上がる
正論が牙えて会議をわやにする
詐欺師にも芸術家にもいるセンス
弁解の牙え過ぎている不自信
第六感が牙えて孤独になつていく
牙えた目の記事で昨日が裏返る
世相切るコラムのペンが牙えている
不随なれど口にくわえた筆牙える
古希祝う墨痕淋漓牙える筆
軍靴の音近づくと目で目が牙える
牙えわたる平和給食のチャイム
損得が絡むと牙えるヒトの脳
シンブルに生きたら牙えてくる心
合掌の手から心が牙えてゆき
ジョークから本音を悟る今日の牙え
心変わり察しつきさす牙えた月
閃かぬ今日にレモンをひと搾り

樺原市	居谷真理子	佐賀県	真島久美子	大山市	金子美千代	大阪市	原田すみ子	米子市	生田 和之	弘前市	高瀬 霜石	札幌市	三浦 強一	神戸市	山田婦美子	和歌山市	土屋起世子	和歌山市	福井 菜摘	米子市	後藤美恵子	大阪市	坂 裕之	堺市	澤井 敏治	神戸市	白川 淑子	鳥取市	福西 茶子	鳥取県	斉尾くにこ	大山市	関本かつ子	鳥取県	西谷 悦子	神戸市	松井 文香	富田林市	山野 寿之
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------

月光の牙えて妖しい古寺の鴟尾
新緑の牙えが私を羽ばたかす
森林浴五感に牙える滝の音
魂を揺する魁夷の牙えた青
作業服着ると頭が牙えてくる
山肌の雪の割れ目で注意報
名人が牙えた一瞬虹が出た
シエフの舌一匙嚙り指示を出す
老先生のいよいよ牙える聴診器
牙える腕重さ感じぬ鉤屑
包丁の牙えを食べてる活造り
おだてると日に日に牙えてくる音色

佳

軸

奈良市	岩本 浩二	生駒市	飛永ふりこ	大洲市	花岡 順子	西子市	黒田 茂代	堺市	内藤 憲彦	弘前市	岡本 花匠	河内長野市	藤塚 克三	八尾市	新海 信二	高槻市	初代 正彦	羽曳野市	永田 章司	貝塚市	石田ひろ子	藤井寺市	太田扶美代	唐津市	仁部 四郎	和泉市	横山 捷也	長野県	丸山 健三	高槻市	原 洋志	大阪府	米澤 俣子	大阪市	栃尾 奏子	羽曳野市	徳山みつこ	唐津市	北村 松風
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------

「テーマ」

浅田隆樹選

(投句 198名)



人間をテーマに作る五七五
ももクロが流れマールくんマウンドへ
私のテーマソングは「サザエさん」
孫に会うテーマソング覚えよう
欲ばらず身近なテーマからこなす
ユルキャラに子供とられるテーマ館
電車までテーマパークのラッピング
テーマなど何でも良いから酒をくれ
テーマだけ決めてその先進まない
湯けむりと付けば必ず見るドラマ
テーマからはずれて今日の日は終わる
家庭料理勿論テーマなどなくて
暗いテーマせめてネクタイ派手にする
次世代へ残すテーマの平和維持
目立たない事がテーマの葱坊主
呼び戻す蛭がテーマ村おこし
汗かかず題目並べている男
聞き齧り主題を外し受けている
「男」というテーマに踊ってしまいます
主題歌に弾むわたしの恋心

豊中市	松尾美智代
大阪市	榎尾 奏子
樫原市	居谷真理子
大阪市	神夏磯典子
四条畷市	吉岡 修
大阪市	伏見 雅明
三田市	北野 哲男
交野市	森本 弘風
和泉市	横山 捷也
三田市	多田 雅尚
東京都	川本真理子
弘前市	稲見 則彦
奈良市	米田 恭昌
豊中市	水野 黒兎
大洲市	中居 善信
茨木市	藤井 正雄
奈良県	渡辺 富子
高槻市	富田 美義
弘前市	肥後和香子
羽曳野市	徳山みつこ

長生きをテーマにすると酒になる
指十本動かすことが日課です
病老死テーマにすれば尽きぬ喜寿
どう生きる古希の海馬を鍛えてる
夫より少し長生きするテーマ
新テーマ五輪この目で見届ける
これからのテーマ二人の金婚譜
老いて未だ愛のテーマに溺れそう
ちよつとした隙がテーマにひび入る
赤トンボ母にあまえたテーマ曲
テーマ逸れて冒険心が疼き出す
ドーナツの穴で会議が採めている

佳

人生のテーマ余白に花の種
一病を持つてテーマ書き替える
共存をヒト科に問うている地球
のんびりをテーマに汽車の旅を組む
決められないままに生きてる雲のごと

人

テーマから逸れて社長の若い頃

地

偉いなと思う僻地のお医者さま

天

難題が解けてピアノがボンと鳴る

軸

若い日のテーマもいちど温める

堺市	澤井 敏治
堺市	内藤 憲彦
京都市	榎本 宏子
富田林市	関 よしみ
貝塚市	吉道あかね
大阪府	米澤 俣子
河内長野市	谷 久美子
倉吉市	山中 康子
八尾市	宮西 弥生
今治市	渡邊伊津志
和歌山市	上田 紀子
鳥取市	福西 茶子
三田市	上垣キヨミ
藤井寺市	太田扶美代
明石市	桃谷 和郎
鳥取県	平木 公子
豊中市	池田 純子
河内長野市	梶原 弘光
弘前市	高瀬 霜石
池田市	上山 堅坊

「栄 養」

(投句 199名)

七反田 順子 選



栄養が口に回ってよく喋る
 胴回り栄養過多のアドバルーン
 何よりも人参の赤たのもしく
 栄養士よりもやっぱり母の味
 おいそれと結果は出せぬ栄養素
 ゴム管のカロリーだけで生かされる
 グルメほどやけに気にする栄養価
 栄養がいきわたってる子の笑顔
 栄養の不足も過多も医者通い
 サプリなど要らぬ粗食とスクワット
 栄養を欲しがっている脳砂漠
 栄養価間うてはおれぬ飢餓の国
 軟らかい肉をわたしも食べている
 栄養源妻はお菓子で僕は酒
 一喝も栄養にする伸び盛り
 お茶漬に憧れている栄養士
 栄養をたっぷりもらい殻破る
 満点の栄養になる誉め言葉
 筍を三日続けて食べさせ
 栄養はイワシともやしそして花

小野市 藤原 泰宏
 松江市 石橋 芳山
 東京都 川本真理子
 出雲市 竹治ちかし
 倉吉市 山中 康子
 唐津市 山口 高明
 高槻市 初代 正彦
 鳥取県 山下 節子
 和歌山市 磯野 義雄
 鳥取市 福西 茶子
 防府市 坂本 加代
 唐津市 北村 松風
 米子市 中原 章子
 羽曳野市 吉村久仁雄
 弘前市 福士 慕情
 和歌山市 武本 碧
 豊中市 池田 純子
 神戸市 富永 恭子
 三田市 堀 正和
 橿原市 居谷真理子

伸びざかり栄養補給して眠る
 夏バテに味方のゴーヤ植えてある
 データーが糖分過多と肩叩く
 取って置き穴道湖産のしじみ汁
 偏食と不摂生してのむサプリ
 栄養をくれと頭の血が騒ぐ
 形ある野菜がいいわジュースより
 栄養のドリンクのんでやる気だす
 栄養が気になり出した菜食家
 墓場までサプリメントがついてくる
 栄養の不足か腹が出て困る
 下半身ばかり栄養行き届き
 ステーキが笑う栄養ありそうだ
 佳
 赤ちゃんが笑顔で待っていた母乳
 すぐ怒るあなたに足りぬカルシウム
 スランプの脳に栄養届けたい
 食生活の乱れはきつと秋にくる
 人
 行き届く栄養五感弾ませる
 地
 栄養が要らんとこだけ付いてくる
 天
 栄養の最たるものは宇宙食
 軸
 それなりの栄養とって蔓伸びる

和歌山市 北原 昭枝
 西宮市 福島 弘子
 藤井寺市 田付 絹枝
 松江市 錦織 禮子
 三田市 北野 哲男
 河内長野市 大島 友子
 羽曳野市 徳山みつこ
 堺市 遠山 唯教
 橋本市 石田 隆彦
 弘前市 吉川ひとし
 大洲市 花岡 順子
 横浜市 川島 良子
 紀の川市 楠原 富香
 松山市 神野きつこ
 三原市 鴨田 昭紀
 和歌山市 上田 紀子
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 福井 菜摘
 西宮市 足立 茂
 大阪府 米澤 俣子

民族の詩歌 (25)

―『民族』について

三 好 専 平

このごろ、わたしは大変大それたことをしているのではないかと思うことがある。「民族の詩歌」という随筆である。民族とは何かということすら知らずに書いているのではないかと思うからである。そもそも私に『日本民族』という自覚はあるのだろうか。私はいったい何者なのか。

漢字が好きだから、中国の血を引く渡来系ではないか。山が好きだから、ブータンの山奥の血を引いているのか。海も好きだから、南方のポリネシアの血を。放浪が好きだから、モンゴル系の血を。私は何者だ。私の家の家系図は残っていない。本籍は讃岐である。徳島に三好郡があり、その出だという。が、海賊説も有力である。毛は薄い方なので、アイヌや隼人系ではない。混血雑種であることは間違いない。私は何

人なのか。

「人」と「民族」は区別して使われる。「アメリカ民族」という言い方はない。日本はどちらでも使う。使える。何故か。

民族を広辞苑で調べてみると「文化や出自を共有することからくる親近感を核にして歴史的に形成された、共通の帰属意識を持った人々の集団」とある。さらに付け加えて「言語が重視されることが多く、宗教や生業形態（農業・漁業・牧畜など）が民族的伝統となることも多い。また、人種・国民とも必ずしも一致しない。」ブリタニカも全く同じ。

(ethnic group 文化的同一性・nation 国家的同一性)

ウィキペディア「一定の文化的特徴を基準として他と区別される共同体。」「近代日本によって作られた『民族』という語には、国家的統一をもくろんだ意識が強い。」

茶臼山を一望できる風光明媚な統国寺へ時々でかける。川柳塔本社近くである。今は、在日コリアンの寺となっていて、住職は崔無碍。ラブホテルを上ると少し行っただころに「和氣山統国寺」の門柱があり、横に「古寺名・百済古念仏寺」とある。も

とは浄土宗の寺であらう。

文人墨客が遊んだところでも知られ、古くは斉藤茂吉のアラragi派の歌会がしばしば行われた。

入り口近くに、ベルリンの壁の残欠が二欠置かれている。縦三m、横一mぐらいの大きなものである。朝鮮民族の独立を願うためにわざわざドイツから贈られたものだという。冷戦の遺構ともいふべきこの壁。壁の面は白い石のようである。ところどころに黒や赤の落書きやペンキの跡や瑕がある。

日本も最近までは、アメリカにより分断されていた。第二次世界大戦中は、ナチスがユダヤ人を「民族浄化」の名目で、虐殺した。ゲルマン民族の血を守るという大義名分。日本も、朝鮮や台湾に日本語を強制した。「日本語を使う人は同胞である」というフィクションをでっちあげ、挙国一致で戦争にあたった。日本人自身「天皇の子供である」という嘘を信じ込まされて戦争に協力し命を投げ出した。

なだいなだは、『民族という名の宗教』岩波新書・188)の中で、人をまとめる原理、排斥する原理として民族という語を取り上げて論じている。



「不愉快！」を川柳にぶつける

今年の「母の日」は5月11日でした。当日の甲子園球場は阪神対巨人。阪神はメッセンジャーと鶴岡のバッテリーで、1対0で勝利。お立ち台で「来場の皆さんへ、母の日のメッセンジャー」と促され、完封したメッセンジャーは無難な外交辞令でしたが、殊勲打の鶴岡は「いろいろな人を産んでくれてありがとう」と言っただけに受けていました。

たしかに、世の中はいろいろな人がいるから面白いのであって、人間すべてが同じような性格であれば、さぞかし味気ないことでしょう。しかし、多彩な人の中には身勝手な人や甚だしく価値観が違う人もいて、摩擦が生じたり、ときには衝突することもあります。いろいろな人がいるおかげで面白く、且つややこしいのがこの世と云えそうです。

勝ち負けにこだわる人がいて疲れ
会の和を乱す一人にどなりたい

偉そうにしている出世した男

優先席に十八歳のお年寄り

溝掃除手を汚さないひと一人

勝った負けたをいつまでもグチグチ言う人がいます。川柳

大会などの成績でも同じで、聞いているほうが疲れてしまいます。また、周囲のことには無頓着な人、気配りが苦手な人、

横柄な人、自分勝手な人などなど、平常心を乱されイライラさせられることが多々あります。そのような不愉快な思いを溜め込んでいると気分も減入りますが、幸いにも私たちは川

柳という気分転換には最適の手段を持っています。先ほど挙げた句のように、不愉快な想いを作品にまとめることによって、気分も少しは浄化されるでしょう。

取り敢えず会釈しておくすかんたこ

小川てるみ

黙礼で苦手な人と擦れ違う

辺 安子

挨拶をする日しない日謎の人

山路すみれ

ひとり言聞こえたけれど無視しとく

小林 早苗

辛抱の仕方を学ぶおつきあい

栗田 久子

以心伝心というのは、「言葉によらなくても気持ちが通じ合うこと」で、元来は良い意味ですが、「すかんたこ」とか「苦手」と思っていたら相手もそれを感じ取って、「すかんたこ」とか「苦手」と思っているものです。だからと言って互いに無視をしているとだんだん溝が深くなつてきます。そこは「渡世の仁義」と割り切って、一応は会釈なり黙礼を交わすべきでしょう。おつきあいというのは、右の句のように「辛抱の仕方を学ぶ」有り難いことなのかもしれません。

自慢する人集まってクラス会

五反田柊子

聞こえてはいます聞く気のない自慢

沖野佐和子

自慢話じつと聞くのも人助け

大久保真澄

ご自慢をたっぷり聞いて花もらう

江原とみお

自慢する人には嘘もついておく

坂上のり子

腹が立つというほどのことではありませんが、いささか面倒なのが自慢話を聞かされること。しかし、自分自身も含めて、誰の話の中にも多かれ少なかれ自慢は含まれているものです。そのように自省すれば「人助け」と割り切って、ご自慢をたっぷり聞いてあげることもできるでしょう。

初級教室

題一 趣味

山口 光久

短詩型文芸としての川柳は十七音字中心の形式で構成されています。十七音字とは五音・七音・五音のことです。

十七音字の配列は必ずしも五音・七音・五音でなくても七音・五音・五音でも、五音・五音・七音でも、八音・九音でも、九音・八音でも区切り方はいいのです。五音・七音・五音以外は「句またがり」と呼ばれています。この十七音字が本来の姿です。

しかし、どんな句でも五音・七音・五音で詠みさえすればいいという訳ではないのです。内容によって、他の音数形式で表現しない句が生きている場合があるのです。

中句が八音字、下句が六音字になり、言葉として省略、変更できない場合で、自分の想いははっきりと表現したい時は、上句へ倒置し、上句を六音字または七音字にするのは止むを得ないとされています。六音・七音・五

音または七音・七音・五音と上五の字余りの句になりますが、中七、下五がしつかりして、リズムが整っていれば良しとされています。

【添削】

原 ツーカーの趣味が絆を深くする 律子

「ツーカーの趣味」はおかしい。ツーカーと書けば外来語のようですが「つうかあ」のことで「つうと言えはかあ」の約、気持ちが通じ合って仲の良いことです。

添 共通の趣味が絆を深くする

原 値上りの手助け趣味の菜作り (見) 温子

「値上りの手助け」？ちよっとおかしい。値上げのため家計が苦しくなるから、家計の手助けに菜作り、なら解りますが。

添 値上がりへ逆らう趣味の菜作り

原 趣味が良い空ぞらしいねその言葉 モモ

何かきくしくとした感じでリズムも悪い。

添 いい趣味ねなんと空々しい台詞

原 ビンの中マリモつぶやき趣味となる (川) 真理子

添 趣味をこえ深入りしたいのがマリモ

原 友の趣味美味しく頂きありがたや 登子

添 友の料理趣味の域こえシェフを超え

原 必要だ趣味を楽しむ体力が (高) 弥生

添 体力をたくわえ趣味を楽しもう

原 大阪のおばちゃんにある趣味センス 恵

添 大阪のおばちゃん趣味を謳歌する

原 婆ちゃんハテストも無くて五七五 (穂) 正子

添 婆ちゃんは嵌っています五七五

原 趣味の友竹の節目に勇気くれ (富) 恵子

添 趣味の友節目節目で勇気くれ

原 連れ合いと趣味が重なり有り難い 国和

添 連れ合いと趣味が一致で助け合う

原 人柄を変える趣味なら凝ればよい 元三

添 のめり込んだ趣味なら最後までやろう

原 趣味がありすぎ三日坊主で実にならぬ 紀美恵

添 飽き性で三日続かぬ趣味ばかり

原 多趣味にて人脈多く出世する 風花

添 趣味多く人脈出来て事欠かぬ

原 趣味金で株に入れ込み悩み込む 健二

添 趣味はお金株に入れ込み悩み日々

原 訪れた友の部屋じゅう趣味のよさ 美紗子

添 友の部屋いたるところに趣味のよさ

原 手に職をつける趣味ならありがたい きつこ

添 手に職をつける趣味ならあふれな

原 荒磯に趣味で釣り上げ又おいで 勝治

添 荒磯に釣っては逃がす釣天狗

原 ストレスの隠れ家にする趣味の道 (株) 玲子

添 ストレスの隠れ家です趣味の会

【少しの修正で良くなる句】

原 預貯金が趣味というなよ寂しいな 辰夫

添預貯金が趣味というのも寂しいな
 原趣味なのにストレスになる稽古ごと 純子
 添趣味なのにストレスたまる稽古ごと
 原お隣りはバチンコ好きと風に聞く(前)洋子
 添お隣もバチンコ好きと風に聞く
 原趣味多いあれこれではみなはんば(山)久子
 添趣味多くあれこれしてもみな半端
 原趣味多くどれも半端だ絞り込む 孝明
 添趣味多くどれも半端で物足りぬ
 原投句趣味二円切手を買ひ溜める 和之
 添投句が趣味二円切手を買ひ溜める
 原趣味ピアノ恥すかしそうに言う男子 武人
 添趣味はピアノ恥すかしそうに男の子
 原褒められ趣味のネクタイ締め直す 義雄
 添褒められ趣味のネクタイ締め直す
 原断捨離が趣味の家の内がオレも捨て(中) 修
 添断捨離が趣味の家の内は僕も捨て
 原趣味・実益兼ねて老後が忙しい 亜希子
 添趣味と実益兼ねて老後が忙しい
 原趣味実益兼ねて野菜を作ってる こそえ
 添趣味と実益兼ねて野菜を作ってる
 原エスカレーターする趣味に家省みず のり子
 添エスカレーターする趣味を顧みず
 原脳元氣足も元氣でできる趣味 開子
 添脳元氣足も元氣でできる趣味

原川柳が趣味で生き甲斐我が縁 英男
 添川柳が趣味で生き甲斐友も増え
 原入選で趣味の絵画が風見鶏 ミヨノ
 添入選で趣味の絵画が知れ渡る
 原定年後趣味が本業助かった 喬
 添定年後趣味が高じて本業に
 原完璧に趣味のレベルを越えてます 忠士
 添完璧に趣味のレベルを超えてます
 原趣味ですと言いつつ並を越えてはる 孔一
 添趣味ですと言いつつ並を超えてはる
 原趣味の域越えて苦しみ始まった 文香
 添趣味の域越えて苦しみ始まった
 【入選句】
 無趣味ではないぞ僕には五七五 秋星
 無趣味です人畜無害善なし 紀雄
 友達と趣味の話で盛り上がる 満知子
 カラオケで人の輪繋ぐボランティア 絹枝
 趣味の会好きな人いていそいそと 加代
 年毎に趣味もだんだん腰折れる 信二
 また一つ趣味を加えて生き生きと 忠貞
 趣味があり年金があり老い楽し 狸月
 趣味も金も無いが暇だけたとある 凱柳
 川柳が趣味と言えり目指してる 天翔
 趣味の数両手ひろげて自慢する 治子
 精一杯の趣味が集まる文化展(高)道子

あれこれと趣味を広げて成就せず たけ代
 カラオケのマイクを握るだけの趣味(畑)節子
 趣味一つ持たない妻の愚痴を聞く ひとし
 趣味一つやつと見つけて和む日々 回春子
 はまり込み生きるヒントを探す旅(斎)宏子
 離婚危機救ってくれた趣味の会 志津子
 良い趣味と褒められ腕を揮う鍋 心咲
 趣味の庭自画自賛して水呉れる 洋一
 年金と相談しつつするゴルフ 利子
 年金になつてでなくなった趣味(村)恵子
 【佳句】
 温もりが欲しく出かける趣味の会 野口 晶子
 川柳と二人三脚つづく道 楠原 富香
 瀟洒な館季節の花が咲き匂う 足立つ な子
 数々の趣味で仲間の輪をつなぐ 富永 恭子
 趣味一つ私の生きる道しるべ 山根 弘子
 【今月の推せん句】
 お互いの趣味で花咲く嫁姑 石田ひろ子
 温かい家族が想像され嬉しくなります。
 同じ趣味もつてころが通い合う 北原 昭枝
 腹を割って話が出来るそうですね
 趣味一つこんなに元氣くれるとは 大島 友子
 驚くほど力が湧いてくるものです。
 【私の句】
 わたくしの生き様かえた趣味一つ

川柳塔鑑賞

同人吟 三 島 淞 丘

— 6月号から

哀しみを踏み台にする川の幅

深々と今朝は会いたくない帽子

川 本 畔

哀しみを逆手にとつて、生きる糧とする女の気概が感じられる。結句の「川の幅」はその気概の強さを具象化している。二句目は、女性の心理を帽子という小道具を使って巧みに表現された。二句とも現代川柳の句風に裏打ちされた句である。

うす闇の世相笑いの種探す

山 本 希久子

今の世の中は不穏な事が多すぎる。真つ暗闇とは言わないが、正に「うす闇の世相」が最も適切な表現である。薄闇だからまだ笑える種も少しは落ちている。

投げ返す言葉の棘は抜いてある

小 川 てるみ

時どきは言い合いもして絆は保たれる。ただし口から出た言葉は元に戻せない。棘を抜いた言葉なら丸く収まるだろう。

万華鏡くるりと春は満開に

木 本 朱 夏

今まさに爛漫の花に囲まれて幸せいばいな季節。万華鏡を一回転させるとぱつと開く花のように、身も心も開放的になる。一読して爽やかになる句である。

今更といった手つきで酌される

稲 見 則 彦

たまには女房に「一杯注いでくれ」と頼んでみる。奥さんは「今さら何よ」と言いたいのを我慢しながら優しく注いでくれる。だが、その手つきには心がありありと出ている。見付けと表現が面白い。

生きているだけで汚れている地球

早 川 遡 行

何も意識して汚れている訳ではないが、私達は自然を壊し、水を汚し、空気を汚して生きている。それを日頃意識していないのが恐ろしい。地球を汚さないように生きる事は人間の最大の課題であろう。

らしさまで無くすと人が消えていく

坂 裕 之

人は皆それぞれの個性を持って生まれ、その上に育った環境や職業によって、「その人らしさ」が身についてくる。憧れや理想を追うのもよいが「自分らしさ」を失えばその人の面影さえ消えてしまう。

風の囁き生きるべし生きるべし

津 村 志 華 子

七五五音の破調と「生きるべし」の繰り返しに面白みがある。風の囁きは時々的心境によって違った聞こえ方がするもの。今の作者には「とにかく強く生きなさい」と風が押し付けてくれている。

ネジ一本緩いくらいが生き易い

内 藤 憲 彦

ぎくしゃくした今の世の中を窮屈に生きている面白くない。せめて自分の心のネジを少しでも緩めて気楽に生きよう。

友の数減るから禁酒やメにした

横 山 捷 也

一読して「分かる」と膝を叩いた。折角禁酒の決意をしたが付き合いが悪いと悪評。やっぱり禁酒は止めにした。酒好きの言い訳かな。ユーモラスな句である。

仮説から見えぬ明日を追い求め

島田 誠 一

東北の復興無くして日本の再生はない、と言われるが、まだ多くの被災者が仮設住宅の暮らしを余儀なくされている。先が見えない生活、それでも明日を信じて強く生きておられる姿に頭が下がる。

ちぐはぐな意見まとめて串刺しに

富田 美義

人の考えは十人十色、一つに纏めるのは大変だ。多数決で決めるのも面白くない。最後は議長の「エイ、ヤ」で決着。何といつても「串刺しに」の結句が痛快。

どう生きようと一生一度一人分

米澤 俣子

「一生一度一人分」の軽快なリズムと句全体の歯切れの良さに感服。人生は一度だけ、どう欲張ってみても一人分しか生きられぬ。達観した人生観の句である。

忘れたらあかん二円を先に貼る

山口 美穂

消費税の増税で八十円切手も五十円切手も手持ちがある限り二円切手を追加しなければならぬ。「忘れたらあかん」の詠み出しに川柳の軽みと滑稽さがある。

深海魚何だなんだと浮上する

山崎 武彦

最近彼方此方の海で深海魚が浮上している。原因は諸説あるが、この句は深海魚の方が「人間社会は一体何が起こつてんだ」と視察の為に浮上しているのだ、と詠んだ。川柳味のある面白い句である。

妥協して生きねば歩く道がない

山田 婦美子

意に添わぬ事が多い世の中。だからと言つて怒つてばかりでは生きられない。諦めるのではなく何処かに妥協点を見つければ穏やかに暮らしてゆく道もある。

ぼしやつたら虹の麓をまた探す

大内 朝子

夢は破れる為にあるのかも知れない。破れたら根気よく次の夢を探す。「ぼしやつたら」の語句と「虹の麓をまた探す」の詩的なフレーズの対象が面白い。

聞き流す術も覚えたいイヤリング

坊農 柳弘

一読して大人の句だと感服した。聞き流すのは何であろうと、大抵の事はもう心にとめないという達観した女性の心情をイヤリングという比喻を使って詠んだ。

深層心理思わぬ人に夢で逢う

岩本 美智子

普段は全く意識していない人が、ある夜突然夢に現れる。誰もが一度は経験した事があるだろう。心のどこかに奥深く潜んでいる意識、正に深層心理だ。四字熟語を使った見付けの面白い句である。

水がめの底でゆっくり砂を吐く

古久保 和子

他人には侵されない暗くて静かな水瓶の底、最高に心安らぐ場所である。そこでゆっくりと疲れを癒し、心に溜まった鬱憤も吐き出すのだ。「水がめの底」「砂」という比喻を使つた心象句である。

遊びたい盛りへ塾が邪魔をする

北山 絹子

ユーモラスな句である。「塾通い遊び心が邪魔をする」なら当たり前。遊び盛りの子供にとつて塾は憎い邪魔者なのだ。

マクベスのとなりアトムも眠る棚

石橋 芳山

十七世紀に生まれた野心多き武将マクベスと二十一世紀に科学の粋を集めて生まれた鉄腕アトム、二人の英雄を棚で眠らせる。英雄への憧れが英雄を生むのだ。

水煙抄鑑賞

— 6月号から

松原寿子

幸せは後でじんわり効いてくる

川島良子

十七文字は心の糧の凝縮であり、人生の物語の中でいかに生きて来たか深く浅く読み取らねばならない。受け止め方は人それぞれですが、一句の中におさまり切れない幸せな心のあり方の大切さを、しみじみと気づかされ共感を誘う。

正面を見つめた沈黙の抗議

鴨田昭紀

何事にも動じない固い決心が見受けられる。抗議の鋒先は国政なのか社会に対してなのかはともかくも、ここが意地の見せどころなのでしょう。日頃蓄積された鬱憤が、読む人の心にも力強く訴える波動となって伝わってくるようです。

「沈黙の抗議」が新たな転機になる事を望んでいます。

守りたいものが私をすり抜ける

真島久美子

何を守ろうとしているのか具体的にはわからないが、大切なものであることは窺える。人間のぎりぎりの瞬間なのだろうが、物事を冷静に捉えている。「私をすり抜ける」と言うことは、くい止める事が出来ないと理解したい。目に見えぬ放射能性物質や自然災害など住みにくい世の中になっている。それにしても人を引きつける作品を発表される久美子さん、このまま個性を伸ばして頂きたい。

気紛れに今日のコーヒー香り立つ

福呂秀子

何げない一日のひとコマだったのでしようか。コーヒーの香りがホットな雰囲気を出し出し安らぎを覚える。

郵便に半端な切手貼る不満

渡邊修

年金の選択制度が改革されようとしている昨今、年金は減らされその上八パーセントの消費税が庶民の生活を直撃している。僅かなようでも総てに関わる事なので負担は大きい。これでは愚痴のひとつ

つも零したくなる気持が痛い程わかる。

こだわらず無理せず楽に生きている

大島友子

純粹に詠まれている。一区切りついた所で、ゆったりと精一杯生き抜こうとする心構えが見て取れる。羨ましいとも思う句の味わいを深くしている。

肩凝って心に隙を開けてみる

片岡富子

現代社会や日常生活の中で、人として気を遣ったり顔色を読みながらコミュニケーションを取るが多々ある。「心に隙を開けてみる」とは、自分自身の心をほぐす合鍵なのでしょう。リラククスが一番、その場の雰囲気や表現のコツには脱帽。

文明の進歩人間幸せか

増田わこう

振り返ると高層ビル、道路、橋等すべて立派な構造物ばかりである。スイッチ一つで、豊かな生活が出来るとは言え平和と自由のはざまで生計を脅かされていることも事実。心のよりどころをこの作品を通して訴えている。



高瀬 霜石の津軽おもしろ景色

奇数月の連載になります。

もう一人の天才少女の巻

(22)

川柳マガジンに「川柳作家は中学生」なる連載を持つ倉間しおりちゃんは、この春、高校生になり、タイトルも「川柳作家は高校生」に変わった。真にめでたい。

彼女は「川柳研究」主幹・津田暹さんのお孫さんだということは、川柳人であれば先刻承知のはず。

実は、青森県にも、彼女に勝るとも劣らない天才川柳少女がいるのだ。

僕は、青森県最大の新聞社「東奥日報」で募集する「高校生川柳」の選者を毎年おおせつかっているが、なんとそこで、3年連続「天」を勝ち取った娘がいるのだ。

その句と、ついでに僕の評も紹介したい。

無限大こんな小さな手の力

青森南1年 菊地真緒子

【評】スケールの大きい句。「小さな手」と「無限大」の対比がピタリ決まった。

人生を決める消しゴム転がった

青森南2年 菊地真緒子

【評】作者のおおらかさとユーモアに脱帽だ。本当に人生を決めるサイコロ（消しゴム）であるはずもないのだが、本人は大真面目だからおかしい。

扇風機お前も自問自答だな

青森南3年 菊地真緒子

【評】世は省エネ時代。押し入れから引っぱり出され、せつせと働く扇風機。よく見れば、苦しそうに首を振っているようでもある。扇風機に同情する優しい心根の作者。

結構な数の応募がある。当然のことながら無記名だ。選者であれば誰しも、沢山の秀句から悩みに悩み、天地人を選ぶ。この娘の「3年連続天位」という快挙は、確率的にいつでも奇跡に近いのではないだろうか。

彼女は、新聞のインタビューにこう答えている。

「高校3年の夏。受験や部活や家族……。いろんなことに苦しくなつて作れなくなつた。ぐるぐる堂々巡りをしていた時に、扇風機が目に入った。この状況を打ち破るためにも、句を作らなければと思った。上出来ではなかったけれど天位を頂けた。川柳を通して気持ちが整理できました。川柳に助けられました。」

部屋で静かに句を作っているお母さんの姿を見て興味を持ったという。彼女の句の最初の読者であり、批評家でもあり、自身も常に真剣に川柳に立ち向っているそのお母さんは「川柳ゼミ 青い実の会」所属の菊地京（けい）さん。こうしてみると、やっぱり血なのだろうなあ。

彼女は、この春、めでたく大学生になった。

クレヨンを握つて青い森を出る

真緒子

ふるさとに感謝の一句を置き、彼女は果立つて行つた。

本社 六月句会

◇六月六日(金) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大 阪

梅雨入りした関西、今にも降り出しそうな雲に覆われた六日、百十九名(投句八名)の参加で六月句会は開催。演壇に飾られた色とりどりの花は、あまのとりな氏から先月に続いてのプレゼントで会場を和ませた。

初出席は、桑原すす代(大阪市) 美馬りゅうこ(吹田市) 磯島福貴子(大阪市) 宇都満知子(大阪市) の四氏。

今月のお話は、川端一歩氏。題は菊沢小松園氏の「鬼百句」。鬼の題を選んだ理由や数々のエッセイを紹介。川柳塔誌を調べているうち、東野大八著「路郎物語」、巻頭言から学ぶ事、師に対する敬慕の念など三つの感動を得た話された。

大阪の住所は橋の名で覚え
大阪の橋の名を全て知っている小松園氏であつたとか・・・(まつお)

月間賞は、立蔵信子さん(大阪市)
(司会) 蕉子・善純(協賛) 扶美代・まつお
(受付) 茂・紀子(清記) 勝弘

席題「種」

柿花 和夫選

種で買い結局高く付く野菜
大地との絆を信じ種を播く
種袋振ると未来の音がする
ふわふわと噂の種が風に舞う
種初まで奪いつくした大津波
バックパッカー友好の種をまく
種明かしすれば空気が不味くなる
手をかけた土から種の笑い声
世渡りの上手な風に乗る綿毛
失敗を笑いの種にする自虐
改憲に種も仕掛けもあるらしい
種とばし勢いづいてとぶ入れ歯
家柄は由緒正しい雑種です
トラフルの種撒くこともあるおべんちゃら
幸せの種は突然開花する
種明かしすればオーラが消えていた
絶滅危惧種に選ばれました私
種馬は羨ましくも哀れなり
悩みの種はないのかいつも高いびき
すっぴんで種も仕掛けも無い暮し
言い訳の種にはせぬぞ好きな酒
話のタネ探す新聞読みあさる
発泡酒だって酔えます柿の種
お開きが咲いた話の種を刈る

弘光 哲子 敏治 郁夫 寿之 武彦 恵修 恭昌 眞澄 楓楽 奏子 朱夏 いさお かずお 朝子 堅坊 進一 誠一

新細胞種も明かさずどこえやら
無尽蔵に話の種がある姉妹
哀しみの種にもほら花が咲く
落丁も乱丁もありこぼれ種
三冠馬人もうらやむ定年後
悩みの種からの発芽は頼もしい
種明かしする前おじやまコーシヤル
アルバムに未練の火種まだ残す
耳タンポ噂の種に水をやる
御見舞いに笑いの種をポケットに
雨続き柿の種しかアテがない
生きたくて虚飾の種を見極める
夫婦喧嘩 種はわたしが何時も蒔く
佳
苦勞の種こんなもに持っていたあなた
喜寿の坂へもしもの種を播いておく
梅千の種噛み割った歯は何処
へそくりの種明かしなどできません
蒲公英の旅見届けて雨が降る
人
首輪などいらぬ俺様雑種犬
地
中国と西瓜の種の飛ばし合い
天
朝顔が咲いているババに教えたろ
軸
英霊も嘆く紛争の種蒔き
直樹 まつお すゞ代 保州 修 矢五月 篤好 寿之 宏造 克己 柳弘 光久 理恵 扶美代 淳司 (矢)五月 蘭幸 隆彦 完司 とーな

兼題「拍手」

牧浦

完次選

正論は拍手少ない方にある
耳奥に拍手刻んで舞台降り
本懐を大國主も大拍手
手拍子に乗って祭がやってくる
お経より拍手を僕のお葬式
化けかたの下手な狸にハイ拍手
うっかりと拍手傷つく人もいる
万雷の拍手のなかの塩コショウ
喝采をあびると豚も木に登る
万雷の拍手聞いている馬の脚
拍手する役目を担う祝賀会
心血の努力へ天も拍手する
拍手は下から石段が長い
声の欄心が通い拍手する
お望みとあらばやんやと手を叩く
ノーと云う裁判官に沸く拍手
転けた子のゴールにおくる大拍手
千の手で打ち鳴らしたいアンコール
定年の拍手は生きてきた宝
明け方に拍手が沸いた呱呱の声
不謹慎な拍手を心の中でする
手品して園児の拍手もろてくる
駆け出して受けた拍手にある決意
拍手喝采茄子には茄子の花盛り
退職日一樣拍手されました

准一 雅明 妙子 美智子 完司 真理子 弥生 富美子 克己 六点 堅坊 見清 一文 眞澄 直樹 武臣 よしみ 美花 久美子 求芽 耕治 茂 朱夏 宏造

拍手なら出来まうまうたつてや
拍手を打つ真似をするもみじの手
ナイスショットテレビに拍手しています
義理でするなんと響きのない拍手
もう元に戻れぬ拍手聞く背中
しんがりの象は拍手をひっそらい
血の巡りよくなる拍手惜しまない
ノーベル賞候補の九条に拍手
裏庭で熟れたトマトに拍手する
まごころで介護の嫁が来た拍手
拍手もらつた日から重たい荷を背負う
全員が一致気持ちの好い拍手
佳
闘わぬ者には聴こえない拍手
拍手には程遠く居て下足番
百歳に鬼もえんまも大拍手
拍手したその手で握手ノーサイド
大願に拍手気前良く追加
人
拍手して迎えてやりましょう螢
地
叱らずにほめて拍手で包みこむ
天
それからを拍手してから考える
軸
一寸した拍手に落ちた目の鱗

月子 恭昌 美智代 宏造 すゞ代 瑠美子 天笑 見清 完司 弥生 楓楽 昌代 武彦 柳弘 柳ふりこ とーな 淳司 蘭幸 日の出 義

兼題「備える」

藤井

則彦選

骨壺にちゃんと薬は入れてある
へそくりと書けず予備費にする家計
8バーはわずかな備えまで驚る
備えても不安の去らぬ核利用
迷子札これで安心おじいちゃん
足踏みを少しダツシユを視野に置く
白旗を有事に備え持つている
防空壕掘らんでもよい有難さ
閻魔さんに負けないだけの舌の数
追及に備え確認し合うメモ
傘は薬は朝の玄関妻の声
皮下脂肪風邪の予防に備えてる
防毒マスク嫁も姑も持つていた
やもめに備えお世辞と笑顔必須です
別嬪に生まれ備えのない砂漠
親のスネ見ながら拳式準備中
戦中派備えのくせが抜けません
俺も武士絹の下着はいつも白
晩節に備えひもとく歎異抄
知恵器量備わりすぎかまだ一人
風格も備わり妻は揺るぎない
ライバルの死角で牙を研いでいる
へそくりを備え六法練っている
妻の予備だけは置かないほうがいい
防犯へ亡夫のパンツ混せて干す

キヨミ 遠野 一歩 黒兎 としお (矢)五月 恭昌 天笑 眞澄 見清 美津子 敏治 富美子 宏子 弥生 篤 妙子 直樹 楓楽 裕之 まつお 誠一 恭昌 理恵 見清

地震にも敢えて備えぬ天邪鬼
才色兼備神のいたずら依怙蟲眞

迷子札よとケータイを持たされる

辞世の句は用意してます花吹雪

八方へ備える多面体の美女

東南海どう備えたらええのやろ

明日への備えにまずは米を研ぐ

厳冬に備えて溜める皮下脂肪

実印を彫って備えている別居

宝くじ当たった時に備えてる

ベビー服買い備えたが嫁が来ぬ

世を渡る愛想笑いを身につける

終活に備え喜劇に幕を引く

迷ったら転がす賽を備え持つ

佳

胎児にはショパン聞かせる昼さがり

成仏に朱印の白衣備えてる

万全の形に靴を揃えてる

実篤の額寝室の守り神

死神に備えからだを練っている

いさお

耕治

朱夏

勝弘

能子

いさお

岳人

まつお

郁夫

富子

和子

好

隆彦

紀子

惠

五月

唯教

兼題「終」

江見 見清選

気晴らしに終のすみかの床磨く

今朝もまた今日が終わりと眼が覚める

エンドレステープに妻の舌が乗る

サスペンス風の岬へ来て終る

終電におくれ二人はこうなった

飯の世の終の続きをこ存じか

九条があつての日本ですこしこ

天寿百歳お見事ですとご焼香

終ろうというひと言がきり出せぬ

ハッピーエンド他人に話せば座が白む

しまいまで軒もかかず聞いてくれ

終章の少し手前にある動悸

原発が世界の終り知っている

終章はわたし一人のファンファーレ

終のときは河内音頭を唄わんか

終りのない楽しみ知ったから死ねぬ

子に絵本読み終わるまで寝てくれず

雅明

幸泉

完次

耕治

ばっは

たもつ

美津子

五月

修

宏子

天笑

柳弘

一文

能子

義子

美花

夢

生涯に一度弔辞で誉められる

終の恋日フレッシュな夢刻む

終章もやっぱり居たい人の中

有終の美鬼が初めてみせた笑み

アホなこと考え一日が終る

望郷の海に散骨希望です

終りまで聞かず怒らんといてんか

終焉が見えないためにケチでいる

皿一枚割って終了妻の乱

終章はピアニッシモで消えていく

女を終わって人間終らない

精一杯生きる秒針止まるまで

佳

ぼつくりで終わる人生ワッハッハ

エンマには根が尽きたと言ひ張ろう

終止沈黙私の色が落ちぬよう

あと少しも少し傍にいたかった

日本の技終わりの礼が美しい

セツ子

紀乃

大子

理恵

義

奏子

玄也

堅坊

隆彦

朱夏

希久子

進

敏治

完次

わこ

すゞ代

一歩

兼題「なんで」

米田 恭昌選

兼題「強引」

小島 蘭幸選

おじいちゃんんで煙を吸うてるの 哲男

下手やのになんで川柳止められぬ 堅坊

母さんの奥の手でしたチ・チ・キ・ト・ク (矢)五月

軽量力士巨体吊り出すメカリズム 肇

あつさりと妻があやまるおかしいぞ ぱっは

強引な正義闘している戦火 哲男

三歳の「なんで」を注意深く聞く いさお

賑やかでもなんで眠れるバスツアー 忠子

返事はイエスのみで問う肩たたき 遠野

なんでなんでと二歳児の好奇心 セツ子

なんでやるつっこみ役が考える (久)千代

JA解体して強引にT P P セツ子

子のもので探求心の芽を伸ばす 保子

混んでるのに荷物チャッカリ座ってる 眞澄

強引にいけと母親からの檄 耕治

どうしても解せぬ戦争するなんて 完司

心当たり無いが絡んで来るお酒 弘光

花束の中にかくしている強氣 美智代

中国はなんであんなに威張るんや 靖博

なんでやる飲めば宿無し犬になる 完司

返信用はがきでデート申し込む 弘光

隣国はなんで日本を目の仇 希久子

美しい唇なんで嘘をつく 蕉子

強引に消えたが肚は座ってる キヨミ

小保方さんばかりがなんで責められ 義次

臨終に泣いてお腹がグーと鳴る 眞澄

強引な伸人さんに今感謝 天笑

バストウエストヒップに疑問符が残る 誠一

人間の脆さを包み込む なんて 柳弘

生かされる強引なまでの点滴 万こ

体重計なんでこうまでか憎めない 加お里

なんでという顔をしている冷凍魚 義次

強引にのらず私の平泳ぎ 万こ

この世にはなんでやねんが多すぎる たもつ

津波跡もなんを抱いたまま 朝子

雁字搦めに結んですぐに解けない 靖鬼

なんですか人前で恥をかかせて 勝弘

なんででんで未知を拓いていく幼児 敏治

強引だったけど幸せにしてくれた 瑠美子

移り気な紫陽花に訊くなんでやね 朱夏

一切空なんで心がゆれ動く 唯教

一押し二押し三押し想い届くまで 美津子

答えたくない事ばかり聞くなんで 正雄

人 善純

髪染めて少し強氣でゆく余生 好

何でやを父の背中が拒絶する 将文

なんでから始まる少年の壮志 善純

おいでおいでとゆるキャラに引つ張られ 扶美代

なんでこの人と結婚したんやろ 則彦

地 すゞ代

強引が私を嵌めていくドラマ 希久子

ボク抜きで家の大事が決められる かずお

天 富子

陣取りゲーム海に線引く自己主張 扶美代

論吉様なんで私を遠ざける いさお

三歳のなんでに翼生えてくる 富子

強引に口説かれたのは思い込み 蕉子

欲のない人ほど貯まるんでやろ 紀乃

軸 富子

押しに一手に負けたやさしい角隠し 蕉子

何でやと必ず一度つき返す (安)和夫

三歳でかかとロタンポーズで夜が白む 富子

強引に口説かれたのは思い込み 蕉子

顕微鏡のぞくんでを知らぬために 宏造

なんでかかとロタンポーズで夜が白む 富子

強引に口説かれたのは思い込み 蕉子

多過ぎるなんと思う事件事故 善純

なんでかかとロタンポーズで夜が白む 富子

強引に口説かれたのは思い込み 蕉子

雨天決行でるる坊主うなだれる
 会費取られ六甲おろし歌わされ
 皺に染み白髪が不法占拠する
 強引に抜いたら土台ついてきた
 強引に車線変更する総理
 人事権がざして部下を黙らせる
 強引なあなた母の前は子猫
 強引を通す財力持ったはる
 海に空に五星紅旗の覇権主義
 強引な人だが組織守り抜く
 今すぐに攫っていつて 意気地なし
 力尽くで口説いた妻の言うがまま

朱夏 保州 富美子 靖鬼 堅坊 玄也 すみ子 りゆうこ 淳司 裕之 とーな 進

逃げ腰をとつ捕まえて三次会
 拉致されて田園調布に住んでいる
 百歳を生きる覚悟でローン組む
 強引な人の後に立っている
 憲法の骨まで削りだした音

完司 岳人 武彦 義 真理子 いさお 弘光

強引に奪って欲しかったあの日
 五千年前からうちの海と言う

天 地 人 軸

あの夏の花火を現実に戻す
 立蔵 信子

強引でやさしいあなたってなんだ

句会 燦 燦

5月句会を読む

筒 一 上 井

からからとしくしくおもしろいお酒

とーな

むかしのコトバでは、笑い上戸に泣き上戸。理性の呪縛から
 酒精が解き放つてくれるのだ。「抱きつき上戸」も増えている。
 勢いに任せて、酔い覚めに慰謝料の請求が来ませぬように。

からからの骨も肥やしの樹木葬

直 樹

樹木葬墓地では墓標代わりにハナミズキ、サルスベリなどの
 低木が植えられる。枇杷や柘榴の樹は無いという。たわわに実つ
 た時どうするのが難しいのだ。

返り血を浴びない位置で吠えておく

楓 楽

あまり遠ければ吠え声は届かない。近すぎれば動脈血が飛ん
 で来る。そのX点の選択こそが人生だ。

道すがら片手で拝む事故現場

恭 昌

他人さまが死んだだけなので、わざわざ花束など買うてその
 辺に立て掛けない。ぬいぐるみなども供えない。投げキスをす
 るように片手拝みで通るのみ。

ああ夫婦不慮の事故でも血はやれぬ

一 歩

ずっと昔は金に困って血を売った。その後は赤十字社の献血
 に積極的に参加した。今は寄る年波、最愛の妻に捧げる血すら
 残っていないのだ。ドラキュラさえ素通りして行つた。

返してと借金取りに拝まれる

としお

千円握らせたのに「あと2万円やろー」と泣いて追つて来る。
 磯野家の窓から漏れてくる愉快

六 点

長谷川町子氏は22年前に亡くなった。サザエさん家は健在。
 アイリングびしつと決めて姥盛り

義

背筋もスツと伸びている。嘗て宝塚星組の男役だったとか。

ふせゆき

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

手で開いた残り火とろろ消さぬよう 篤子
まどろみの初夏新妻が麗しい 哲矢
とろろと走る嵐電花ぐぐり 妙子
ジャムを煮るラジオ明いニュース告げ 直子
とろろでいいよしっかり根を張ろう(矢) 五月子
復興へとろりとろりは許さない 和代
とろろと成り行きのまま生きている 桃花
とろろと夢で逢えそう御命日 半銭
懸命に生きんとろろ命の灯 美龍
被災地が苛立つ国的はずれ 昭
緑があり友に恵まれうれし泣き 廣子
緑探りインターネットでゴールイン 伸子
美しく別れたなんてショックです 日の出
緑薄い魚やつた釣りそこね 重信
陰と陽背中合わせの緑もある 志津子
参観日来たよウインク子に合図 定子
ウインクが心ゆさぶる風の向き 寿子

幼児はウインク出来ず片目に手

目で合図指を丸めて友誘う

葉が揺れてウインクしてる木漏れ日よ

ウインクで世界平和が叶うなら

したこともされたこともないウインク

選り好みなんて出来ない崖つぶち

選ぶなら美人の方が超お得

何するも縁起かついでめんどくさ

古の縁につられてロマン旅

こうなるも縁と嘯く浮気虫

縁切った故郷月仰ぐたびに

母ちゃんはいつもちいさい方選ぶ

この道を選んだかぎり振り向かぬ

楽な道選り続けて残る悔い

厄の日に選んだクジが当たり

あなたには選ぶ権利はありません

句と歌がやさしく脳を活性化

若返る万能細胞あればいい

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

杖持ってゆつくり登る普明閣

散歩道塩浜通りと名付けてる

満開の桜が的場海光る

お帰りと駅の川柳癒される

古い屋根ばかり普明閣から見える

山陽も来られたらうかこの雁木

一言の告白迷う橋がある

陽は西に告白タイムかもしれぬ

福貴子

(奥)五月

満知子

舞夢

勝弘

萌

啓次

美世子

公平

克博

ゆみ子

一步

安代

昌紀

紀子

舞蹴

安昭

順子

告白を迷っています春霞

告白にドキッとしたよ春の風

告白をすればあなたが困ります

お育ちか番茶のむ掌のしなやかさ

しなやかなことが愛を紡ぎだす

おんなの凄さ甘さ優しさしなやかさ

柔軟に避ける世間の水たまり

しなやかに猫の欠伸はストレッチ

しなやかに泳いで妻は募る

しなやかな動きロボットにも負ける

哀しみをしなやかにして遺影笑む

テレパシー会いたい友の声が聞け

満開のさくらの下に母がいる

大丈夫お大師さまを懐に

喜怒哀楽話して尽きぬ古き友

楽しみをいつも探している帽子

悲しみはそろりと入る火消壺

鯉のぼり悠々泳ぐ空は青

川柳塔まつえ吟社(鳥取)相見

柳歩報

持ち帰るために笑顔を包んでる

いい顔で届けと切手嘗めて貼る

照明をひとつ落して見た素顔

褒められてはるこぶ顔は齡いくつ

褒めてやる一歳半も顔ゆるむ

出雲弁話に花がいい笑顔

過去わかる顔にでている品の良さ

生き抜いた証と思うでかい顔

房子

千代美

白狐

栄恵

寛

敬子

昭紀

輝恵

幸子

淑子

静風

歩美

厚子

あゆみ

貞子

栄香

比呂子

史子

柳歩報

芳山

たけし

草庵

幸代

哲子

ちえこ

輝山

久絵

逆らつてみても相手は神さまだ
真実と思つた嘘に血逆流

アベノミクス逆らう事もままならず
逆上り出来た何でも出来そうだ

逆心は無いが五月の空が澄む
硬いこと言わないでよとせびられる

心が硬い冷たい風に逢つたのね
硬い石いつも波風たてている

あなたにも硬い文章しか書けぬ
冷凍パン一氣に焼けてふつくらと

ダイエツト減つた笑顔が計り台
親が逝き減つてしまつた里帰り

体重を減らす減らすと二日酔い
減る銭が神になつてゐる風な船

笑いすぎカロリー消費また笑う
さとう水飲んで一人のお立ち台

カップ二個ほんのり湯気も絡み合う
お互いに飲んで飲まれて丸裸

飲めるならととん飲んでみたかつた
田舎者スカイツリーに息を飲む

コーヒはモカで昔を飲んでゐる
へべれけに酔うて天地を裏返す

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一 粹報

とろいた夢が自然発火をしてしまい

地獄耳とろいたはずの過去にふれ

婆ちゃん笑顔スマホでみなに逢い

ばやばやとして不意打ちを食わされる

桂子

左余

幸子

久枝

知恵子

町紅

文子

孝亮

柳歩

注湖

弘充

幹啓

とも子

青帆

寿代

やんわりと急所はずして無二の友
地獄でもいいのよついて行きたいの

忘れるからあまりとろかぬことにする
春風に負けるものかと鯉のぼり

不意打ちを食らうようではまだ未熟
いいのよと笑顔が返る春の陽に

カーナビ外しスマホで旅をしています
おひなさまところき忘れてまだ独り

不意打ちの効果鼠が二三匹
お爺ちゃんいいのよわしが看てあげる

スマホ持つ何でもアプリ辞書持たず
伸ばしたり縮めたりしてスマホ見る

好きにしていいいのよ君について行く
千本の桜に映える夢を織り

正直が過ぎて出世の邪魔になる
無いものはないの何度とも言わせない

歩数計ついたスマホに励まされ
定退のその日離婚を告げられる

北の不意打ちイージス艦が許さない
不意打ちにやつて来たのは夫の死だ

不意打ちのミサイル弾は込めていた
スマホ流行り手書きレターが懐かしい

乱気流くぐる自信も出来ました
いいのよと女心の裏表

うわさでもブレイボーイと言われたい
何故だろう妻とお出かけ疲れます

いいのよと言う言葉には裏がある
いくらでもいいのよ募金してほしい

のぞいてもいいのよと言う甘い声

雅女

文香

みゆき

回春子

昌鼓

葛子

房江

あしび

地佳平

蟹郎

圭子

節子

とも湖

清信

凱柳

楽原道夫 選

トコロテンチャンスはいつかやってくる
右向け右はくは正面向いたまま

満腹でうつとり童謡聞いてます
いたずらな風は海から舞い上がる

消しゴムがよくちびるのは私だけ
湖面ではこそこそしてるお月さま

パソコンで桃源郷を検索中
乾杯をしたら別れてくれますか

ぞうさんも長いお鼻で通夜の席
穴の無い男に胡椒かけてやる

とーな 和夫

義 忠昭

青帆

芳光

石花菜

久子

ひとし

ひとし

洋志

佳句地十選

(6月号から)

安土理恵 選

吉報もそうでないのも春の坂
窓全開無料の空気たんと吸う

右向け右はくは正面向いたまま
月が出てゐるわたしも丸くなる

ここはねえ昔ホタルのいた小川
鍵穴にヒタリ填つた今日の運

ご好意に甘えふわふわ生きてます
まだ坂があります杖を贈ります

昨日より遠出したがる三輪車
若さとはまさにリンゴの丸かじり

いさお

芳光

不意打ちでない消費税予告済み
出直しはゼロでもいいの青い空 一行 男 粋

※「とろく」は片付けるの方言。

川柳塔なら 坊農 柳弘報

祭り終え宴は男の見せどころ
いつの日か三途の川の水掬う
蛍光灯の光死語にする
天秤のレベルで美味い母の味
電子音追いまくられる老ひとり
父さんのレベルあがつた目玉焼
パワフルな夢を掬って発芽する
増税にスタート地点掬われる
みのほどもをわきまえ今日の歩を刻む
抱うても俺から逃げる論吉殿
全身に電流カッブルが誕生
サバイバル友に足もと掬われる
隅々まで電気仕掛けの兎小屋
レベルなど言つてはおれぬ頭数
高齢にせがまれ電化台所
華麗なる宴汚職の味がする
届かないレベルではない背伸びする
究極のレベルめざして挑む技
五月病電気ショックを与えねば
電池入れ換え父ちゃん急に甦る
頂点を目指すレベルを磨いてる
幸せや原発ゼロで暮らしてる
ブライドも名誉も捨てた軽い肩

萌子 おたか 博一 喜太郎 郁夫 怜依子 信子 弘風 比呂志 恭昌 将文 貫一 次郎 美智子 修 惠美子 克己 ばっは 柳弘 勝弘 寿之

むずかしい話レベルを探られる
じいちゃんが甲種合格くれた婚
やりとげて夕陽掬っている両手
一つレベル落すと風があたたかい
火の川を越えても風は掬えない
花の宴孤独なわたし脱ぎ捨て
人生はまつり電源切れるまで
スピードのエースに触れて静電気
雑炊を掬って炊き出しの祈り
名工の手触りノギスより確か
困難を越えて成就の披露宴
窓まどのあかり百態あるドラマ

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

喉元を過ぎてまたまた墓穴掘る
切り札を持つてはいるが使わない
一つ一つ前を目指すは生きる糧
電話口今日の元気が声になる
新層部屋の空気が引き締まり
振り向けばロスでなかった悩んだ日
ボス猿の身の引き方に美学見る
美しい風土を神が狙い撃ち
大丈夫五年日記を書き始め
芋粥も菜飯も美味さ歳となり
楽しげな趣味でも裏で汗を拭く
政治家は偉いと思ひ違ひする
髪洗う明日いいことあるように
フアイトフアイトしかと心に言い聞かす

理恵 真理子 富子 辰雄 日の出 洋子 弥生 完次 順啓 良一 朝子 成子 葵 真帆 由里 あゆみ 節子 信子 美恵子 章子 みどり 和之 陽子 敦子 嘉子

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

健康へ再生ボタン押し続け
年賀だけの友当たりくじありがとう
追ってきてくれると信じ家出する
医者通い卒業見込みありません
生き延びる炎ちよろちよるまだ燃える
暗がりの咳しばらくは耳立てる
白い雪地上の毒を飲みこめり
中韓が古い剣を出してくる
嘘をつく度に名水飲みに行く
貧困の剣先だれも振り向かぬ
桜の絵千両花を見て万両
散ることを知った桜も今盛り
廃校舎今も黙ってサクラサク
俵にも桜の咲いた時があり
はらはらと名残り惜しんで桜舞う
ボカボカは桜が咲いた人に降る
打吹の桜に抱かれ安らいで
古桜注射も巻き蘇れ
はしゃいではみたが存在感薄く
大空の風とはしゃいでいる球児
したたかにはしゃいでおいしい酒もつこい
蝶を追う犬のテンション最高潮
五線譜を一人はみ出しはしゃいでる
はしゃいだら御玉杓子の尾が切れた
仏だんがはしゃぐばたもち沈丁花
冬脱いで春を着ました咲きました
恵美子 広子 華蓮 澄子 菜美 安子 和代 みち子 一眸 公弘 照彦 龍枝 幹啓 岳人 美美子 道子 恭子 久芽代 玲坊 善江 紀美恵 公恵 泰山 三津子 くにこ

夢でいいモンローからの投げキッス

野萩

お大事に味気なく言う精算機

幸子

春霞晴れて大山雪景色

豊枝

唇を噛みしめながら老いの坂

節子

迷いから覚めて歩幅が伸びる朝

菜摘

桜咲き吉野の山も春霞

智恵子

唇がへんの字になって泣き始め

紀の治

ご無沙汰の孫の背丈が伸びている

昭枝

天候の良い朝霞む視界ゼロ

静江

唇が微笑む亡母の筑前煮

重忠

伸び伸びになった返事が胃に溜まる

辰治

春霞大山の若葉を包み込む

和代

唇が乾ききるまで立ち話

石花菜

息子には負けぬと無理をする背伸び

富香

一年生はしゃぐ遠足春霞

正光

美しい唇だった遠かった

たけ代

伸びる芽を大きな愛で包み込む

隆昭

昨日から抜き出るために愛ひとつ

千華報

五十年はやき慰めよう持った

芳光

万歳の手天高く突くうれしい日

伊セ

無理ですよ象は窓から入れない

喜八郎

はやいても若い美貌にやもどらない

貴恵

見る聞くが血と肉になる伸び盛り

宏夫

同じ歳くらいの人が席譲る

紅紫朗

はやく度ボタンが一つずつ取れる

悦子

盆梅の瘤にストレス溜つてゐる

義泰

大願の成就石に矢を立てる

和子

はやく節約転木馬軋み出す

重利

世間とや一足すは一は二にならぬ

保州

一筆で青空へ描く夢は大

七朗

消費税上ってばやく空財布

美知江

生きている証ストレス友にする

当代

大空にはかない望み書いてみる

恵子

ぼやいても四月1日から値上げ

清治

こっそりと起きてストレス捨てに行く

絹子

カンパスをはみ出すほどの笑い顔

奏子

神さまがぼやく冷たい雨になる

完司

ストレスがたまつて羽根が開かない

美枝子

母の手の中折り鶴になる折り

慶子

和歌山三幸川柳会

武本

ストレスを吐いて吸い込む空の青

八重子

辛口の男が過去に持つ景色

登子

大声を挙げたところで目が覚める

美子

五分咲きの頃は楽しいことばかり

准一

旅に出てパッチワークに添える色

高鷺

大吉は重たすぎると引き直す

よしこ

咲いて散るだけの命にある迷い

次根

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

静子

大吉を引いて不安になつてくる

ひろ子

咲いて散るだけの命にある迷い

純子

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

千恵

大物になる予感する足の裏

豊羽

咲いて散るだけの命にある迷い

義雄

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

正治

大つぴらにブログに載せてある本音

起世子

一生を造花は咲いたまま果てる

幹子

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

壽峰

卓袱台で大きくなった昭和の子

弘子

一生を造花は咲いたまま果てる

義雄

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

壽之

大きい夢持ったことない現実派

きく

一生を造花は咲いたまま果てる

義雄

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

未知

大仏さん夜には横になつてゐる

昇

一生を造花は咲いたまま果てる

弘子

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

千華

悲しいとき大の男は泣くのです

みね

一生を造花は咲いたまま果てる

鈴枝

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

千華

頭の上で大きな丸を書く知らせ

みつ江

一生を造花は咲いたまま果てる

鈴枝

大風呂敷ひろげ愛に飢えている

千華

大切にされて不満が湧いてくる
言葉より諭吉で感謝示してや
データーの餌食になってゆくヒト科

最愛のパパが残した保険金

悔い残す善かれと付けた維持装置

半ソデに短パン寒の保育園

くる年へ老いの鱗がまた剥がれ

耐えた苦へしあわせくれる福の神

一彩を足して平凡から非凡

森子

川柳大坂

森松まつお報

身辺はみだりに触れぬ竹トシボ

赤とんぼ母を待つてる寂しんぼ

楽しそにとことん値切る浪速のおかん

非正規をとことん増やし明日はなし

とことんの先にもきつとある妥協

奥の手はいざと言うまでとっておく

飲み明かそう言った相手が酔いつぶれ

雑念を払い壇蜜ジツと見る

雑草よキミの悩みは何ですか

辞表抱き雑魚は上司に食い掛かる

店の棚豪華雑誌が見栄を切り

順風に浸り折りが雑になる

雑誌は女の趣味で大笑う

船長がほったらかして真つ先に

こだわりを捨てれば火の中水の中

子を守る平気な顔でいる勇氣

成功者ごんた経験みな多い

平和祈願万部法要阿弥陀經

照月

公平

昌代

柳弘

紀雄

柳明

(五)五月

和

山間の湯里猿鹿お暴れ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

趣味の会連続行脚苦にもせず

連休も有休も無い蟻の列

一〇二歳日野原さんも童話書く

添寝して昨日の続き読む童話

八十歳白雪姫と手をつなぐ

童話集清涼剤に読んできます

忍耐をつむぐ赤毛のアンが好き

イケメンがスマホで遊ぶつまみ食い

ボケツツにビー玉兄ちゃんのお古

要点を簡条書きして誉められる

つまみ食い人妻だけは許さへん

原石をつまみはてさてどう磨く

村興し古老の知恵が生かされる

古傷を酒の肴に夜明けまで

孔孟の教え古くて新しい

白紙にはもう戻れない古い傷

苦い過去隠してくるセピア色

私らは月光飯面が好きだった

尖閣は日本の領土昔から

紅桜となりご近所を春にする

立ち止まり叱られてきた通り抜け

日の丸が払ってくれる寿司次郎

見上げれば葉桜もよし天守閣

オバマさん食べてほしいな廻る寿司

歌ならば珍鳥の海は割れるのに

陰口は出た瞬間に羽根が生え

柳伸

正春

歌留多

修

庸佑

典子

祥昭

柳伸

柳右子

トーナ

忠昭

栄子

克己

恭昌

弘泰

楓楽

いい予感玉子の黄味が二つ出る

第二の地球そんな話もある酒場

来る鳥の唄にあわせて踊る森

病む友をどう励まそう重いペン

七十路をゆく軸足が覚束ぬ

スカーフはバステルカラー春謳歌

人生の轍に耐えた跡がある

川柳さざやま(兵庫)

北澤

柳民報

大根の葉を家計簿が捨てさせず

もう来そうそわそわと待つ古時計

新成人希望に燃えて船出する

人を恋う人が集まる春の酒

経験してみた事だけど口つくむ

私を試す財布が落ちている

春休み子が来る孫来る曾孫来る

経験の剪定終えて生きかえる

家中の笑いが消える認知症

福を呼ぶ黄色い財布で老い守る

経験に人は磨かれ光りゆく

私だけそわそわしてるよい知らせ

連休へ財布も覚悟きめている

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

日本の美外人さんに教えられ

ドライブへ後部座席は盛り上がり

詐欺電話がかつてきても金がない

キャンピング男料理の腕が冴え

持ち寄つておやつタイムのお茶を入れ

かつ子

美千代

百合

まみ子

瀬行

照代

美智子

開子

多美子

真由

美紗子

稠民

久子

美緒子

純子

更紗

一歩

和雄

志華子

いさお

弘子

集一

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

母三粒老母は童女の顔で食べ

溢れ出る涙の奥に見る疑惑

火遊びで浮世と縁を切りました

掛け替えない性格をいとおしむ

あの世まで浮世でいたい夫婦離

苦境さえ乗り切る妻のド根性

右向け右昔来た道この浮世

口出しはしないつもり息遣い

なぜか知ら母の日だけはお母さん

青天へ今日の命を深呼吸

結んでひらいて金運の手言うけれど

幸せを掴んで欲しいもみじの手

投げ捨てた欲がわたしの前歩く

この浮世老後の沙汰も金次第

人間の髪から洩れてくる灯り

あの世まであなたと浮世絵の中に

肝胆の酒で互いを驚掴み

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

国訛り決して恥じることはない

言霊を信じて母にありがとう

一言あればお互い様と言うたのに

験担ぐほかに妙案見当たらず

子に残すことばどれ程あるのやら

ことば数多い男は軽く見え

手帳には思いの丈が満ちている

スマホ使用交わすことばが減るばかり

耀一

高鷺

仁

朋子

清

壽峰

紀雄

惠

安男

賢子

紀乃

賀世子

慶子

常男

寿之

森子

欣之

ほめ言葉人は境界突破する

叱らずに母は涙で子を諭す

担がれて廻され元氣繋いでる

札束を担いで走る選挙カー

担がれておこう優しい嘘だから

片棒を担いだ悔いが国にある

一冊の手帳が握る社の秘密

ため息も時には雄弁言葉より

うっかりと使ったことば傷付ける

ナウい歌老人言葉分らない

たおやかな言葉の裏にある妬心

ことばより誠意見せてと言うてます

お隣の赤ちゃんあやす大阪弁

意味思いつけぬ手帳の走り書き

父ちゃんを担いで走るお母ちゃん

啄木の言葉に酔った頃いとし

何となくリッチな響きおとりよせ

お言葉に甘えましてと長居され

担ぎ手が年毎に減る夏祭り

あの方の一言だからひつかる

創始者は天秤棒と社史にある

煙草やめる練習してる祖父白寿

忠告のことばは刺を抜いてから

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

ひとかどというべし彼はいばらない

ブランドと知らず着ている娘のお古

篤子

日の出

世紀子

朋月

好

誠一

雅明

永久

わこう

健吾

俣子

さくら

月子

玄也

清

素頓馬

澄空

光

憲

みつこ

愿

扶美代

五月

蜂朗

高実

高明

転ぶなよ転ばないでと案じられ

年と共妻はだんだん強くなり

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

謎を抱き姿を見せる深海魚

DHA魚にどんな旁よい

みそ汁の匂い我が家は平和です

巣立った子匂いそのまま置いてゆく

匂い立つ新社会人孫娘

たけのこと木の芽のクラブ春匂う

二度三度指差しチェック火の用心

再婚を見据えて妻が貯めている

一浪し再び受験さくら咲く

手術日がわれの再生記念日に

もう二度と来ない今日の日楽しもう

再会はず還暦の年決めてる

再興へ槌音にぶくしめりがち

再びの出会い昔の顔になる

紙コップ添えて出された2リットル

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

幾千の扉こじ開け君の許

番号の順に刺されている目刺し

母の日はびっくりらせてくれるかな

あの時と同じ足音愛し音

煩惱に番号付けた棒グラフ

順番に終わりたいから焦らない

慌てることない待っている指定席

びっくりの終点までも夢麗ら

松風

節子

順子

信男

久子

正代

勝

黒兎

正子

幹治

長一

郁子

桂子

純子

柳童

美智代

守啓

茶子報

恒

盛桜

鈴

孔美子

すみれ

(西)和子

弘子

富久江

あなたでもカード番号言えませんか

番号札貰ってからの待時間

閉めていても扉の向う日が昇る

成人の日に成人になる誓い

からませて小指が誓う花の下

散歩だけなのにカラスが威嚇する

今生の別れの扉に立ち尽くす

屋根裏とキッチンに居る女王蜂

バラの花七十本のサブライズ

下の名で呼ばれびっくり古希の会

番号と待合室で待つている

宝くじ外れ番号買い漁る

包帯を取ると無いかも指の先

宣誓に左手あげた左利き

大きなあくびにカバがびっくりした

長 柳 会(大阪)

坂上 淳司

今朝食べた品の記憶が無い悩み

老いた今時怪な人になる

STAPがあるかないかの雲隠れ

本心はピエロの胸の奥に秘め

海の上奇怪な事故も人があだ

善人の中で居心地悪きこと

万策が尽きて曇らぬ眼鏡拭く

晴れる日も曇る日もある人生譜

曇り空燕喜び空を切る

親不孝母を背負って知る軽さ

原発が大手を振っている奇怪

先取りの奇怪にうつるニューモード

咲和

実満

照彦

螢

八重

完司

宣子

茶子

みさ子

満

かおる

いさお

美ツ千

蟹郎

小 鹿

淳司

淳司

幸子

修

登美子

克三

ひろこ

弘光

(針)和代

(穂)正子

正博

篤

孝代

欲に負け曇る心に風入れる

照る日曇る日いつも笑顔の妻がいる

ざくざくと論吉手にしてくさい飯

遠い日の曇りガラスに書いた文字

溜め息で鏡が曇る試着室

曇り後晴れを信じて明日へ向く

妻の愚痴軽く流して逃げ支度

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦

大雑把大馬鹿なのか大物か

心にも鍵をかけない寅次郎

大雑把な義母に仕えて助かった

何しても仕事早いが大雑把

大雑把にやった買物又走る

別れた彼女そつばを向いてすたすたと

すたすたと前行く妻を追いかける

すたすたとやって来た春黄砂つれ

すたすたと後姿の寒いこと

すたすたと口コモまだまだ快調だ

モンゴルがきらめいている国技館

ときめきもきらめきも失せ浄土行き

なつメロの「きらめく星座」歌えま

満天のきらめく星座みて夜釣り

きらめいた安香水について行く

今日もまたきらめく為に化粧する

被爆者の語り部残し平和の世

原発の残骸だらけとなる列島

仕舞風呂残り少ない湯に浸かる

ふみ

靖博

明信

芳野

久美子

正美

ともこ

悠子

次男

風露

英子

恭子

紀美恵

由紀子

貞子

醉芙蓉

美ツ千

玲 坊

石花菜

智恵子

けいこ

重 忠

野 蒜

瑞 子

日出子

鬼 一

萩 江

残り香に占領された脳の中心

私だけ残ればえらいことになる

残るほど皿に盛り上げバイキング

きらめきを忘れないよう髭を剃る

城北川柳会(大阪) 近藤

失恋で気力しょぼしょぼ初夏の雨

ここに橋あればいいなと遠まわり

目くばせをすれば君からVサイン

同居中何時も伝えるありがたう

墓掃除月一回の懺悔の日

スニーカーばかり愛用して元氣

花筏見送る橋に置く余命

まばたい前頭葉に風をやる

しょぼしょぼと付いて来たのは影法師

無口だがでんと構えた父の背な

伝えたがあとでアンタが決めること

四捨五入私はいつも四の位置

しょぼしょぼと行く友に声かけられず

たそがれたころに赤い花植える

もどれない時を流れている河童

居酒屋でしょぼくれ同士撒飛ばす

初恋の疼きが残る里の橋

しょぼしょぼの雨が紫陽花引き立てる

メールでは伝わらないとまた電話

ストレスを箒片手に吹っ飛ばす

要らぬ事溜めた脳味噌掃除する

故郷の橋が指切り待っている

高校生最後に親に愛伝え

雄大

康子

枯彦

照彦

正報

義昭

美智子

志幸子

ルイ子

縣 侘

堅 坊

麗

集一

和 夫

満 作

勝 弘

かずお

倫 子

賢 子

朝 子

武 彦

克 己

榮 子

あさ子

秋 香

千恵子

郁 夫

たもつ

猿知恵に悪知恵日本取り囲む

原爆の歴史伝えるあのドーム

万葉集過去のロマンを語り継ぐ

百度石深い祈りに触れた艶

愚痴いわずルンバが今日も掃除する

ノミネット彬多喜二に伝えたい

神さえもきれいにできぬ汚染水

鴨川の床にストレス置いて来る

僕の手に従順でない包丁

メールでは心の髪は伝わらん

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

軽すぎる言葉で落ちる自己嫌悪

数えれば十指に余る軽い罪

地図のないこの世の旅がまだ続く

絵ハガキで見た夕焼けの旅の宿

行く前に地図で楽しむ旅プラン

幽谷の秘湯満月ひとり占め

フルムーン妻をねぎらうプラン練る

過疎の村赤いポストが凜と立ち

終活に思い残さぬ旅に出る

富士山頂神々しさに手を合わす

振り向けば鬼も仏もいる景色

遠き日の景色の中に戻りたい

眼裏に里の棚田の原風景

景色見ず買物ばかりバスの旅

黄泉の国どんな景色が楽しみや

父が居て母がいてカンナが咲いていた

風みどり佳い一日になりそう

三食を茶粥で修業した昔

水子塚風は淋しい子守唄

頑張りうわたしの代り誰もない

独り言聞かれ目が合い笑い合う

足早の幸せゆつくりの不幸

物忘れするのには爪はのびてくる

天地人恩をもらって生きている

付き合ひも少しドライがうまく行く

来年も見られますよう通り抜け

よかつたねいものように今日が来て

回りから恩情受けて今がある

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

尖閣にアジアの渦が押し寄せる

最北の島の恵に旅心

見捨てない島にあの娘がいる限り

住み慣れた島が私の玉手箱

漂着の島で見つけた青い鳥

この島に生まれて島の土になる

無理に筋通せば角が立つ話

張りつめた空気を破る呱呱の声

いそいそと厭な空気を置いて去ぬ

サイレンで何を語るか曼珠沙華

十二時を告げるサイレン里の四季

救急車の刻む音で鳴る

皆老いるわざわざ騒ぐ事じゃない

わざわざとお取り寄せしてお裾分け

わざわざと来られた裏にある事情

盆正月わざわざ贈る下心

知之

正雄

日の出

公平

すみ子

志華子

楓楽

桃花

舞夢

照子

紀子

小香

和香

克子

ほのか

泰女

大輪

准一

紀久子

英子

翠子

寿子

富美子

よしこ

秀子

紀子

佐一

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

新婚の家は覗いて見たくなり

優しさが欲しくてちょっと拗ねてみる

どきどきをした日を今も思い出す

忘れまい情に泣いた過去の日を

あのときの郷愁誘う軍歌です

心にも少しゆとりと言う情け

きつとある私ひとりの秘密基地

脇役の巧さで主役出来あがり

ふるさとの一日ゆつくり陽が沈む

きやらぼく川柳会(鳥取) 竹村紀の治報

花粉症一度罹れば後へ引く

安らぎの眼がある春の都市砂漠

春雨に心打たれるせつなさよ

団体とわかるリボンが付いてくる

春霞普段見慣れぬ人となり

罪深い人生ずっと続きそう

母さんのおにぎり梅がひそんでる

生まれもつ氣立てのよさは変わらない

強がりの茎も支えに頼り出す

優勝笑顔百万ドルの甲子園

一人暮らしの友が電話に出て来ない

二千円札出世待ってる箱の中

口にある飯の音さえ消費税

尖閣の幕引きしたいが紐がない

杉並木いまや花粉の生産地

記憶は色褪せることなく残ってる

ちよえ

かつ子

安子

澄子

はるみ

好栄

恵美子

英子

昌

初枝

瑞枝

ひろこ

公一

ひろし

宏之

鶴子

惠子

文子

壽子

多美子

幹啓

正二

千代

喜周

ジャムになるリングにもある自己主張
一族という団体で眠る墓

川柳さんだ(兵庫)

田中

童子報

沈没船とどん広がる疑惑の輪
老う度にどんどん私厚化粧
せつがちで先へ先へと仲間割れ
痛手衛生きろと能登の陣太鼓
反省は三途の川を渡る時
来世もきつとあなたと橋渡る
子の門出世間にもまれ渡る明日
家賃など取らぬにつばめ寄り付かぬ
想いとは飛ぶ鳥の如書く便り
その気持やつばり言うてほしいです

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

腹一杯みな吹き抜ける鯉のぼり
妻が逝き抜けがらの彼一周忌
抜ける空天に登るか鯉のぼり
難聴へあなたの声を溜めておく
穏やかに老いて感謝の現在地
止まるまでひたすら生きる磨きつつ
断捨離で四苦八苦したお引越
大見得を切ってしまった止まらない
亡夫の声耳を澄ませば聞こえそう
鼻歌が止まらぬ今日は絶好調
古希すぎて補聴器の友増えてきた
手話少し混せてもらって遠い耳
亡父亡母に逢いたい時は目をつむる
食卓へずしりときます消費税

岸和田川柳会(大阪)

佐藤

幸子報

蛙城

釣鐘の余韻のような恋の跡

見山

ひたすらに歩いた道もひと休み
止まったら転ぶんだと回る独楽
七坂を越えて学んだ一行詩
すれ違う亡母似の顔に立ち止まる
母の背を抜くには遙か遠い道
からからの心に沁みるありがたう
沈む日は歌がリセットしてくれる
怖くってシャックリ止まる君の顔
福耳も金に縁なく聞き上手
廃線の駅舎を癒す花水木
よく喋り聞く耳持たぬこの私
鳥だって優しい枝に止まります
3・11時が止まった原子村
聞こえたり聞こえなくなる勝手耳
子に五月手が花になり鳥になり
止まらないうれし涙の二本線
抜かれてもゆっくり生きる八十路坂

一言のタブーで終る愛もある
褒めるのはタブーますますつけ上がる
眼と耳は悪いが舌は達者です
幸せ者五感生き生きフアイト湧く
頂上に鎮座している孤独感
夕食はいつもあいてる父の席
後期高齢五感の味だけまだ達者
五感鈍り何をやってもどんくさい
切れ味を試して今日は薄造り
核試すそれがヒロシマだったのか
老いても五感全開趣味の道
木洩れ日のシャワーで五感溶けてゆく
逆風の時に試練だと思う

益祥

益祥

手すざびに恋の短歌を並べてる

ヨシエ

能子

和彦

和彦

和彦

傷口をちよいと舐めたら治る恋

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

打ち明けて遊びじゃないよこの恋は

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

独り占めしたくて高い化粧買う

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

ライバルと切磋琢磨の石を積む

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

窓際でデスク並べる好敵手

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

美男子を見れば敵意の湧く自分

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

エリートでないライバルの手が温い

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

スランプも分け合うライバルは同期

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

ライバルがいるから明日は面白い

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

栃若の時代感で見るテレビ

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

ライバルの眼鏡を借りて世間見る

幸香

和彦

和彦

和彦

和彦

和雄

道子

道子

ちあき

和宏

和宏

つな子

和宏

和宏

哲夫

和宏

和宏

正和

和宏

和宏

たもつ

和宏

和宏

一子

和宏

和宏

好文

和宏

和宏

千津子

和宏

和宏

ひとみ

和宏

和宏

能子

和宏

和宏

美穂

和宏

和宏

繁義

和宏

和宏

弘子

和宏

和宏

美恵子

和宏

和宏

武彦

和宏

和宏

和郎

和宏

和宏

茂弘

和宏

和宏

洋一

和宏

和宏

武臣

和宏

和宏

千賀子

和宏

和宏

盛夫

和宏

和宏

浩司

和宏

和宏

妙子

和宏

和宏

康子

和宏

和宏

英子

和宏

和宏

道子

加寿子

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

和宏

試したい心の間にリトマス紙
名刑事五感をいかしホシあげる

五感ともフル回転の料理人

しあわせは鈍い五感にあるのか

五感より第六感で危機逃れ

病名を聞くのはタブー友見舞う

禁止語と言葉狩りする恐ろしさ

わくわくを一杯詰めたバスボート

手の皸に主婦の涙の見え隠れ

頂きます五感揮わし京の膳

殺すこと死ぬこと試すのはアカン

今か今かと花火待つてる人の群れ

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

顔と顔合わせ絆の小商い

考えがまとまる頃に夜が明ける

点と点結ぶ絆の未来地図

カリスマの技で主役になった雑魚

悪いけどちよつと詰めてと座る癖

手術しかないと先生事も無げ

終電でいい訳ばかり考える

悪口は補聴器なしでよう聞こえ

腹ペコになると本気で考える

IQは低いけれども親思い

敏寄せはいつでも弱者小売業

爺ちゃん口は悪いが嘘がない

見切り時小売を止めて勤め人

花菖蒲委む懺悔という姿

バレットのピンクばつかり減ってゆく

大輔

忠太

たかこ

植代

洋

弘子

英夫

ひろ子

益男

みつ江

康信

義泰

恵子報

祥昭

博泉

高鷺

仁雄

秀雄

仁清

弘風

薫

弘一

かすみ

銀杏

郁夫

忠央

洋修

しがらみを濾過してカリスマを磨く

ひと晩中考え明日の服決める

悪人が神に目覚めてクリスチャン

悪口をつい滑らせた舌洗う

爽やかな目覚めだ今日も生きている

青空へ両手広げて同化する

スパーに負けず頑張りお豆腐屋

ふるさとも顔見しり店消えてゆく

考える余裕などなく子を育て

増税でアベノミクスは極まれり

訳あって悪の言い分聞いている

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

近頃は辞世の言葉グッドバイ

暇人が一番先に死ぬらしい

貧乏の底が一番暖かい

僕の財産ふるさとの酒と歌

人間も家もつかいか棒がいる

好きになろう私の暮らす町だから

深呼吸日本海を吸い上げる

離婚劇出雲の神に叱られる

望郷にとらわれど壺脱けられぬ

みそ汁とごはんを今日を立ち上げる

春の山から呼び出し状が来るころだ

トップにはいつもなれないカスミ草

母にとり皆一番の子沢山

飛び箱が苦手でいつも箱の上

頂点に立とうと気張るカタツムリ

柳弘

さち子

ルイ子

茜

朝子

賢子

美江

尚世

麗

鈍甲

恵子

照彦

芳山

石花菜

紀の治

芳光

楓花

くにこ

蟹郎

大鯨

麦青

美ツ千

寿代

野蒜

熊四郎

たえこ

幹啓

山菜の食べ過ぎ灰汁が強くなる

一番と思える国に住んでいる

たるんだ腹逆立ちしても戻らない

今朝もまた愚痴言う口紅をさす

温度差が風邪花粉症もて遊ぶ

一番に大切な妻呆けちゃった

雨が降り皆が喜ぶ運動会

有り余る時間を生かす策がない

スカートを結んで隠す食べよこし

宴会もいいがベストは独り酒

豊中もくせい川柳会(大阪藤井)

窮屈をぬけて空へと雛巢立ち

鈍感力家庭平和をとり戻す

ひとり住みさびしさ癒す犬を飼う

小銭入れ窮屈にする消費税

異文化を認めあつての国際化

灯りみなつけてさびしさ癒されず

窮屈な姿勢に慣れた縄のれん

さびしくて大きな丸を天に書く

舌鋒の鈍りの裏にスキヤンダル

残り時間窮屈はみな削除する

恥かいた体験談は大受けし

出合いから三年たった立葵

煩惱を捨てたお人の目が優し

魔屋を抱いているよな白い藤

窮屈な部屋が安らぐ習性

異性へは動悸あやしくまだおんな

真夏日がバツと顔出す五月晴れ

幸子

けいこ

風露

由紀子

恭子

重忠

久子

すみゑ

仁美

完司

則彦報

郁子

肇

庸佑

徹

美津子

(永)玲子

健二

ヨシエ

歌留多

千恵子

武彦

きりり

幹治

美佐子

勲

光枝

堅坊

タイガース強し血圧安定す

異端者が風向きを変え時を変え

たんぽぽに元氣もらつて万歩計

さびしい日図書館の椅子あたため

窮屈な雑魚寝いびきの主はだれ

初節句鯉も嬉しい五月晴れ

休肝日の決意にぶらすメール音

言われてみたい君は薔薇より素敵だと

鬼ごっこすぐに捕まる寂しがり

沈没を喰えぬフクシマの後始末

なでしこのパワースニアも奮い立つ

その時はじゃあお先にと手を振ろう

さびしくなんかなくしよ唇ふるわせて

異分子をもみほぐしましよ塩加減

決心がにぶらぬように衿を立て

窮屈な話へ酒を注ぎに行く

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦

風花は浄土の母の便りなれ

髪は毛は枯れたがアイディアは枯れない

一日を無駄に過ごして自己嫌悪

ど忘れも老いの勲章前進め

あいづちの打ち方一つで花も散り

愛犬がびたり寄り添う夫の留守

除雪する隣り近所が仲が良い

三月の涙に溶ける名残り雪

今日だけは花形でいる運動会

運動会白い鉢巻眠れない

大根もゴボウも今日はよく走る

武臣

則彦

美智代

千鶴子

見清

(岩)玲子

茂

久子

正彦

求芽

巴治

耕子

とーな

ばっは

靖子

鬼

氏加子

霜石

ふさゑ

龍人

和香子

一花

雅城

花峯

一呑

五楽庵

きよし

十人十色少年の夢果てしなく

試行錯誤日本一の立ネプタ

駄菓子やで孫と昭和を遊んでる

いろいろと仲間世話で古希迎え

持ち時間がわからないまま生きている

還暦を迎えて生きている貌になる

生きたとはテストテストで攻められる

健やかに生きて朝の飯が炊ける

生き様を背なで小さく燃やしてる

生きていけば国の宝に子等無念

独り身が好きなきではないひとり

それとなく生きて不思議な人生譜

それとなく言っております別れの日

酔客の前で何度も時計見る

それとなく心をおさえサヨウナラ

検査結果菌切れの悪い医師である

知れぬようボツケに詰めた恥の数

いつの間に家族となつていくコケシ

さよならの後に乾いた風が吹く

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷留美子

大任を背負つてからの不眠症

おとなしい主人に妻のマシンガン

手に余る想いを胸にだきしめる

大丈夫まだ背負えますこの涙

お姫様だつこは無理になつた妻

皆の苦を背負い夕陽が落ちてゆく

大変だ平和憲法根拠きに

直木賞目指す華麗な風が吹く

洋子

吞舟

黙人

つとむ

柳子

龍馬

井蛙

島

則彦

初枝

規子

花匠

美鈴

隆樹

小とみ

慕情

一湖

芳生

ひとし

小説の余韻を抱いて眠れない

わが歩み小説よりも深刻だ

小説に秘めた自分を描き出す

体験でボルノ小説書いてます

慎ましい生き様小説よりひしと

フィクションと分かり乍らも泣いている

どの窓を開けても風はみどり色

みどり葉が囁きだした春の風

新緑が僕の背中を押してくれ

虫よりもヒト科緑を食い荒らす

二上の山のみどりが美しい

みどり減りビルの林に泣く地球

店頭のみどり自慢の春野菜

五体にはないから欲しいみどり色

退院にみどりの風が心地よい

過疎だけど緑豊かな里が好き

ホワイトデーに戴きましたエメラルド

誰彼がいつい懐かしくなるみどり

ローズ川柳会(兵庫)

亀岡

哲子

あと少し足りぬ言葉で悔いばかり

月よ遊ぼう今日を忘れてしまいたい

日和下駄赤い鼻緒の大正つ子

子の未来平和であれと祈つて

出る喋る食べるが仕事老い楽し

減る筈がないのに階段又数え

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫

聞きたびに腹立たしいな珍鳥事故

龍一

清之

キー

六点

信二

英夫

悦子

アヤ子

みつこ

雄太

絹枝

フジ子

瑠美子

シルク

ヨシ枝

美代子

扶美代

義子

いわゑ

年代

藍

哲子

てる

昭好

聞くのいや酔った夫の長話し
福耳ですてきな便り聞きました
リッチです甘い話に乗るシニア
不自由な耳の代りに口達者
家計簿にランチ行けるか聞いてみる
甘い物好きで秤が怖くなる
くり返す言葉笑顔で聞く介護
明日はわが身とビーポーを聞く床の中
ときどきは言ってほしいワ愛してる
女房の本音聞くまで遺書かかぬ
嫁さんに甘えて知った心地良さ

京都塔の会

樹本 宏子報

奇数月いつも財布は軽いまま
転ばぬよう両手はいつも開けてある
連休に望むは消費活性化
転ぶ術一杯覚え丸くなる
横断歩道ひとり渡って来たモラル
父母も逝き自分モラルのプログラム
異常時にモラルの姿見えてくる
繁昌亭話芸のおちでよく転ぶ
連休は家でゆつくり庭掃除
財産とは金でないよと負け惜しみ
優先席でタスキ寝入りをするモラル
犬を飼うモラルを持って育ててね
モラル説く反面教師うようよと
七転びまだまだ転ぶだろ余生
連休はネコと寝ころぶ安息日
宝くじ財産出来たあぶく銭

保子 万紗子 文代 益子 葉子 弘子 宏子 義昭 忠子 則彦 かずお 弘子 英旺 求芽 悦子 廸子

積み上げた本の整理の連休日
怖いのはまさかといった転び方
飛び石の連休予定増えてくる
人として生きてゆく道守りたい
一期一会私のモラルありがとう
引き継がれ親からもらう子のモラル
失敗を笑うモラルはユーモアで
新参者のモラル問われるゴミ置き場
子供等が揉める財産残せない
消費税財産神経質になる
財も美田も無縁のまま定年日
転ぶたびひとつまみだが強くなる

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

青い星調子狂わす核一つ
霧閉気をお調子者が盛り上げる
迷い道矢印つけたのは母か
迷い道指にツバ付け風を読む
ワルツ踏む膝が調子は読えない
上昇気流乗った調子は続かない
移り住み若さが過疎の村おこし
歎を振る腕も調子に乗ってくる
信念がないので何時もそのままだ
住む世界違ってきたか沙汰がない
子は別居妻は施設で一人住む
頼られる杖一本でとるリズム
体調よし笑顔よしさあ戦場へ
調子いい話うっかり乗れません
順調に見せて悩みを抱いている

幸安 主一郎 一瑤 蟹郎 節子 忠良 たぬ 葛子 清帆 天翔 重忠 一粹 弘子 雅女 美恵子

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

向こう岸の人と今でも夫婦です
うれしくて昼から飲んでおりますの
虐待へ子供は親を選べない
うかうかと歳を重ねた悔いがある
値段から入る私の服選び
昼の顔夜の顔とは違う人
ご同伴夫のネクタイ選ぶ春
白寿まで夫婦でいたいとフト思う
スイッチオン点火が遅い老いの脳
俺俺にうかうかつられ金盗られ
クレン車に釣られて泳ぐ鯉幟
傘寿過ぎうかうかすると後がない
子供等を昼寝をさせて食事する
それぞれの自由は認め合い夫婦
老老の看護で見せる夫婦愛
バスの旅みんな寝ている昼下がり
定年後三食昼寝嫌み付き
うかうかとしてたら日本あぶないぞ
うかうかと段差を転ぶ尾骶骨
想定外お役所それで済ましてる

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

手持ち無沙汰なにかいたずらしたくなる
紙くずも貴重わたしの資料です
足腰が弱って沁みる人の情
言い訳が上手になつてからの鬱

房子 いわゑ 久仁雄 昌紀

ゆつくりと進む病気の落し穴
ゆうゆうと余生一日消して行く
宝です母と一緒にいた時間

口数の少なさは貴重品かも
振り向かず今日をポケットから捨てる
貴重品の夫預けて旅に出る

老いて未だ画布描き足りぬ事ばかり
時々のちゃんぼらんも貴重なり
化けたつもり化かしたつもり老夫婦
かけがえのない私世界にただ一人

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

めずらしく五句入選のうれしい日
只酒は飲むなあれほど言ったのに
隠しても目が泳いでる見やぶられ
最近に正体ちらりうちの嫁
わかったワストレスの素あんだやで
自販機にホットが消えて初夏の風
正体が解った狸の騙し合い
一つおぼえ一つ忘れて年かなあ
割りきれぬ愛の正体コルク栓
煽てられガラスの靴が脱げません
煽てられ有り金使う北新地
拍手喝采送り出される泥の舟
折りたたむ心のひだにある嫉妬
噂だけ勝手に抜手きつっている
このまんま平泳ぎではだめですか
本命の筈がまたもや三着か

光 久
たもつ
美智代
扶美代
千代
蕉子
智恵子
義子
みつ子
楓 楽
龜子
寛十郎
寿美子
富夫
洋子
よしひさ
幸香
雪菜
薦子
初音
柳明
里江
和子
野薫
ひとみ
正和

電車賃だけが残った競馬場
もう二度と騙されませんあの笑顔
正体はないが見守る夫の星
こりこりと思う亡父のこと株のこと
煽てられ押しして実印暴れだす
おだてるとバツとひらいたチューリップ
半世紀妻の意のまま泳いでた
好き勝手すると責任ついてくる
正体は私を照らす月の影
こりこりの酒に今夜も足が向く
死火山と思つてた妻活火山
煽てられ火中の栗をまた拾う
浜菊が脅え続ける海の影
お人好しおだてと知らずニコニコと
正体をあばき出した好奇心
カーネーションやめてケーキでお相伴
残照の海で泳いでいる余生
バワー全開するもしないも煽て方
トンネルを抜ける気配の風が吹く

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

九条を守り続けている野党
ときめきは小舟のように揺れ燃える
いだいた命だ再建を誓う
葉桜の揺れるテンポで夏を着る
闇抜けて知つた世間の裏表
漆黒の闇が辛い一日塗りつぶす
今日もまたやるぞと靴を光らせる
暗闇に飢えた人間寄ってくる

朋月
祐康
美也子
千津子
五月
宏造
純
りこ
キヨミ
茂
哲男
ヨシエ
哲夫
みつ子
光久
見清
比志
美籠
能子
柳弘
朝子
賢子
郁夫
仁
亜成
洋
博泉

事務所便り

五月号で、ホテル・アウイーナ大阪の
月例会へのご参加をお願いしております
が、無理な場合は是非、投句でのご参
加をお願い致します。投句用紙は、サイ
ズ自由で一般的な長方形、表に句を、裏
に記名、五百円切手を同封、句会日の前
月末までに事務所へ到着するよう、お出
しください。句会の結果は翌月の当誌に
掲載されます。
事務所では投句分を一覧にまとめ句会
場へ持ち込みます。土日祝日等が連続し
た場合、到着が遅れると、漏れる恐れが
あります。着日はくれぐれも留意願いま
す。
(山岡富美子)

忙しい人がちゃんと手紙書く
再建に8パーセント重荷です
父・母の折り届かぬ船の底
闇から闇ビットコインは駆け回る
一転の闇哀哭が響く海
国民の夢しほませて民主去る
闇深し一千兆の赤字高
重積の隅で始まる嫁いびり
再建は遙か遙かに街の鬱
浮動票これぞ野党の宝物
バイキングあれもこれも忙しい
葉桜やわたしは答出せてない

さち子
ルイ子
かすみ
博
麗
銀杏
鈍甲
仁清
壽峰
忠央
弘風
恵子

柳界展望

おにぎりのでかさは母の応援歌 両川 無限

★第11回大野風柳賞は三宅保州氏(理事・海南市)が獲得。

日という舞台 木本 朱夏

川柳研究社「しらゆき」六月号に「冬の陽炎」鑑賞文を執筆。

▽ご芳志御礼△

川柳同友会みらい会長賞

おとうとの靴の片方捜している 安土 理恵

近松の女に時間盗まれる 両川 無限

○コーキ封筒(株)より川柳雑誌・川柳塔90周年合同句集用封筒をご寄贈頂きました。

★平成26年度造幣局桜の通り抜け川柳には、応募

何建つていたか思い出せない更地 枯れることすらも許さ

虹はすぐ消えて豆腐と葱を買う 居谷真理子

○竹原川柳会より創刊90周年記念として金一封を拝受致しました。

同人天位次の通り。 世界から善男善女通り

他2句 墓地で見た虹は哀しいほどきれい

居谷真理子

▽新誌友紹介△

★第14回春はくろぼこ川柳大会は4月13日、鳥取市さんか会館で開催。

★西宮北口川柳会40周年記念大会は5月31日、西宮市プレラホールにて開催。参加者190名。同人秀句次の通り。

母になりました未来を生みました 居谷真理子

常任理事会 6月6日(金)

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

ゆつくりと白紙の地図と旅をする 三宅 保州

★福島弘子さん(同人・西宮市)は、第19回兵庫高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

ご近所に支えられてる 安堵感

★三宅保州氏(理事・海南市)は、第12期川柳マガジンクラブ誌上句会最優秀得点者入選回数最多獲得者に決定。

ときめいていますか今 三宅 保州

★木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は十日町

次回 7月7日(月) AM10時

★日光東照宮司賞準賞

私に奉祝の声飴する 米田 恭昌

大坂市 紹介者 大内 朝子

合同句集編集状況、その他 ②第20回川柳塔まつり・90周年記念川柳大会

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

幸福の扉を開くのはあな 大内 朝子

高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

合祀祭日程 ⑤定例確認事項 ⑥第66回大阪川柳大会

★三宅保州氏(理事・海南市)は、第12期川柳マガジンクラブ誌上句会最優秀得点者入選回数最多獲得者に決定。

ときめいていますか今 三宅 保州

★木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は十日町

次回 7月7日(月) AM10時

★日光東照宮司賞準賞

私に奉祝の声飴する 米田 恭昌

大坂市 紹介者 大内 朝子

合同句集編集状況、その他 ②第20回川柳塔まつり・90周年記念川柳大会

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

幸福の扉を開くのはあな 大内 朝子

高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

合祀祭日程 ⑤定例確認事項 ⑥第66回大阪川柳大会

★三宅保州氏(理事・海南市)は、第12期川柳マガジンクラブ誌上句会最優秀得点者入選回数最多獲得者に決定。

ときめいていますか今 三宅 保州

★木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は十日町

次回 7月7日(月) AM10時

★日光東照宮司賞準賞

私に奉祝の声飴する 米田 恭昌

大坂市 紹介者 大内 朝子

合同句集編集状況、その他 ②第20回川柳塔まつり・90周年記念川柳大会

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

幸福の扉を開くのはあな 大内 朝子

高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

合祀祭日程 ⑤定例確認事項 ⑥第66回大阪川柳大会

★三宅保州氏(理事・海南市)は、第12期川柳マガジンクラブ誌上句会最優秀得点者入選回数最多獲得者に決定。

ときめいていますか今 三宅 保州

★木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は十日町

次回 7月7日(月) AM10時

★日光東照宮司賞準賞

私に奉祝の声飴する 米田 恭昌

大坂市 紹介者 大内 朝子

合同句集編集状況、その他 ②第20回川柳塔まつり・90周年記念川柳大会

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

幸福の扉を開くのはあな 大内 朝子

高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

合祀祭日程 ⑤定例確認事項 ⑥第66回大阪川柳大会

★三宅保州氏(理事・海南市)は、第12期川柳マガジンクラブ誌上句会最優秀得点者入選回数最多獲得者に決定。

ときめいていますか今 三宅 保州

★木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は十日町

次回 7月7日(月) AM10時

★日光東照宮司賞準賞

私に奉祝の声飴する 米田 恭昌

大坂市 紹介者 大内 朝子

合同句集編集状況、その他 ②第20回川柳塔まつり・90周年記念川柳大会

★渡辺富子さん(理事・奈良県)は、153回川柳マガジン柳壇大賞を受賞。

幸福の扉を開くのはあな 大内 朝子

高齡・退職者川柳祭典特別賞・兵庫県知事賞を受賞。

合祀祭日程 ⑤定例確認事項 ⑥第66回大阪川柳大会

第45回 奈良新聞川柳大会

日 時 7月27日(日) 10時開場
会 場 奈良県文化会館 小ホール
TEL 0742-23-8921

席 題 「 」 大西 將文 選
宿 題 「たっぷり」 居谷真理子 選
「近 い」 大楠 紀子 選
「弾 む」 牧浦 完次 選
「 寺 」 藤原 一志 選
「ゴースト」 阪本 高士 選
「無 理」 西川 國治 選
「ひらめく」 田中 新一 選

各題2句 出句締切 11時30分

会 費 3000円(昼食・発表誌呈)

出席申込み 7月10日まで 下記へ

〒630-8686 奈良市法華寺町2-4

奈良新聞社文化事業課川柳大会事務局係

TEL 0742-32-2115 FAX 0742-32-2774

欠席投句 1000円(切手不可)同封下記へ

〒639-1101 大和郡山市下三橋町323-61

阪口 幸一 宛

締 切 7月10日(当日消印有効)

主 催 奈良新聞社

第32回 夜市川柳大会

と き 平成26年7月31日(木)

開 場 10時30分 出句締切 12時30分

セモノー 1時30分 披 講 2時

句会終了 4時30分(予定)

と ころ 堺市総合福祉会館5F・大研修室

会 費 2000円(軽食・お茶・賞品多数)

課題と選者(各題2句)欠席投句拝辞

「打 つ」 羽曳野 井上 一筒 選

「だんどり」 茨 木 藤井 正雄 選

「比 べる」 堺 内藤 則彦 選

「相 手」 貝 塚 石田ひろ子 選

「任 す」 羽曳野 徳山みつこ 選

「失 う」 鳥 取 新家 完司 選

「 絵 」 藤井寺 太田扶美代 選

「 呷 える」 和歌山 古久保和子 選

事前投句 締切 7月25日 はがき2句

「ばたばた」 堺 河内 天笑 選

投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

河内 天笑 宛

「 花 」 堺 河内 月子 選

第61回 八尾市民川柳大会

と き 8月24日(日) 正午開場

と ころ 八尾文化会館5F

プリズムホール

会 費 1,500円(作品集・鉢植え花)

宿 題 各題2句 出句締切 午後1時

「 恋 」 中村 恵 選

「 器 」 萩野 浩子 選

「 歌 」 菱木 誠 選

「 生 」 川端 一歩 選

「 気 」 片岡 湖風 選

「 水 」 村上 氷筆 選

「 父 」 土田 欣之 選

懇親宴 4,000円(当日受付)

お問合せ 土田欣之(Tel 072-992-4934)

主 催 八尾市民川柳会

第17回 鳥取県川柳文芸大会

日 時 7月13日(日) 午前10時開場

場 所 新日本海新聞社 5階ホール

(JR鳥取駅 南口から徒歩3分)

兼題と選者

「なかなか」 水 野 黒 兎 選

「 敵 」 中 村 和 選

「揺れる」 尾 上 八 重 選

「ストップ」 山 本 鐘 麿 選

「うっかり」 山 松 みち子 選

「留 守」 山 下 蟹 郎 選

「切 る」 能 見 慶 一 選

「ラッキー」 山 下 凱 柳 選

席題なし 出句 各題2句 当日締切 11時30分

会 費 当 日 2,000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1,000円(大会誌)

欠席投句締切 7月8日(当日消印有効)

用紙自由(事務所にて清記)

投句先 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110

夏目 一粋

第17回 鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	15日(火) 13時30分締切 他人・バトカー・転ぶ あちこち・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田川柳会	19日(土) 14時締切 星・気付く・もしも・ポーズ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔みちのく	19日(土) 17時締切 朝・ぎらぎら・重なる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦
川柳ねやがわ	20日(日) 14時締切 回る・豊か・エリート・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳藤井寺	20日(日) 14時締切 炎天・ジョーク・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	21日(月) 13時40分締切 半分・納める・堅い・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曾根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブわたの花	25日(金) 10時締切 遊ぶ・玉・手応え・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔すみよし	26日(土) 14時15分締切 記憶・コロコロ・賭ける	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山三幸川柳会	26日(土) 12時30分開場 そろそろ・満足・コンビ	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの市川柳会	27日(日) 14時締切 草・飾る・くるくる・ユーモア	陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	27日(日) 13時30分開場 ビッグ・泥仕合・いざ行かん	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	28日(月) 18時開場 天狗・ひっかく・回りくどい ちょぼちょぼ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	28日(月) 14時締切 レシート・次・生きる	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露川柳会	28日(月) 19時30分締切 山・歳月・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	3 日(木) 14時締切 拾う・枕・選手	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 さ か い	4 日(金) 13時開場 世間・蹴る 折り句＝ういの	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
城 北 会 川 柳 会	5 日(土) 14時締切 例外・崩れる・ゆったり 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	5 日(土) 14時締切 霊・スクリーン・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	5 日(土) 14時締切 注目・叶う・外す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	5 日(土) 13時45分締切 音・浮く・高い・逃げる	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 あまがさき	8 日(火) 14時締切 歌う・流儀・こそこそ・自由吟	尼崎女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	8 日(火) 13時30分締切 海・似る・さっぱり	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	11 日(金) 14時締切 落ちる・赤・微笑・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	12 日(土) 14時締切 甘い・雨・半分	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	12 日(土) 14時締切 空・刺す・ずるずる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	13 日(日) 14時締切 炎天・空・飲む・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR八尾駅 徒歩2分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わ か や ま 吟 社	13 日(日) 14時10分締切 兼 題＝署名・モノクロ・のこのこ 課題吟＝刃物	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	14 日(月) 14時締切 体・悩む・がつん・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池10-18-104 福島弘子

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0084 西宮市槌之池町10-18-104 福島弘子

亀株片長小緒江梅上井市伊石足浅秋奥西
岡元山川倉方谷澤垣上坪田原立野元田口

哲玲 哲 美勝盛キじ武 歳 房てみい
子子忠夫藍子弘夫ミう臣毅子茂子る子ゑ
津ヨろ

春能西難七長富都田竹白酒小黒蔵久北河
城勢内波田浜山倉中山川田林田田田野井
年利朋伯順美ル求章千淑浩わ能光千哲庸
代子月備子籠子芽子子子司こ子子代男佑
反イ

両山山山山山山丸松松牧堀古藤藤藤福
川本田田崎崎口山下井瀏 川本岡井島
無義婦耕武君光一比文富正奮 り宏弘
限子子治彦子久之志香子和水直こ造子
美

暑中お見舞い申し上げます

竹 原 川 柳 会

祝 創刊90周年

会 長 小 島 蘭 幸

監 査 時 広 一 路

会 計 岩 本 笑 子

古 田 太 虚

石 原 淑 子

山 内 房 子

ほか会員一同

暑中お見舞申し上げます

富 柳 会

前田 登子	小野 紅紫朗	林 澄子	藤田 武人	栃尾 奏子	中村 恵	関 よしみ	山野 寿之	古田 千華	中崎 深雪	中井 アキ	池 森子
	他 一同	田嶋 伸雄	佐々木 七朗	岸本 慶子	松本 正治	廣谷 千恵	中島 華	井澤 寿峰	久世 高鷺	石橋 未知	河野 彦次

暑中お見舞い申し上げます

河内長野市川柳協会

肥山	松岡	谷	梶原	石田	木見谷	山室	黒岩	坂上	村上	山岡	水谷	會員有志	顧問 板尾岳人
一	篤	久美子	弘光	隆彦	孝代	光弘	靖博	淳司	直樹	富美子	正子		

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし

会 員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町 4 2 3 伊藤 玲子 方
TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長 両 川 洋 々

会 員 一 同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中 村 金 祥

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会 場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 福士慕情

副主幹 小寺花峯

相談役 森中恵美子

顧問 波多野五楽庵・斉藤 崂

浅田隆樹・石岡初枝・稲見則彦

岩淵黙人・岡本花匠・加藤柳子

工藤龍人・香田龍馬・小枝ふさゑ

境きよし・佐治氏加子・清水小とみ

須郷井蛙・相馬一花・高瀬霜石

高橋洋子・高森一吞・田沢つとむ

田中一湖・中山雅城・野呂吞舟

肥後和香子・廣島綾子・福村美鈴

松山芳生・吉川ひとし

暑中お見舞い申し上げます

翠洋会

浅井公平 高杉千歩

安土理恵 谷口義

安福和夫 辻内げんえい

阿部紀子 津村志華子

井上照子 寺井弘子

岩本浩二 西出楓楽

榎本日の出 原田すみ子

榎本舞夢 藤井正雄

大川桃花 前川善之

大久保眞澄 山本希久子

太田昭 横山捷也

奥田みつ子 吉田知之

古今堂蕉子 米田恭昌

小谷集一 渡辺富子

佐々木満作

初心者にもベテランにも役立つ！

川柳の理論と実践

B 6 判・326頁 税込 1680円（送料込 2000円）

新家完司川柳集（六）

平成二十五年

税込 1050円（送料込 1000円 + 80円切手 3 枚）

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司

TEL0858-52-2414 FAX0858-52-2449

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

北扇片都小矢山堀加軸藤古酢村松木奥松山西長
野野山倉熊野本 川丸田川谷山村村村下田内浜
哲^{よし}かず^{ひさ}求江野幸正靖勝雪^亀あ^美里^比江子^五月^ろ志^耕治^朋月^美籠^籠
男お芽美薫香和鬼巳菜水子り江子月志治月籠

川平竹藤内北山長酒江阿田九大大上中大渡大上谷
端井林岡田川川井見野原鬼浦田久保井辺岸垣
萬富千代り美ヨシ哲健見寿寛洋初ひと泰茂柳和キ祐
子夫子こ子純エ夫二清子郎子音み子幸明子ヨミ康

暑中お見舞い申し上げます 平成26年 盛 夏

川 柳 塔 さ か い

会 長 河 内 天 笑

米澤 矢倉 向井 升成 増井 ヨシ 日野 清 原 朋 西 内 みつこ 徳山 和幸 田部 紀子 高木 世紀子 柴本 ばっは 齋藤 さくら 古手川 光 河内 月子 奥 時雄 太田 扶美代 大久保のん子 榎本 日の出 出海 素頼馬

山本 村上 宮本 増田 伏見 樋口 西村 りつえ 中野 健吾 遠山 唯教 谷川 誠一 島田 敏治 澤井 永久 小山 八千代 源田 和夫 柿花 篤子 大谷 としお 太田 舞夢 榎本 澄空 梅木 空

暑中お見舞い申し上げます

日川協加盟 **川柳同友会みらい**

会 長 鈴 木 公 弘 (理事)

日川協加盟 **くろぼこ川柳会**

会 長 稲村 遊子 (同人)

第15回 春はくろぼこ川柳大会は
2015年(来年)4月5日(日)開催の予定です。
引き続きご支援をお願い申し上げます。

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

安井	森口	本田	藤井	内藤	伊達	竹森	大堀	碓氷	池田	井上	足立	世話人	代表
英華	美羽	智彦	満洲夫	光枝	郁夫	雀舎	正明	祥昭	武彦	かれん	淑子		磯野いさむ

※会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

吉	山	仁	坂	北	岩
富	口	部	本	村	崎
節	高	四	蜂	哲	
子	明	郎	朗	男	實

川
柳
塔
唐
津

暑中御見舞
申し上げます

暑中お見舞申し上げます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎	藤沢長一	小牧信男	高嶋勝	宮田輝	田中螢柳	藤原桂子	米原雪子	栗田久子	寺井柳童	多田契子	中山春代	神野宇乃子	松尾美智代	笠田幹治	池田純子	貝塚正子	荒木郁子	樋口順子	南正代	上田陽子	飯牟禮久仁子
------	------	------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	-----	------	--------

句会 第二火曜日 午後一時より
勉強会 第四火曜日 午後一時より
場所 豊中市蜷池公民館

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会長 前 たもつ
会員 一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から（8時終了）

暑中お見舞申し上げます

川柳塔なら

大内朝子	米田恭昌	中原比呂志	坊農柳弘	江島谷勝弘	森中博一	高畑おたか	中西賛郎	居谷真理子	渡辺富子	安土理恵	飛永ふりこ	加門萌子
------	------	-------	------	-------	------	-------	------	-------	------	------	-------	------

会員一同

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬

吉村	山本	山本	山本	山口	松尾	前	西村	西出	西口	長浜	古今堂	久保田	片岡	奥田	太田	井丸	浅野
久仁雄	義子	希久子	加お里	光久	美智代	たもつ	哲夫	楓楽	いわゑ	美籠	蕉子	千代	智恵子	みつ子	扶美代	昌紀	房子

暑中お見舞い申し上げます

川柳さんだ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時・三田市中央公民館

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

森田	藤原	坂東	永井	津村	小林	神夏磯	江島谷	近藤	伊達
	千恵子	倫子	縣	志華子	杵香	典子	勝弘		郁夫
麗		子	作					正	

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会 員 一 同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春 木 圭 一 郎
TEL 0857-24-2834

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長 塩満 敏 会員一同

暑中お見舞

申し上げます

川柳茶ばしら

早川 遡 行

板 山 まみ子

金 子 美千代

関 本 かつ子

暑中お見舞申し上げます

鳥取県川柳作家協会

会 長 森 山 盛 桜

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180
TEL.0857-82-1491

暑中お見舞申し上げます

川柳塔鹿野みか月

会 長 森 山 盛 桜

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

川柳ささやま 一同

代 表 遠 山 可 住

和歌山県川柳協会

和歌山県川柳大会を9月27日(土)に開催します。
ご参加をお待ちします。

会 長 三 宅 保 州

副 会 長 川 上 大 輪

【お問い合わせ先】 事務局 長 古久保 和 子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

暑中お見舞申しあげます

和歌山三幸川柳会

主 幹 三 宅 保 州

副主幹 古久保 和 子

副理事長 喜 田 准 一

理 事 田 中 み ね

玉 置 当 代

川 上 智 三

楠 見 章 子

武 本 碧

磯 部 義 雄

事務局 〒640・8111

和歌山市新通七―一七

TEL 073・423・8930

古久保 和 子 方

例会 毎月第四土曜日 12時30分

和歌山商工会議所

「バス停 和歌山市役所前」

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 打 吹

会 長 牧 野 芳 光

会 員 一 同

事務局 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧 野 芳 光
TEL 0858-23-0104

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石 橋 芳 山

同 人 一 同

連絡先 〒690-0001 松江市東朝日町206-7
石 橋 芳 山 方
TEL. 090-2003-5846

暑中御見舞

申し上げます

六甲川柳会

メダ力の学校

世話人

井 上 忠 貞
梅 澤 盛 夫
興 水 弘
竹 山 千 賀 子
山 崎 武 彦

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きやらぼく

会 員 一 同

事務局 〒683-0804 米子市米原5-1-3-304 竹村 紀の治
TEL 0859-21-7656

皆様ご自愛くださいませ

川柳藤井寺

川柳みささぎ

代表 高田美代子 会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-155

TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

暑中御見舞

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

岸和田川柳会

飯	荒	児	小	林	次	助	沖	仲	中	藤	増	雪	岩
田	木	玉	島		井	川		谷	岡	原	田	本	佐
忠	は	俊	笑	つかさ	義	和	泰	弘	香		隆	珠	ダン
太	る	昭	司		泰	美	弘	子	代	昭	昭	子	吉
米	山	森	向	宮	三	松	不	林	堤	土	鈴	佐	稲
富	本		井	野	宅	岡	破			橋	木	藤	葉
淳	蛙	龍		みつ	保	浅	仁	力	檜	房	益	幸	
風	城	子	清	江	州	子	緑	子	代	枝	子	子	洋

木津川 計著

『ことばの身づくろい』

話す為に・書く為に

日本語を愛するがゆえの熱い思いが
全編に横溢している。(序文・難波利三)

ことばの 身づくろい

— 話す為に・書く為に —
木津川 計

日本語を愛するがゆえの
著者の熱い思いが全編に
横溢している。

難波利三

B 6 判 352頁
定価 (1,429円+税)

目次から

- 1 ことばの化粧とことばの襟
- 2 心配りのことば学
- 3 知識の宝庫としての漢字
- 4 ユーモアなくして生きられない
- 5 ことばにどう向き合うか
- 6 土地の文化を生み出した地域語(方言)
- 7 ことば遣いの達人に学ぶ
- 8 ことばへの無関心

発行 『上方芸能』出版センター

TEL 06-6441-3337
FAX 06-6447-0900

江戸のヒーロー、

98人と1組と1匹を可笑しがる!

『江戸川柳おもしろ偉人伝一〇〇』

小栗清吾 著



目次

- 第一章 女形のはじまりは日本武尊!?
- 第二章 江戸っ子は人真呂で目を覚ます!?
- 第三章 清少納言は煙たい女だった!?
- 第四章 弁慶はお出かけ前に大忙し
- 第五章 元旦にとっても迷惑な一休さん
- 第六章 生煮えの五右衛門一首ひねる
- 第七章 家康はトラの化身だった!?

平凡社新書

定価: 本体八〇〇円(税別)

江戸時代の、人と酒のこまごまとした
かわりを知ろうとするとき、その資料
として川柳に勝るものはない。

◆ 川柳で覗く江戸の酒事情 ◆

『江戸 酒の文化』

清博美 著



B 6 判 232頁
定価 1,300円+税

目次

- 第一章 江戸で飲んだ酒
- 第二章 酒と職業
- 第三章 酒と容器
- 第四章 四季折々の酒
- 第五章 年がら年中酒
- 第六章 酒の肴に酒と故事

発行所 川柳雑俳研究会

〒419-0313 静岡県富士宮市西山1417-2
TEL/FAX 0544-651026
振替 002301217459
URL http://www.edosha.com/

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔すみよし

会長 鶴田 遠野

例会 毎月第4土曜日（但し会場の都合で変更になる場合もあります）

大	大	榎	榎	江	宇	内	魚	岩	井	板	磯	石	石	荒	荒	浅
川	内	本	本	島	都	田	住	崎	丸	尾	島	丸	橋	川	川	井
桃	朝	舞	日	勝	満	志	順	公	昌	岳	福	正	直	博	繁	公
花	子	夢	の出	弘	知子	津子	子	誠	紀	人	貴子	太郎	子	行	子	平
柴	澤	阪	坂	古	甲	吉	北	川	河	奥	奥	大	大	大	大	大
本	田	井		今	田	川	村	端	井	村	田	西	谷	隅	久	治
ば	定	美	裕	蕉	靖	哲	賢	一	庸	五	チ	晴	篤	克	の	重
っ	子	世子	之	子	子	矢	子	歩	佑	月	エコ	雄	子	博	ん	信
は																
藤	藤	橋	萩	西	長	中	中	中	土	鶴	谷	田	田	立	田	高
原	島	本	尾	村	浜	島	尾	井	井	田	川	中	中	石	口	杉
	た	典	紀	り	美	栄	伸		舞	遠	安	ゆ	廣	郁	和	千
昭	か	子	子	つ	籠	子	子	萌	蹴	野	昭	み	子	子	代	歩
	こ			え								子	子	子		
		宮	若	山	山	山	矢	森	森	村	宮	宮	増	増	堀	坊
		村	本	本	根	岡	倉	松	松	田	本	崎	田	田	田	農
		満	安	半	妙	富	五	芳	ま	恵	か	シ	啓	隆	温	柳
		寿	代	錢	子	美	月	香	つ	子	り	マ	次	昭	子	弘
		恵							お		ん	子				



川柳雑誌・川柳塔 創刊90周年

暑中お見舞い申し上げます

編集部

山	森	鈴	江	木
本	松	木	島	本
柳	まつ	い	勝	朱
昌	お	さ	弘	夏

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 社

名誉主幹 主幹 理事長 副主幹 副主幹 副理事長 副理事長 常任理事

森	水	山	佐	古	片	居	足	鶴	木	河	新	川	西	小	河
松	野	崎	々	今	山	谷	立	田	本	内	家	上	出	島	内
まつ	黒	武	満	蕉	かず	真	遠	朱	月	完	大	楓	蘭	天	
お	兎	彦	作	子	お	理	野	夏	子	司	輪	楽	幸	笑	

森	松	坊	鈴	坂	久	柿	江
村	原	農	木	保	田	花	島
美	寿	柳	い	裕	千	和	勝
花	子	弘	さ	之	代	夫	弘
			お				

川柳塔社常任理事会

編集後記

★路郎の忌 白の鉄線一花でよし 蕉風

★7月7日は麻生路郎の五〇回忌。「刻下の路郎」をご執筆くださった高鶴礼子さんは「ノエマ・ノエシス」主宰。高鶴さんとは数年前、新潟の「柳都」の大会が初対面。

★高鶴さん編集のノエマ・ノエシスには「アルジェリア・レポート」「エヴァンゲリオン序説」など、川柳以外の評論、エッセイが満載。高鶴さんの人脈を存分に生かした誌面は魅力的だ。高鶴さんのような若い人が、今後の川柳界をリードしてくださることを期待している。

★テレビで放映中のサザエさんは私も好きで楽しんでる。サザエさんは歳をとらないけれど、サ

ザエさん役の声優加藤みどりさんは七四歳。イクラちゃん初め、他の声優陣にも、高齢化の波は押し寄せているらしい。

★以前にも書いたが我が家の近くの団地の公園や空き地は、すべて駐車場になった。住人よりも車の方が増えたのでは……と危惧する。またデイスアービスの小型車をよく見かける。「介護ステーションしあわせ」なんて切ないネーミングだ。

★人口の4分の1が六十五歳以上という高齢化社会は、ずいぶん以前から予測されていたことだ。右を見ても左を見ても前後を確かめても、高齢者ばかり……とはいえマイナス面ばかりではあるまい。高齢者の経験や智慧や、技術を生かす道を、若者と共存共栄する道を模索するべきではないか。

ひとこと

きやらぼくの一步

四月十六日「きやらぼく」川柳会は、「米子住吉川柳会」と合併して初句会を開催しました。

「きやらぼく」の創立について八木千代さんは、本誌二月号の「追悼垂弥さんときやらぼく」に「昭和三十八年私と林瑞枝さん、石垣花子さん（政岡未延子さんの母上）と三人で「きやらぼく」の苗を植えた」と書かれています。今年で

五十一年目を迎えました。

このたび「きやらぼく」川柳会の会長就任に当たり、身の引き締まる思いです。皆様のお力をお借りしまして、重責を果たしたいと思ひます。

会員一同今後ともご鞭撻ご指導の程お願い致します。私に川柳を勧めてくれた妻の七回忌を十九日に済ませて、四月が終わりました。

（竹村紀の治）

★高齢化よりも少子化の方が問題だろう。最近ほとんど妊婦さんを見かけない。次世代を担う子どもを産み、育ててくような社会インフラを聞くと、うれしさがこみあげて来るけれど、早急に整備する必要がある。それが延いては川柳界に若い血をそそぎ、活力を与えてくれるのは……なんて我田引水か。

（朱夏）

□「川柳雑誌」第四号（大正十三年五月発行）

身に沁みる後記である。

□七月七日（月）は川柳塔

参加をお願いしたい。

（勝弘）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(9月号)

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「やさしい」(7月15日締切)

9月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B

A

B

A

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸 選
水煙抄 (8句) 西出楓 選
愛染帖 (3句) 新家完司 選
檸檬抄「やさしい」 (2句) 牧野芳光 共選
古久保和子 選
一路集 (3句) 「こだわる」 奥田みつ子 選
「インテリ」 中村金祥 選
「逆転」 松尾美智代 選
初歩教室 「狹い」 (3句) 山口光久 担当

9月号発表 (7月15日締切)

10月号
檸檬抄「パン」
一路集「斜め」「コピー」
「管理」
初歩教室「沈黙」

路郎50回忌記念句会

とき 7月7日(月) 13時開場・13時40分締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「路郎を聴くから路郎を聞く」
兼題「人並み」 新家完司 選
「見渡す」 山岡富美子 選
「ばらばら」 両川無限 選
「涼しい」 植野美津江 選
「未練」 小島蘭幸 選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社8月句会

7日(木) 午後1時から

兼題「小銭」「頼む」「ビール」
「互い」「隙」

第33年度 夜市川柳募集

第2回「避ける」村上水筆 選
ハガキに3句 7月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料94円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一四年平成二十六年七月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇四一四九八七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生路郎作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四一二九八四七九番